

---

**え？代表？私ですかぁ？！**

rockless

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

え？代表？私ですかあ？！

### 【Nコード】

N7658R

### 【作者名】

rockless

### 【あらすじ】

Fクラスの代表になった女の子、音尾奏の物語

## 主人公設定

名前 音尾 奏

なまえ おとお かなで

身長 大きすぎず小さすぎず

体型 極々普通 (胸も普通)

性格 内気? 泣き虫

特技 楽器演奏 吹奏楽部所属でピッコロ担当 演奏の腕はピカイチだが表現力は年相応な感じ

好き 自分を支えてくれるみんな

嫌い 泣き虫の自分

## 概要

バカのFクラスの代表をすることになった女の子  
見た目は超守ってあげたくなる系の容姿  
雄二と同じ中学で1回だけ話をしたことがある(雄二は覚えてない)  
召喚獣が特殊なため学園長に目を付けられている  
将来の夢は演奏者で食べていくこと

## 成績

本当はDクラス中位から上位?くらい

目立った得意不得意はなく、全教科100～140点くらいで総合1200点辺り

Fクラスになったのは寝不足でちょっと不調だった

もし音楽で試験（実技ではなく学科で楽譜の読み方や音楽史、その他音楽に関する知識総合の試験）があつたら700点台は軽く出せる

## 召喚獣

格好

文月学園のではないブレザーの学制服

武器

狩猟笛（もちろん音もでるし音階もちゃんとある）

武器の特性として演奏効果がある

演奏効果

狩猟笛で曲を演奏することにより同一召喚フィールド内にいる同じクラスの召喚獣の攻撃、防御、機動性能が上昇。しかし点数自体が増えるわけではない

曲の難易度で上昇率が変わる（下はカエルの歌やチャルメラから上は難しいクラシック曲まで）上昇率は奏の召喚獣の点数（始めの点数で戦闘で点数を削られても演奏効果に影響しない）を基準にして最低で1%分の性能プラスで最高は不明（奏の召喚獣の操作技術でできる最高は通常は300%位だがあることをすればそれ以上いくことができる）

演奏ミスは上昇率減少で、ミスの度合いで1～100%減少するがマイナス（召喚獣の性能低下）は無い

演奏を始めればすぐ効果が出るわけではないが、その分止まってし

まってもすぐに効果が切れるということでもなく、効果が持続中に演奏を再開すればラグ無しで効果延長ができる（ラグは1分ぐらい）

腕輪

出す予定は無いが、あるとしたら音波による全方位攻撃かな？敵味方はクラスで判別かな

## 主人公設定（後書き）

名前は

音を奏でる おとおかなで 音尾奏

です

そのまんまですネ

## 01話

文月学園・・・ここに入学して2回目の4月が来ました  
私はいつもより少し早く、そしてちょっと早足で学校に向かってい  
る途中で

なぜなら今日はクラス分けの結果が出るのです

「おはよう音尾。いつもより早いな」

「お、おはようございます。に、西村先生」

校門で大柄の男の先生に挨拶される。うう・・・怖い・・・

「いい加減俺を見て怖がらないで欲しいのだが・・・ホレ結果だ」

「は、はい。ありがとうございます」

クラス分けの結果の入った封筒を受け取り校舎に向かいます

「前日夜更かししちゃったから振り分け試験のときちょっと眠たか  
ったけど・・・まさかFクラスなんて無いよね・・・」

そう言いながら私は封筒を開けて中の紙を開きます

F(代表)

え・・・Fクラス？しかも私が代表・・・  
ど、どうしよう・・・

「ここがFクラス・・・」

Fクラス教室に入るとまだ早かったので誰もいません。そのせいか周りのボロボロさがより酷く見えます・・・

割れた窓にカビの生えた畳、今にも壊れそうな教卓と机代わりの卓袱台、気休めにもならなそうな薄い座布団・・・

適当なところにポツンと1人座って・・・

「うつ・・・うつ・・・ええええん・・・」

私は卓袱台つくえに伏せて泣きました

「私・・・グズツ代表なんて無理だよ・・・」

『おつかしーなあ・・・あの点数で代表は確定だったはずなのになあ・・・』

しばらく泣いているとほかのFクラス生徒が来たみたいです・・・  
私は慌てて涙を拭く

ガラッ

「うつわ・・・酷いなこりゃ・・・ん？お前泣いてたのか？そりゃこんな酷い教室じゃ泣きたくなるよなあ・・・」

教室に入ってきた少し大柄な男の子に声をかけられる・・・  
あれ・・・この人・・・

「坂本君？」

「あ？なんで俺の事知ってたんだ？」

「同じ中学校だった音尾です・・・覚えてませんか？」

「いや、まったく」

「そんな・・・1回だけど話をしたこともあったのに・・・ふええ  
えん・・・」

「ちよっ！おまつ！悪かったって・・・でも本当に覚えてないんだ。  
スマン、この通りだ」

私が泣き始めると坂本君が卓袱台に付きそつなくらい頭を下げてき  
ました・・・

「グズツ・・・ヒント・・・あげますから思い出してください」

「ヒント？」

そうやって私は持ってきた楽器のケースを開けて楽器を取り出します

「フルート・・・にしては小さいな。ピッコロってやつか？」

「正解です。まだ思い出せませんか？」

「・・・悪い、もうちょっとだけヒントを」

「・・・ならあの時吹いてた曲を吹きます」

〽  
〽  
〽  
〽  
〽  
〽

吹き終わるころにはまた少し生徒が来ていて私の演奏に拍手をくれました

「・・・思い出せましたか？」

「・・・ダメだ思い出せん・・・でもどっかで聞いた気も・・・」

「これ以上はヒントがないです・・・ふええええん・・・」

「だからスマンって」

「坂本、なに女の子泣かしてんのよ?!」

「いや島田これは・・・」

私がまた泣き始めると女の子が来て坂本君に声をかけました  
私以外にも女の子がいるんだ・・・

「私・・・ヒック、以外にこのクラスに・・・グズツ女の子がいる  
んですね・・・」

「ウチは島田美波よ。よろしくね。なんで泣いてたの?」

「私と坂本君・・・同じ中学校だったんですけど・・・私のこと覚

えてなくて……」

「可哀想に……坂本ったら酷いわね」

島田さんが私の頭を撫でながら坂本君を非難します

「そんなこと言われたって1回しか話したことがないって言うし……」

「ん？随分と賑やかじゃのう……？」

そこに独特の言葉遣いの中性的な声が聞こえてきました

「お、秀吉」

「木下あんたもこのクラス？」

「うむ、そうじゃ部活に熱中しすぎてのう」

声の主は可愛い外見の……

「女、の子……？」

「わしは男じゃ！」

「ひっ……ごめんなさい」

「ああスマヌの、ついついいつもの調子で怒ってしまったの」

性別を間違えてしまい相手の人が怒るが泣きそうな私を見て謝って

きました

「い、いえ……」

「わしは木下秀吉じゃよろしく」

「音尾奏です……島田さん、木下君よろしくお願いします」

「うむ、よろしくじゃ」

「美波でいいわよ。このクラス女子少なそうだし仲良くしましょ」

「はい……美波、さん」

「呼び捨てでもいいけど……まあいいわ、奏って呼んでいいわよね」

「はい、いいですよ」

美波さん……明るくてしっかりしてて……お姉ちゃんって感じだなあ……

「そういえば、このクラスの代表って誰か知ってるか？」

「ウチは知らないわ」

「わしも知らんの」

坂本君がずっと気になってたのか、そんな話を振ってきました

「あの・・・その・・・」

「ん？どうした、音尾？」

「私・・・です。このクラスの代表・・・」

『・・・え？ええええー！！！！』

「すみませーん遅刻しちゃいましたーってみんなどうしたの？」

3人が驚いていると誰かが教室に入ってきました

「うるさいな、お前には関係ねえよ。さっさと座ってるこのうじ虫野郎」

「酷いよ雄二！なにがあつたかぐらい教えてくれたっていいじゃないか？！」

坂本君が入ってきた男の子に文句を言い、男の子も言い返します

「しかし音尾が代表か・・・うーん・・・」

坂本君は私が代表じゃ不満なんでしょうか・・・

「私が代表じゃ・・・いやですよね・・・ふえええん・・・」

「ちよつと坂本！いい加減、奏を泣かすの止めなさいよ！」

「いや、しかしだな・・・」

坂本君が何か考えながらそう言います

「私だって・・・グスツなりたくてなったわけじゃ・・・ないのに・・・」

「あの・・・僕を無視しないで・・・」

「じゃあ音尾。俺が代わりに代表やってやろうか？」

『・・・え？』

坂本君の提案に、わたしと美波さんと木下君と名前不明の男の子の  
声が重なりました

## 02話

「坂本君が・・・代表を・・・？」

「そうだ。俺がお前の代わりにクラスをまとめてやる。まあ試合争のときの大将役は代わってやれんが、それ以外は俺が代表をやってもいいぞ」

「いいん・・・ですか？」

「俺なりのやり方になってもいいならな」

坂本君がニヤリと笑います

「わかりました・・・お願いします」

「ちょっといいの、奏？坂本にクラスを乗っ取られるわよ」

「そうじゃ雄二はこういうことに関して自分に利がないと動かんぞ。絶対何かしでかすのじゃ」

「お前らな・・・」

美波さんと木下君が簡単に決めた私に用心しなさいと言い、坂本君が抗議の視線を2人向けます

「でも・・・私がやるより・・・いいと思うから・・・」

そう言ったところで担任の先生が来ました

「このクラスの担任の福原慎です。よろしく願います」

担任の先生が黒板の方を向いて、黒板に名前を書こうとしたところで、またこちらを向いて自己紹介をしました

その後、福原先生不備がないかと聞いて、さっきの男の子があれこれ言っていました。先生は我慢してくださいか自分でどうにかしてください的なことしか言っていないです

「それでは自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人から願います」

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。1年間、よろしく頼むぞい」

1人目が立ち上がり自己紹介をします

1人目はさっき話していた木下君でした

「・・・土屋康太」

2人目が立ち上がり名前だけ言って座りました

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・吉井明久を殴ることです」

3人目は美波さんでした。海外育ちだからしっかりしてるのかな・・・？

趣味は本当なのかな・・・？

それから何人が進み・・・

「え〜っと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでくださいな  
」

『ダアアーリーーン!!』

「ひゃっ!」

さっきの男の子が自己紹介してクラス中の男子が叫びました  
ビククリして私は耳を押さえてビクツとしてしまいます

「ちよつと吉井! 奏が怖がってるからそう言うのは止めなさいよ!  
!」

「え? あ、ごめん・・・今は忘れてください。とにかく、よろし  
くお願いします」

吉井君が自己紹介を終えた、その時です・・・

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ?』

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女の子が現れました  
その姿に、クラスの男の子全員が意外だと言いたいように驚いた声  
が上げます

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言ひます。よろしくお願ひします！」

担任から自己紹介を促され、その女の子が自己紹介をします

「はいつ、質問です！」

「あ、はいつ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

クラスの男の子の1人が姫路さんにそう質問します

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまひまして・・・」

姫路さんはあたふたしながらそう答えます

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年1番の大嘘をありがとう」

姫路さんの話を聞いて、クラスの男子が口々にFクラスになった理由を言い始めます・・・

「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします！」

姫路さんは逃げるように、空いてる席に着きました  
姫路さんと坂本君と吉井君が何か話しています・・・

「はいはい。その人たち、静かに」

そんな3人を先生が教卓を叩いて注意しました

バキィッ！パラパラパラ・・・

「してください・・・ね？」

叩かれた教卓が壊れてしまいました

そんな強く叩いているようには見えなかったけど・・・

「えー・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言って先生は気まずそうに教室から出て行きました

「音尾・・・少しいいか？」

「え？・・・はい」

それから自己紹介を続けていると坂本君に呼ばれます  
廊下に連れられて・・・

「実はな、明久が試召戦争をやりたいそうだ。俺もやってみたいんだが・・・いいか？」

試召戦争・・・それは試験召喚システムというこの学校独自のシステムによってテストの点数により強さの決まる召喚獣を用いたクラス間で行う戦争で、戦争に勝つと負けたクラスと設備の取り替えを行える権利を得ることができるといふもの

「試召戦争・・・どうしてですか？」

「お前はこのクラスの設備に納得がいくのか？」

「それは・・・」

「明久がな・・・姫路のためにやろうって言ったんだ・・・その気持ち汲んでやってくれないか・・・？」

「はい・・・」

そして先生が来る前にまた教室に戻りました

「それでは音尾さん、坂本君、最後の2人です。自己紹介をお願いします」

先生にそう言われて、私と坂本君が前に立ちます

「えっと、音尾奏です。よろしくお願いします」

「うはっ！何この超守ってあげたくなる系のかわいい子ちゃん?!め  
っちゃ萌える・・・ハアハア」

『ハアハア・・・』

私が自己紹介をするとクラスの男の子達がなぜか興奮した様子で声  
を上げます。怖い・・・

「こ、このクラスの代表ですが、私の代わりに坂本君に代表代行を  
お願いします」

ササツと言うことを言ってしまったって、私は坂本君の後ろに隠れます

「あー・・・ごほん、俺がFクラス代表の代行を勤める坂本雄二だ。  
まあ好きなように呼んでくれ。さて、みんなに1つ聞きたい」

そう言つて、坂本君は、教室のあちこちに視線をずらしていった後、  
言いました

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!!』

「ひゃっ!!」

坂本君の質問にクラスの男の子ほぼ全員が叫んで返しました  
私はまたビククリして耳を押さえます

「だろう?俺だつてこの現状は大いに不満だ」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

クラスの男の子が口々に不満を言います

「みんなの意見はもつともだ。そこでこれは俺からの提案だが……」

え……？ちょっと待って……もういきなりやるんですか……？

「FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

## 03話

「Fクラスは、Aクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

自己紹介のはずが、いきなりの試召戦争の提案・・・  
私もAクラスとやるなんて聞いていませんでした

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「音尾さんと姫路さんが居たら何もいらぬ！」

「とうかなんでお前が仕切るんだ?!」

それに対し、クラスメイト達は当然非難の声を上げる

確かに試召戦争にはリスクがあります・・・試召戦争は負けたら設備を1ランク落とされてしまいます。この酷い教室が更に酷くなることを考えれば、非難の声も上げたくなるのはわかります

坂本君はその非難の声を堂々とした姿で受け止め、ある程度収まったところで口を開きます

「みんながそう思うのも無理もない。だがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこそその発案だ。今からそれを説明してやる」

坂本君の自信に満ちたその発言に、クラスはシンと静まります・・・

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ！」

堂々と低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定し始める男の子……  
顔に付いた明らかな覗き<sup>たみ</sup>の証拠を隠しながら、前に出てきます

「紹介しよう。こいつがあ有名なムツツリーニだ」

「……！！（ブンブン）」

ムツツリーニという名に、クラスがざわつきます

「バカな、奴がそうだと言うのか？」

「だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「ムツツリ……スケベ？」

私はポカンとする……

「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだってその力は知ってるはずだ」

「えっ？わっ、私ですかっ!？」

私と同じようにポカンとしていた姫路さんは名前を呼ばれてあたふたします

「ああ、主戦力だ。期待している」

「そっだ、俺達には姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Aクラスにも引けを取らない」

「ああ。彼女が居れば何もいらぬい」

Aクラス並みの学力の姫路さんにクラス中が期待します

「あとは、木下秀吉。演劇部員で、Aクラスの木下優子の双子の弟だ」

「む？そこまで言われるものかの？」

「あの、木下優子の双子の弟・・・」

「秀吉、結婚してくれ・・・」

坂本君が木下君の名前を挙げて、木下君は少し戸惑います  
途中でなにか変な言葉がしたのは、気のせい・・・ですよね？

「もちろん俺も全力を付くす!!」

「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかつたか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人も居るってことかよ？  
もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

坂本君が・・・神童・・・？知らなかったな・・・

「それに、吉井明久だっている」

シーーン・・・

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

あ・・・さつき自己紹介してましたよ・・・？

「ホラ！せつかく上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二達と違って普通の人間なんだから、普通の扱いを・・・って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ」

坂本君がドンツと言います

「・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違っよっ！ちよっとお茶目な16歳につけられる愛称で・・・」

「ああ、確かに観察処分者はバカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんが質問しました

そつえば私もよく知りません

「具体的には教師の雑用係だ。力仕事などの雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣ですんだけど、召喚獣は教師がいないと喚び出せないし、召喚獣が受けた痛みや疲労が召喚者に何割かフィードバックするから、文字通り罰だな」

坂本君が観察処分者について説明をしてくれました

「ならろくに召喚出来ない奴が1人いるって事かよ」

そついうことになりますね・・・本当に勝てるんでしょうか・・・？

「大丈夫だ。いてもいなくても同じような雑魚だからな」

坂本君がそう言います

吉井君はその言葉を聞き泣き始めました

「とにかくくだ！俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したい。みんな、この境遇は大いに不満だろう?!」

『当然だ!』

「ならば全員筆をとれ！出陣の準備だ!」

『おおーっ！!』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ!」

『うおおおおおっ!!』

もう坂本君が代表代行については意見はないみたいですね

「みなさん。がんばりましょう」

私が最後にそう締めようとする・・・

『うおおおおおおおっ!!かわい子ちゃんの声援キター』

さらに大きな叫び声が上がりました・・・  
やっぱり怖いです・・・

## 04話

「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の使者になって貰う。無事大役を果たせ！」

坂本君が吉井君に宣戦布告を任せようとしています

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？」

しかし、吉井君はそう言って拒否しようとしています

「大丈夫だ、だまされたと思って行ってみる。俺は友人をだます事はしない」

「わかったよ、それなら使者は僕がやる」

そして坂本君が吉井君に諭すように言って、吉井君は宣戦布告に行きました  
え？あれ？

「騙されたあつ！」

ボロボロの吉井君が息を切らせながら戻ってきました

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったん

「じゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないでどうする」

「少しは悪びれるよ！」

でもだまされたとはいえ、最終的に自分から行くって言ってましたし……

それにあんなのでだまされるなんて……

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

制服までボロボロにされて叫んでいる吉井君に、姫路さんと美波さんが駆け寄ります

「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

どうやら美波さんの趣味は冗談じゃなかったようで、手をグーにして振り上げます

「ああっ！もうダメ、死にそう!!！」

「あ、あの……美波さん暴力は……」

「あ、ごめん奏」

私がおずおずと言うと美波さんは手を開いて腕を下ろしました

「立てますか、吉井君？」

「え？うん、ありがとう音尾さん」

「そんな事より、今からミーティング行こうぞ？」

私達は坂本君について教室から出て行きます

どうやら坂本君は屋上に向かっているみたいです

「……（サスサス）」

頬を擦る土屋君

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の跡ならもう消えているよ？」

「……！！（ブンブン）」

吉井君の指摘に土屋君は全力で否定します

「みんなムツツリーニがHなの知ってるよ」

「……！！（ブンブン）」

「何色だったの？」

突然、吉井君がそんな質問を投げかけます

「みずいろ」

即答ですか・・・

「あの土屋君・・・あまりそう言うのは・・・」

「・・・！！」(ブンブンブンブン)「

私が言うと土屋君はより強く否定をするためにさらに首を振りました

「明久、時間は伝えたか？」

屋上に出て適当なところに座り坂本君が吉井君に聞きます

「うん、今日の午後からって伝えといた」

え・・・今日？もう始めるんですか・・・

「なら先にお昼ご飯ね？」

「おい明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」

美波さんの言葉を聞き、坂本君が吉井君に言います

「そう思うなら、パンでもおごってほしいんだけど」

つと吉井君が気まずそうに返します

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

姫路さんが聞くと吉井君は顔をそらして答えます

「……あれは食べていると言えるのか？」

坂本君は少し気まずそうに聞きます

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って……水と塩だろっ？」

坂本君が哀れむように言います

「きちんと砂糖だって食べているさ」

「そ、それは食べると言うんでしょうか……」

「舐める……でしょうか？」

吉井君の反論に姫路さんと私が意見して、みんなが吉井君に妙に優しげな視線を送ります

「……あの、よかったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

ふと思いついたように姫路さんが言いました

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のもの食べるなんて久しぶりだよ！」

それが本当ならよく生きていましたね

「はい。明日のお昼で良ければ」

「よかつたじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

坂本君が吉井君をからかいますが吉井君は全く気にならないくらい喜んでます

「・・・ふーん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

そんな吉井君を見て美波さんが少し不機嫌そうに言います

「じゃあ私も誰かのお弁当作ってきますから美波さんも誰かのお弁当作ってきますか？」

「え？誰かつて誰？」

私の提案に美波さんがキョトンとします

「それはこれから決めます。誰か私か美波さんの作ったお弁当食べますか？」

「え？いいのか音尾？」

意外だったようで坂本君が聞いてきました

「いいですよ。では私は坂本君のお弁当を作ってきていいですか？」

「あ、ああ……ありがとう」

坂本君が少し赤くなって言いました

土屋君が少しムツとした気配を出していますが……食べたかったのかな？

「美波さんは誰のお弁当を作ります？」

「え？えーっと……」

美波さんは戸惑って決めれない様子……

結局土屋君と木下君がジャンケンをして勝った木下君のお弁当を作ってくることになりました

「土屋君はどうします？坂本君のより少なくてもいいなら作ってきますけど……」

流石に1人お弁当なしは可哀想ですからね

「……ノノノ（コクン）」

土屋君は赤くなってぎこちなく頷きました

「楽しみじゃのう」

「……（コクコク）」

「さて、話を試召戦争の事に戻そう」

坂本君が真面目な顔になって話を戻します

「気になっておったのじゃが、なぜDクラスなのじゃ？」

「そつえば、確かにそうですね」

木下君が真つ先に聞きます・・・

確かに段階を踏んでいくならEクラスからいくし、一気にいくのならAクラスとやればいい・・・

Dクラスはどちらにも当てはまりません

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

「姫路に問題がない今、Eクラスはやるだけ時間の無駄だ。それくらい楽勝だがDクラスは難しい。それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Aクラス攻略の為に必要な要素がDクラスにはある」

「つまりAクラス攻略のための第1段階ってことですね」

「そ、そういうことだ」

私が坂本君の目を見て言うと、坂本君が少し赤くなってそう言いました

「あ、あの・・・」

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

姫路さんが大きな声で話に割って入り坂本君と吉井君に質問した

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて・・・」

「それはそうとー！」

吉井君が坂本君の話を遮るように、大声を出します

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「そうですね・・・」

「負けるわけないさ」

私と吉井君の心配を笑い飛ばす坂本君・・・

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは・・・最強だ」

そつドンツと言い放つ坂本君・・・

私はそんな坂本君を少しかっこいいと思いました

## 05話

対Dクラス戦が始まりました

「坂本君・・・前線のみんなは大丈夫でしょうか・・・」

「さあな、ただ・・・」

「ただ？」

「持ち堪えられなかったら負けだな」

あっけらかんと言う坂本君

「そんな・・・」

「そう不安がるな・・・俺が絶対勝たしてやるから」

「はい・・・」

「っと言っても初戦だから不安なのは仕方ないか」

そう言っつて坂本君は私にペンと紙を出してきます

「これにお前の気持ちや応援の言葉を書いてくれ」

「え？は、はい・・・」

私はガンバって、勝つって信じてますっと思ってきました

「できました」

「おい、誰か」

「なんだ坂本？」

坂本君はそれを受け取り、近くの男の子を呼びました

「これを前線に渡ってきてくれ、頼むぞ。ああ、代表からだとかちゃんと言えよ」

「了解した」

そして男の子は教室を出て行きました

「あれで効果があるんでしょうか・・・」

「まあ耳を澄まして待ってなっつて」

言われたとおり耳を澄ましていると・・・

『うおおおおおおおー！みなぎってキタアアアアアアー！』

「な？」

「あ、あはは・・・」

それから数分後・・・

「坂本！吉井からの伝言だ！」

「なんだ？」

「先生たちに偽情報をながしてくれ、と」

「そうか・・・ムツツリーニ！」

「・・・ここに（シユタ）」

あれ？さっきまでいませんでしたよね・・・？

「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

「・・・船越先生だ」

「そうか、だったら・・・（カキカキ）須川、これを校内放送でながせ」

「坂本君、私も放送室に行っていていいですか？」

「いや、それは・・・」

私の提案に坂本君が難色を示します

「私が放送で前線に呼びかければさっき以上にがんばってくれと思っんですが・・・」

「うーん・・・そうだな・・・須川、部隊を編成するから適当な奴4、5人引っ張って来い。その後先行して放送室でそれを流せ」

「了解」

「全くウチのお姫様はお転婆なことで・・・」

その後須川君に呼ばれた5人がきました

「じゃあ行くぞ。我らのお姫様に虫1匹近づけるな！」

『おおー！』

そして私達は教室から出ました

「いたぞ！Fクラスだ」

「チツ見つけたか・・・」

放送室に向かってしているとDクラスの生徒に見つかってしまいました  
多分、部隊に入れた5人の生徒の顔を覚えていたのでしょう  
そのときでした・・・

《ピンポンパンポーン》

《船越先生、船越先生》

《吉井明久が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、  
男と女の大事な話があるそうです》

「これってさつき坂本君が書いた・・・？」

「ああ・・・とりあえず作戦成功だ。こいつらを倒すぞ」

「はい」

『サモン』

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&生徒5人 古文 103&90&平均65x5

VS

Dクラス 生徒 8人 古文 平均95x8

みんなの召喚獣が出てきます

私の召喚獣は巨大な武器みたいな笛を持っていて、文月学園のではないブレザーの制服を着ています

「おいおい、それって・・・」

「なんですか？」

坂本君が私の召喚獣を見て驚いています

「明久の持ってたゲームで似たようなのを見たことがある・・・確か狩猟笛だったかな。演奏すると特殊効果が出るんだ・・・」

「演奏・・・ですか？」

私は召喚獣を操作して笛を吹いてみる・・・

〕

「音が出ますね。音階もある程度出せるみたいですし・・・」

〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕

召喚獣が笛を吹くのは珍しい光景のようでDクラスの生徒がポカンとしています

「では簡単なのを1曲」

そう言っって私は適当な童謡を吹きます

「今のうちに倒すぞ」

『了解』

ポカンとしているDクラス生徒達に坂本君達が向かっていきます

「あれ？なんか・・・」

「ああ、点の割りに召喚獣の性能が良くないか？」

戦っている味方の人達がなにか疑問を感じています

「まさか・・・」

「どっし・・・」

坂本君の呟きに私は質問しようと召喚獣の操作を止めようとして・・・

「演奏を止めるな、音尾。あとできればもうちょっと難易度の高い奴を頼む」

「は、はい！」

坂本君にそれを止められました  
そしてもう少し難しい曲の演奏を始めると・・・

くくくく

「さらに性能が上がったな・・・予想通りだ。演奏で召喚獣の性能が上がっている。音尾、とにかく演奏を続ける。俺達は敵を叩くぞ！」

「はい」

『了解』

そして点や人数の差を覆してDクラスの生徒達を倒しました

「よし行くぞ」

そう言って坂本君は今まで向かっていた方向とは違う方向に向かいます

「え？放送室は・・・」

「もうその作戦は終わったんだ。一気に片をつける」

放課後になり、戦いは下校する生徒達の中に紛れて行われていました

「音尾、本隊がきたらでるぞ」

「はい」

その時・・・

「Fクラス吉井が・・・」

「Dクラス玉野美紀、サモン」

「なっ！近衛部隊?!」

吉井君が向こうの代表率いる部隊と接触したみたいです

「行くぞ、サモン」

「はい、サモン」

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&吉井明久 現代国語 105 &  
97 & 17

VS  
Dクラス 近衛部隊 5人 現代国語 平均110 x 5

「お前ができる最高の曲を吹け！」

「はい！」

〽  
〽  
〽  
〽

「雄二これって・・・」

「ああ、お前の持つてるゲームのと同じだ。決める明久！」

「うん！」

演奏に驚いている向こうの近衛部隊を吉井君が蹴散らしていきます。

・・・

100点ぐらい差があるはずなのに性能が互角に見えます

それに吉井君、召喚獣の操作が・・・すごく上手です・・・

「後は頼むぞ！姫路！」

「はい」

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

「いえ、そうじゃなくて・・・Fクラス姫路瑞希です。Dクラス平賀君に現代国語勝負を挑みます」

「・・・はあ。どうも」

「あの、えつと・・・さ、サモンです」

Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339

V S

Dクラス 平賀源二 現代国語 129

姫路さん・・・すごい・・・

「え？あ、あれ？」

「い、ごめんなさいっ」

姫路さんが圧倒的点数でDクラス代表を下し私達の初戦は終わりました

## 06話

「くそ、まさか姫路さんがFクラスだったとは……」

Dクラスとの戦いが終わった後、Dクラス代表の平賀君は燃え尽きた様子でそんな言葉を呟きました

確かにあんな成績でFクラスなんて思わないよね……

「姫路さん、凄いね300点以上なんて私取ったこと無いよ」

「いついえ、そんな……」

姫路さんが顔を赤らめて照れています

「す、ストロップ！僕が悪かった!!」

「え？なに？」

声のほうを見ると坂本君に腕をひねりあげられている吉井君  
その足元には包丁が落ちています

「坂本君離してあげて、吉井君さっきの放送で怒っているの？」

「え？あ、うん、そりゃあね……」

「ごめんなさい……クラスのためにこんなことをして……代表として謝ります……」

そう言っつて私は頭を下げる

「え？い、いいよ。そんな風にされたら、怒るに怒れないよ」

吉井君は慌てながらも許してくれました

「・・・ルールに従って、クラスは明け渡そう。ただ今日はもう遅いから、作業は明日からでいいか？」

Dクラスの代表の平賀君がそう言ってきました

これからはFクラスの設備で、クラスメイトに恨まれながら過ごさなければならぬという事を考えると凄く悪いことをしたんじゃないかと感じてしまいます・・・

平賀君の表情は、これから受けるだろう恨みと罵倒への不安しか見とれません・・・

「いや、その必要はない」

しかし坂本君のその一言が、それを一気に払い去りました  
坂本君の言葉を聞いてFクラスの面々がザワザワと騒ぎ出します

「みんな落ち着いてください。坂本君説明をお願いします」

「ああ、俺達の目標はあくまでもAクラスだ。極端に言ってしまうえば、Dクラスの設備には興味は無い。ただし・・・それはDクラスが俺達の条件を飲めばの話だが」

私になんとかその場を静め、坂本君が理由を説明して行きます

「じよ、条件？」

「ああ。その条件を飲んでくれるなら設備は見逃そう」

「条件は？」

坂本君は平賀君を連れてDクラス教室に向かって行きました。そしてDクラス教室の入り口で平賀君と少し話してすぐ戻ってきました

「さあみんな！明日は点数の補給テストを行うから今日はゆっくり休んでくれ。じゃあ解散！」

「みなさんお疲れ様でした」

そんな感じで私のFクラス代表1日目が終わりました

次の日、Fクラスのテスト漬けの午前が終わり、昼休み

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！今日はラーメンとかつ井とカレーと炒飯にすっかな？」

「え？坂本君そんなに食べるんですか？」

「そうだが・・・どうした？」

「昨日言ってたお弁当作ってきましたけど・・・坂本君には量が少ないかも・・・」

私は肩を落としながらそう言う

「あ、あー……気にすんな。大量に作ってもらつのも悪いしな」

「そうですね……」

「そついうことだ」

坂本君が私の頭をポンポンと手でやりながら言いました

「っで、姫路や島田も作ってきたのか？」

「はい、作ってきましたよ」

「ウ、ウチも作ってきたわよ。自分のと木下の分」

「じゃあ屋上でみんなで食べましょう。土屋君のもちゃんと作ってきましたよ」

「……感謝」

土屋君がこつちに來ながらお礼を言ってきました

「よし、じゃあお前らは先に行つててくれ」

「雄二、どこか行くの？」

吉井君が坂本君に聞きました

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼もかねてな」

「じゃあ私も行きます。代表ですからね。土屋君、私と坂本君のお

弁当を屋上に持ってつてくれませんか？」

「・・・わかった」

土屋君に3つお弁当を渡します

「遅くなったら先に食べててもいいですよ」

食堂の自販機でお茶を数本買って、屋上に向かうと・・・

「え？吉井君?!どうしたんですか?!」

吉井君が青い顔で倒れていました

周りの人も吉井君ほどではないものの顔が青いです

「まあ明久だし大丈夫だろ」

そう言って坂本君は買ってきたお茶を配ります

私は土屋君からお弁当を受け取って坂本君に渡します

「ああ、ありがとうな」

「・・・頂きます」

私は坂本君と土屋君が食べるのをジッと見ます

「どっ・・・ですか?」

「うん、うまいな」

「……(グツ)」

土屋君が親指を立ててグツドのサインをしてくれます

「よかった……全くやってないってわけじゃなかったけど、日常的にやってたわけでもなかったから不安だったんです。味見はしましたけど味覚は人それぞれです……」

「確かに、でも自信持ってもいいと思うぞ」

「……(コクコク)」

「はい、では私も、頂きます」

私もお弁当を食べ始めました

「そういえば木下君、美波さんのお弁当はどうですか?」

「う、うむ、おいしいぞい」

木下君は吉井君のほうを一目見た後言いました

「そうですね。よかったですね、美波さん」

「え、ええ……」

美波さんも吉井君を見てから言いました

「姫路さんは・・・食べないんですか？」

「ちよつと奏?!」

「はい、私今ダイエット中で・・・」

姫路さんに話を振ると美波さんが焦ったように声を上げます  
なるほど、確かにダイエットしてるってことは男の子には知られた  
くないですよ

「そうですね・・・ごめんねキツイのに普通に食べてて・・・」

「いえ、気にしないでください」

そんな感じでお昼の時間は過ぎていきました

## 07話

「さて次の試召戦争の話をするぞ」

お弁当も食べ終わり、坂本君がそう話を切り出しました

「次はどことやるんですか？」

「次はBクラスだ」

「Bクラス？目標はAクラスじゃないの？」

私が次の対戦クラスを聞いて、坂本君の答えに復活した吉井君が理由を聞きます

「ああ。Bクラスにも、Dクラスと同様に俺達がAクラスに勝つための要素がある。俺たちじゃ真正面からぶつかったところで、勝ち目はないからな」

そうですね・・・Aクラスはただ成績がいいだけじゃなく学年トップのエリートさんのクラスですしね・・・

「なら、どうするのじゃ？」

「Bクラスとこの戦争のシステムを使って、Aクラスとの戦争は一騎打ちにする」

木下君の疑問に坂本君はそう答えました

「システム？」

「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか明久？」

「え?! えーつと・・・」

吉井君はよくわからないという表情で坂本君に話を振られてあたふたしています

姫路さんが吉井君に耳打ちして教えています

「設備のランクを落とされるんですよね」

「そつだ、じゃあ上位クラスが負けると？」

私が話を進めるために代わりに答えると坂本君が次の質問をしてきて・・・

「悔しい」

吉井君がそんな答えを言いました

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ちよっ! ダメですよ、そんなことしたら。上位クラスが負けると設備交換ができるんですよ。何言ってるんですか吉井君?!」

「あ、う、うん・・・そつだったね」

「はぁ・・・つまり、設備交換免除を条件に、BクラスにAクラスへ宣戦布告させて、そのあとでFクラスが連戦を匂わせる通告をし、

「一騎打ちの条件を呑ませるってことだ」

坂本君はため息をつき疲れたようにまとめて言います

「まだみんな何か疑問があるようですが、坂本君はBクラス戦に勝たないと意味が無いからと話を締めます」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

吉井君は明らかに警戒していて坂本君の頼みを断ります

「全く……じゃあジャンケンで決めるぞ。負けた方が行ってくつてこ  
とでいいな」

「OK。乗った」

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

坂本君ががそう提案します

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

吉井君もその提案に乗り……

「そうか。それなら俺は……お前がグーを出さなかったらブチ殺

す  
」

「ちよっ！何その心理戦?!」

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ!」

焦った吉井君は自分で言ったとおりグーを出し、坂本君はパーを出しました

「決まりだ、行ってこい」

「絶対に嫌だ!」

負けた吉井君は必死に拒否します

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか?」

「それもある!」

「それなら今度こそ大丈夫だ、保証する。Bクラスは美少年好きが多いらしい」

そんなこと聞いたことありませんよ?

「そっか。それなら確かに大丈夫だね」

それで安心する吉井君は隠れナルシストなんです

「でも、お前不細工だしな・・・」

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

どうやら隠れじゃなく堂々とナルシストやってるみたいですねでもそれならもうちょっと勉強して欲しいです・・・

「みんな嫌いだっ！」

「とにかく、頼んだぞー」

坂本君の言葉を背中に受けて、吉井君は校内に走り出しました

放課後・・・

「・・・言い訳を聞こうか」

「予想通りだ」

ボロボロになった吉井君が戻ってきて坂本君を睨みます

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

「落ち着け」

「ぐふぁっ!」

坂本君は掴みかかろうとする吉井君のお腹を殴って、吉井君はダウンしました

「先に帰るぞ。明日も午前中はテストなんだから寝すぎるなよ。おつかれー」

「はい。お疲れ様です。また明日」

帰っていく坂本君を見送り、私は様子がおかしい姫路さんに近づきます

「姫路さんどうしたの?そんなオドオドして・・・」

「い、いえ・・・なんでもないです・・・」

そう言っているけど、どう見てもそう見えないよ?

「私じゃ・・・相談相手にもならない?」

「そんなことは・・・とにかくなんでもないんですっ!」

そう言っただけ姫路さんは帰っていきました

やっぱり私、代表向いてないのかな・・・

まあ気にしても仕方が無いか・・・部活行こう・・・

私は重い足取りで部屋に向かいました

部活が終わって部室から出て廊下をトボトボと歩いている・・・  
1人になると考えてしまう・・・姫路さんのこと、代表のこと・・・  
「ん？音尾かの？」

そんな私に不意に声がかかります。この言葉遣いは・・・

「木下君？」

「正解じゃ。音尾も部活か？」

「はい、吹奏楽部です」

「そうか音尾は吹奏楽部じゃったか」

「木下君は演劇部でしたね」

私は無理に笑って言います

「うむ・・・音尾よ、何か悩んでるようじゃの」

「え？な、なんでわかるんですか?!」

「無理に笑っておる様に見えたからの」

演劇部だけあってそういうところは鋭いんですね

「聞いて・・・くれますか？」

「力になれるかわからぬが、それでよいならな」

「私・・・代表として信頼されてるんでしょうか・・・？」

木下君にストレートに質問します

「どつじやるうな・・・でも・・・」

「でも？」

「そうやってウジウジ悩んでいると信頼されないと思つのじゃ。みんなから信頼されたいならみんなを信頼してビシッとしくのじゃ」

「みんなを信頼する、か・・・」

よくわからないな・・・

「じゃあわしはこれで・・・また明日の」

「うん、また明日ね・・・」

## 08話

「さてみんな、総合科目テストご苦労だった」

次の日、教壇に立った坂本君が教卓に手を置いてクラスメイトの方を向いています

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、やる気は充分か？」

『おおーっ！』

坂本君の問いかけにクラスメイトは腕を上げて叫び答えます

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。そこで、前線部隊は姫路に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んでこい！」

『おおーっ！』

「が、頑張ります」

姫路さんと一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気もマックス通り越してますね

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了、そして開戦のベルが鳴り響きます

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー』

## 第2回試験召喚戦争

Bクラス VS Fクラス

開戦

「音尾行くぞ」

「え？わ、私も出るんですか？！」

私が負けたら終わりですよ？

「そうだ。大丈夫だ、俺がちゃんと守ってやるから。音尾は演奏を頼む」

「わかりました」

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れて居るぞ！」

前線メンバーがBクラスとエンカウント

Bクラスはまず、10人前後が出てきたようです。対してFクラスはほぼ総力です

今回は廊下を制することが最優先目標ということもあり、これが失

敗すれば私が戦死しなくても負けも同然・・・だから私も前線に出るんでしょうね・・・

「音尾がいるフィールドに固まって迎え撃て！！サモン！」

『サモン』

坂本君の指示で私の居る数学のフィールドにクラスメイトを集めます

Bクラス 生徒5人 数学 平均150×5

VS

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&島田美波&生徒9人 数学 117  
&87&187&平均65×9

「音尾頼む」

「はい」

）  
）  
）  
）

「嘘?! 召喚獣が笛吹いてる?!」

「奏、凄い・・・」

美波さんやBクラスの生徒が私の召喚獣の行動を見て驚きます

「行くぞ、お前ら！敵を討ち取れ!!」

『おおー!!--!!--!』

坂本君の掛け声でクラスメイトが次々突撃していきます

「東になったところで所詮Fクラス、敵じゃない……ってなにこれ?!クッ」

迎え撃つBクラスの人達の顔から余裕の色が消えていきます……

「奏、凄いわね、召喚獣でそんな細かい操作ができるなんて」

「召喚獣の操作ってイメージじゃないですか。私は中学から吹奏楽部で吹いてたんで、もう今年で5年目なんです。だからイメージが出来上がってるんです」

「なるほどねえ」

「よし、そろそろ次のフィールドに移るぞ、島田とあと5人ぐらいはここに残ってくれ」

「わかったわ」

私と美波さんが話している間に数学のフィールドを制圧できたよう  
で坂本君から指示がきます

他のフィールドは今にも押し切られそうでした

『サモン』

Bクラス 生徒2人 物理 152&147

VS

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&生徒4人&生徒4人 物理 105  
&95&平均70×4&平均30×4

私と坂本君以外のメンバーがこのフィールドのメンバーと合流し私は演奏を開始します

〃 〃

「あの笛の奴を倒せ！」

流石にBクラスの生徒も演奏効果に気付いたようで私を狙ってきました

でも・・・

「させるか！！」

坂本君が私の前に立ち塞がってそれを許しません  
このフィールドは2対9なので（私は演奏に集中して戦闘に参加しません）数で押して制圧しました  
そして、5人残してフィールドを移ります

「よし、ここが最後だ」

「はい」

『サモン』

Bクラス 生徒3人 総合 1943&1920&1964

V S

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&生徒3人 総合 1235&100  
4 & 平均760 x 3

召喚してすぐ演奏を開始します

〜

「へえ音尾は本来Dクラスだったのか・・・」

「はい、そうですよ。試験の前日夜更かししちゃって調子でなくて・・・」

「夜更かし？」

「試験が不安で眠れなかったんで、本読んだり音楽聴いたり・・・」

「なるほどな・・・」

「でも坂本君と同じクラスになれたからよかったです」

「ふっ嬉しいこと言ってくれるねえ」

そんな会話をしながら総合フィールドも制圧して・・・

「お、数学フィールドに援軍が来たみたいだな。下がって姫路と指揮を交代するからその間休んでる。流星に疲れたる」

「はい」

坂本君と入れ替わり姫路さんが前に出ます

「来たぞ、姫路瑞希だ！」

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です！Fクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込みます！」

「律子、私も手伝う！」

姫路さんが出てきた途端、Bクラス陣営は表情を引き締まります

Fクラス 姫路瑞希 数学 412

VS

Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学 189&151

「あつ、腕輪！」

「腕輪？・・・それって確か、何点かオーバーしたら、特殊能力が付加されるって言う？」

「まあ、姫路ならおかしくはないか」

腕輪とは総合科目以外の教科で400点を超えた場合につくもので、1人1人違う特殊能力を発動させることができるもの・・・  
私はまだついたことが無いから自分の能力がわかりません

姫路さんの召喚獣が、腕輪を付けた左腕を相手に向けると、腕輪から光線が放たれます  
1体を炎でつつみ、もう1体も大剣でなぎ払い、2人を補習室へ送りました

「よし、このままBクラス教室まで押し切れ！姫路、指揮を頼むぞ」

「はい！み、みなさん、頑張りましょう！」

『おおーっ！』

「俺達は一旦教室に戻るぞ」

「え？は、はい」

坂本君と教室に戻り扉を開けると、そこに広がっていた光景は……足の折られたの卓袱台に、2つに折られた筆記具、細切れの消しゴムという光景でした

「なにこれ……ひ、酷い……グズツ、坂本君……」

「やりやがったなあ野郎……泣くな音尾、泣いても状況は変わらない」

「でもこれじゃ補給が……どうしよう……」

私か坂本君にそう言ったときでした

「代表、Bクラスの代表の根本がFクラスと協定を結びたいという申し出があるんだが、どうする？」

狙ったようなタイミングで来た協定の申し込み……

「協定だと？内容は？」

「来てから明らかにするそうさ。それと調印のために空き教室に来て欲しいと……」

「坂本君・・・行くの・・・？」

「・・・分かった。行こう」

坂本君は少し考えてからそう言いました

その表情は悔しさや怒りに染まっているように見えました

## 09話

現在午後4時過ぎ、Bクラス対Fクラスは休戦中です

なぜ休戦中かといえば、それが協定の内容だったからです  
午後4時までには決着が付かない場合、翌日午前9時まで戦況をそのままに持ち越し、その間試召戦争に関する一切の行為の禁止というのが協定の内容でした

前線のほうは色々あったみたいですけど、作戦通り教室に押し込めたみたいです

「・・・Cクラスに不穏な動きあり」

坂本君の指示で諜報に徹していた土屋君が情報を持って戻って来ました

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「ど、どうしましょう?」

Bクラス戦後すぐCクラスとなんてまともに戦えません

「Cクラスに話をつけるか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っただけでやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろう」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

坂本君と吉井君がCクラスへの対応の話を進めます

「え？でも試召戦争に関する一切の行為の禁止って協定が・・・」

「あれは代表が、だ・・・じゃあさつさとCクラスに行くか。早くしないとCクラスの代表が帰りがねない」

「そうだね」

坂本君の言葉に立ち上がる面々・・・

「ああ、秀吉は来なくていい。もしものことがあるからな。代表が関与していないことを証明するために音尾を送ってってくれ」

「う、うむ・・・わかったのじゃ」

「気をつけてくださいね」

その日は木下君と一緒に帰りました

次の日

対Bクラス戦2日目

「よし、昨日言ってた作戦を実行する」

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

坂本君の言葉に吉井君が聞きます

確かに開戦予定時刻は午前9時で今は午前8時30と30分のずれ

があります

私は昨日帰ったのでよくわかりませんが、Cクラスの話をつけられなかったみたいですね

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、なるほど。それでどうするの?」

「秀吉にこれを着てもらおう」

坂本君が鞆から引きずり出したのは文月学園の女子の制服です  
どこで手に入れたんでしょう・・・

「できれば遠慮したいのじゃが・・・理由くらいは聞こうかの」

木下君は私をチラッと見て難色を示しました

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

「木下君、お姉さんか妹さんがいるんですか?」

「うむ、姉上が雄二の言ったとおりAクラスにおって、周りの者はわしと見分けがつかんみたいじゃ」

こんな外見の女の子か・・・綺麗で優しいんだろうな・・・

「秀吉頼む。お前しかできないんだ。これでCクラスをAクラスに向かわせれば、こっちはBクラス戦に集中できるんだ」

「し、しかしのう・・・」

「木下君・・・私からもお願い。そりゃ木下君は男の子だから女装は嫌かもしれないけど、これでクラスが助かるの・・・私を恨んでもいいから・・・お願い」

私は木下君に頭を下げる・・・

「はぁ・・・わかったのじゃ音尾。頭を上げるのじゃ」

「ありがとう木下君・・・ごめんね、酷い代表で」

「気にするでない。じゃあ、着替えるとするかのう」

木下君が私達の前で着替え始めました

「っ・・・（ブシャアアア）我、が、人生、に、いっぺんの、悔い、無し・・・」

「土屋君?! しっかりして!!」

土屋君が急に鼻血を拭いて倒れました

他のFクラス男の子は、その着替えの光景に絶句しています

「よし、着替え終わったぞい。ん? みんな、どうしたのじゃ?」

着替えが終わった木下君が男の子達の様子に疑問符を浮かべています  
私は木下君の女装姿を見て・・・

「綺麗・・・」

つと眩きました

「そ、そうかの・・・」

その声が木下君に聞こえていたみたいで、木下君は顔を赤らめます

そして、Cクラスの教室の近くまで着きました  
先を歩いていた坂本君が振り向いて

「さて、ここからはすまないが1人で頼むぞ、秀吉」

つと言います

確かにAクラスの木下さんと私達は接点が無いから私達と一緒にいるのは不自然ですね

「Cクラスを挑発してAクラスに敵意を向けてくれ。戦争の準備が出来ているとも言つてな。ただし、宣戦布告はするなよ」

「了解じゃ・・・」

坂本君が木下君を送り出しますが木下君の足取りは重そうです  
木下君がCクラスの扉の前で深呼吸して落ち着いて、扉を開き第一  
声を・・・

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

・・・えっ？

「え?!秀吉の姉さんって、あんなふうなの?」

「秀吉がやってるってことはそうなんだろう・・・」

この場にいる全員の疑問を吉井君が代弁して、坂本君がそれに答えました

「あんな綺麗で優しそうなのに・・・」

シヨックです・・・

『な、なによアンタ!』

『話しかけないで!ブタ臭いわ!』

こ、怖いです・・・

『あんだ、Aクラスの木下ね?ちよつと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ!何の用よ!』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの!増してブタ臭い貴女達なんて、豚小屋で十分だわ!』

『なっ!言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですって?!』

わ、私達の教室、豚小屋じゃないもん・・・

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚い豚の貴女達を始末してあげるから!』

そう言い残して、木下君はCクラスの教室を出て来ます

高飛車そうな靴音を立てるといふ細かいところまで気を使って凄  
演技です・・・

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備をする  
わよ！』

Cクラス教室からそんな声が上がリ、やる気と憎しみに満ちた叫び  
が上がります

「これで良かったかのう？」

そう木下君が不安げに言いますが、その顔はどことなくスッキリし  
たように見えました

## 10話

あの後午前9時を回りBクラス戦が再開されました

私は朝から回復試験を受けながら、補給に来たクラスメイトに労いの言葉をかけます

「雄二っ！」

試験が終わった辺りで、吉井君がいきなり教室に入ってきて、坂本君を呼びます

「うん？どうした明久。脱走か？チョコキでシバくぞ」

坂本君はノートを見ながら何か考えています

「話があるんだ」

「・・・とりあえず、聞こうか」

吉井君の真剣な声に坂本君はノートから目を離して吉井君のほうを向きます

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「・・・お前に何があつたんだ？」

「ああ、いや、その。えーっと・・・」

坂本君が冷たい視線を送り、吉井君は自分の言った言葉に頭を抱え

ています

「まあ勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやるっ」

え？認めちゃうの坂本君？

「で、それだけか？」

「それと、姫路さんを今回戦闘から外して欲しい」

姫路さんに何かあったみたいですね

あの時のオドオドとした様子に関係があるんでしょうか

「理由は？」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメなのか？」

坂本君が渋ります

姫路さんはFクラスの主力中の主力、外したら戦力がガクンと落ちてしまいます

「うん。どうしても」

吉井君の言葉に坂本君が手を顎に当てて考え込みます

「・・・条件がある」

「条件？」

坂本君は真剣な表情で言います

「姫路が担う役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるぞ！」

何をするのか聞いてもいないのに吉井君はそう言い切りました

「いい返事だ」

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「みんなのフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

え？それじゃどうやって教室に・・・

ここは3階だから窓からは入れないし・・・

「・・・難しいことを言ってくれるね」

難しいというより無理なんじゃ・・・

「もし、失敗したら？」

吉井君がそう聞きます

「失敗するな、必ず成功させる」

坂本君はそう返しました

つまり失敗は負けに直結するということ・・・

「音尾、試験は終わったな？行くぞ」

「は、はい、わかりました」

「え？どこか行くの？」

「ああ、Dクラスに例の指示を出して、その後前線に合流する。秀吉1人じゃ厳しいだろうからな」

そう言って坂本君は私と一緒に教室から出て行くこととします

「明久」

教室を出る直前、坂本君は振り向かず言い始めました

「確かに点数は低いが、秀吉やムツリーニ、音尾のように、お前にも秀でた部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「・・・雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない」

そう言い残し、坂本君は教室を出ました

「信頼、か・・・」

前線に向かう途中、私はふとそう呟きます

「どうかしたか？」

「坂本君は私を代表として信頼してますか？」

「ふっ・・・どうだろうな」

坂本君は笑いながらそう言います

「みなさんががんばってください！私もがんばって吹き続けます！サモン」

Bクラス教室入り口で坂本君と別れ、召喚獣を召喚します  
前線は教室の出入り口という場所のせいで常に1対1で戦うようになっっています

しかし召喚フィールド自体はそれより広く形成されているので、後方から支援ができる私にはもってこいの状況です

くくくく

ドオンッ！ドオンッ！

何かDクラスの壁のほうから凄いい音が聞こえてきます・・・

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。うるせえし暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

Bクラスの代表の挑発にDクラスに指示を出し終わった坂本君が返します

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

ドオンツ！ドオンツ！

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「・・・お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくのさ」

「けっ！口だけは達者だな。負け組さんよ！」

「負け犬？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組でその代表だな」

ドンツ！

「・・・さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやってるのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けつ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し戻せ！」

「・・・体勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

私も坂本君の指示に従って下がります

Bクラスの生徒がこちらを追って代表から離れました

「どうした、散々ふかしておいておきながら逃げるのか！」

「明久、あとは任せたぞ」

坂本君がそう大きめに声で言います

「だあああああつっしやあああああああああ！」

ドゴオっ！！

「ンなっ！」

吉井君がDクラスの教室から壁を破って、それに続いて数人Bクラスに突入しました

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

しかし近衛部隊がそれを阻んだみたいで、Bクラスの代表がそう言っ  
って嘲笑います

そんな・・・あそこまでののに・・・

そのときでした

ダンッ！ダンッ！

なぜかエアコンが停止していて、涼を求める為に開け放たれた窓・  
・  
そこから2人の人が入ってきました・・・上の階から降りてきたのかロープが見えます

「・・・Fクラス土屋康太」

「キサマはっ・・・?!」

「・・・Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリイーニーーッ！」

「・・・サモン」

吉井君達が近衛部隊を引き付けているので土屋君が1対1で代表を  
討ち取りました

Bクラス対Fクラス

勝者Fクラス

## 11話

「明久、随分と思いついた行動に出たのう」

木下君が壁の穴を見ながらそう言います

「うう・・・痛いよう・・・」

痛みのフィードバックで、両手を抑えて蹲っている吉井君

召喚獣でやったとはいえ、鉄筋コンクリートの壁を殴って壊したフィードバックは、何割か軽減されたとしてもかなりきつそうです

「なんとも・・・お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男義溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「・・・遠回しにバカって言ってるない？」

吉井君が木下君をジト目で見ます

「ま、それが明久の強みだからな」

そこへ坂本君が歩み寄って、吉井君の肩をバンバンと叩きます  
吉井君の方は、バカが強みと言われ多少ショックを受けているようです

「それじゃ私はこの事を謝りに職員室に行ってきます。吉井君も呼ばれると思いますが、それまで保健室に行って手当てを受けてくださいね」

「え？音尾さんこれには関係ないんじゃない？」

「いえ、私は代表ですし吉井君が怒られる時間が少しでも減るように先に謝罪してきます。坂本君、適当なところで解散してくださいね。それでは、また明日」

そう言ってBクラスの教室から出ました

職員室に入りまず担任の福原先生のところへ行き、事情の説明と謝罪をしました

その後、学年主任の高橋先生に生徒指導部の西村先生、そして教頭先生と謝って説教を受けて回って、最後に学園長先生のところに行き、謝りに行くために学園長室にきました

コンコン

「どうぞ」

ノックをするとイライラしたような声で返事をされました・・・もう報告が行ってるみたいですね・・・

「失礼します」

私は扉を開けて学園長室に入ります

「なんの用さね？」

白く長い髪の毛の学園長先生らしき人がこっちを見て聞いてきます

「今日の試召戦争で壊した壁について謝りに来ました。申し訳ありませんでした」

学園長先生と机をはさんで向かい側に立ち、私は用件を言い頭を下げます

「謝罪しに来たのに名乗りもしないなんて、謝罪する気あるのかい？」

「す、すみませんっ。Fクラス代表、音尾奏です」

学園長先生の言葉に私は慌てて自己紹介をします

「ほう・・・アンタがあのかラスの代表の音尾かい？」

「は、はい」

「ふーん・・・」

学園長先生はマジマジと私を見てきます

「アンタの召喚獣・・・他のとちよつと違つみたいさね・・・」

「は、はあ・・・」

演奏効果のことでしょうか・・・

「実体がないはずなのに音が出る笛・・・そして演奏によって他の召喚獣に影響を与える・・・こんな召喚獣は見たことないさね」

「そうなんですか・・・」

「あなたにか知らないかい？」

「そ、そう言われましても・・・」

召喚システムについて全くわかりませんし・・・

「アンタ吹奏楽部らしいね、中学からかい？」

「はい、そうです今年で5年目です」

でもそれなら他にも同じような人いそうですね

「ウチは特に部活に力を入れてるわけじゃないが、なぜウチに？」

「え？えーっと・・・学費が安いから、その分大学に学費をつぎ込めるからですね」

もっと演奏を上手くなって、できれば留学とかしたいですし・・・

「特に珍しいところはないさね・・・ちょっとこれつけて召喚してみな」

そう言って白い腕輪を渡してきます

「これは？」

「白金の腕輪の試作機さね。召喚フィールドがまだまだ小さくて実用化はできないがね」

「そうですか・・・どうやって使えばいいですか？」

私は腕輪をつけながら使い方を聞きます

「ああ、起動ワードを言えば起動するさね。起動ワードはアウエイクン」

「アウエイクン」

私が起動ワードを言うと私を中心に1メートル四方の召喚フィールドが展開されました

「サモン」

そして召喚獣を呼びます

「わー凄い。本当に一人で召喚フィールド張って召喚ができた・・・」

「じゃあ演奏してみな」

「はい」

）  
）  
）  
）

「どうですか？」

4、5曲演奏が終わって学園長先生に聞くと・・・

「まだまだ解析してみないとわからないね。もっとデータが欲しいけど・・・今日はもう遅いから帰りな」

つと言いました

外を見るといつの間にか真っ暗でした

あれ？私、壁壊した事を謝りにここに来たんだよね？

「はい、わかりました。それではこれはお返・・・」

そう言っ腕輪を返そうと外していると・・・

「ああ、それは着けときな、データ記録もできるからちよくちよく使っデータを集めといとくれ」

「わかりました。では失礼します」

私は学園長室を出ます

はあ・・・こんな真っ暗の中1人で帰るの怖いなあ・・・あれ？教室に明かりが・・・

ガラッ

「お、やっと戻ってきたな。随分と長く怒られてたなあ」

「え？なんで・・・」

教室には坂本君と吉井君、木下君に土屋君がいました

「僕のせいで音尾さんが怒られてるのに先に帰るのも気が引けてね」

「吉井君・・・」

「怒られて落ち込んでおるかもしれんからの、放って置けんかったのじゃ」

「・・・（コクコク）」

「木下君・・・土屋君・・・」

「そういうことだ・・・日が暮れる辺りまでは結構残ってたんだがな・・・最後まで残ったのは俺達だけだな」

「坂本君・・・」

いつの間にか私の目から涙が溢れて頬を伝います

「みんな・・・ありがとう・・・」

「お、おいおい・・・なんで泣くんだよ」

「そうですよね・・・悲しいわけじゃないのに・・・」

そう言っつて涙を拭くと・・・

「ん？音尾よ。その腕輪はどうしたのじゃ？さっきは着けてなかったの」

白金の腕輪が目に入ったようで木下君が聞いてきました

「あ、これですか？学園長先生にもらったんです。私の召喚獣が特殊みたいでデータが欲しいからって。小さい召喚フィールドも展開できるんですよ」

「へえ・・・それは凄いね」

「・・・（コクコク）」

「さて、そろそろ帰ろうか。送って行くぞ、音尾」

「うむ、そうじゃの、あんまり遅いと親も心配するじゃろ」

「そうですね・・・でもその前に・・・」

「どうした？」

「待っててくれたお礼に・・・1曲聴いてくれませんか？」

その後Fクラスの教室で小さな演奏会をして私達は帰りました

## 12話

Bクラス戦決着から2日経って・・・

補給も終わって今日、私達はいよいよAクラスに宣戦布告します

「まずはみんなに礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもないみんなの協力があつてのことだ。感謝している」

教壇に立つ坂本君がそう言いました

「私からもお礼を言います。ありがとうございます」

私も坂本君の隣に立って続いて言います

「音尾さんはともかく、どうしたんだ坂本。らしくないぜ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

クラスメイトの男の子の1人が茶化しますが坂本君は普通に答えます

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そつだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

クラスのみんなの気持ちが1つになっていきます  
私もここまで来たならみんなのために絶対勝ちたいです

「みんなありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

『どっということだ?』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

坂本君が机をバンバン、と叩いて皆を静まらせます

やっぱり一騎打ちという言葉にみんな不安を感じますよね

「やるのは・・・俺と翔子だ」

「バカの雄二が勝てるわけなあっ!」

吉井君の言葉に怒った坂本君が吉井君にカッターを投げました

「次は耳だ」

「坂本君ダメですよ!そんなことしちゃ危ないですよ!吉井君もそんなこと言わないの!」

「あ、ああ……」

「ごめん……」

今までのことを考えれば何か勝つ手があるってわかるじゃないですか……

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

落ち着きを取り戻して坂本君はそう言います

「だがそれはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともによりあえば俺達に勝ち目はなかった」

「けど、私達は勝ったじゃないですか」

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

「みなさん坂本君を信じましょう」

「過去に神童とまで言われた力を、今みんなに見せてやる！」

『おおおーっ！！』

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

小学生レベルで上限あり・・・この内容だと満点が前提で、ミスをした方が負けるといった注意力勝負になりますね

「でも同点だったら、きっと延長戦だよ？そうだったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦にしねえよ。俺がこのやり方を取った理由は1つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題を確実に間違える・・・  
その言葉に全員が静まります

「その問題は・・・大化の改新！」

「大化の改新で小学生レベルなら・・・何年に起きた、とかですか？」

「正解だ音尾。音尾の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

「大化の改新なら、645年だな」

クラスメイトの1人が答えを言います

「ああ。普通ならこんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

坂本君がそう言うのと吉井君が顔を背けます・・・  
もしかしてわからなかったんですか？

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！これは確かだ、だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！晴れてこの教室とはおさらばだって寸法だ！」

どうして絶対間違えると言い切れるんでしょう・・・？  
霧島さんを下の名前で呼んでますし・・・

「あの、坂本君」

「ん？なんだ音尾」

「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか？」

疑問に思った私は坂本君に聞いてみます・・・

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ？！なぜ明久の号令でみんなが急に上履きを構える?!」

その言葉になぜか吉井君は激高し、号令を上げました

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

吉井君はが坂本君に敵意抜き出しでそう言います

「俺が一体何をしたと?!」

「遺言はそれだけか?・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ」

「了解です隊長」

「みなさん落ち着いてください!」

私が場を静めようと思いますが、みんな聞く耳を持ちません・・・

「あの、吉井君」

「ん?なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

「そりゃ、まあ。美人だしね。でも・・・」

吉井君は姫路さんの質問に答えながらこっちをチラッと見てきました

「・・・」

「え?なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの?!それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げつけ

ようとしているの?!」

もうどうしたらいいのかわかりません・・・

「まあまあ。落ち着くのじゃ、みな衆。音尾が困っておるのじゃ」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ木下君

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ? 男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

どういうことでしょう・・・?

「むしろ、興味があるとすればじゃ・・・」

「・・・そうだね」

するとみんなの視線が姫路さんに向けられたあと、私にも向けられます

「な、なんですか・・・?」

「私達、何かしましたか?」

「よくわからんが気にするな。音尾も姫路も、お前らは何もしていない。とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度教えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。けど今回は仇になる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は・・・」

『システムデスクだ！』

### 13話

Aクラス教室にて・・・

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎打ちを申し込む」

今回は代表である私、坂本君と他数名で宣戦布告に来ています

「うーん、何が狙いな？」

「それはもちろん、Fクラスの勝利だ」

今、坂本君が対戦方法の交渉をされていて、交渉を受けているのは木下君の双子のお姉さんの木下優子さんです  
うん・・・確かに外見では見分けがつかないです

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな。ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

木下君の挑発を受けて昨日Aクラスに攻め込んだCクラスは半日で負けてしまい、今CクラスはDクラスと同じ設備で授業を受けてい

るそうです

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって・・・昨日来ていたあの・・・」

木下さんの顔が少し青くなります

そんなにBクラスに攻めこまれるのはまずいのかな？

「ああ、あれが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだのよ  
うだが、さてどうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、3ヶ月の準備期間を  
取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

試召戦争の泥沼化を防ぐために、試召戦争に敗北したクラスは3ヶ  
月の準備期間を取らない限り再び試召戦争を申し込むことは出来な  
いというルールがあります

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は和平交  
渉にて終結ってなっているんだ。規約には何の問題もない。・・・  
Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「・・・それって脅迫？」

みたいに聞こえますよね

「人聞きの悪い、ただのお願いだよ」

「うーん・・・わかったわ。何を企んでいるのか知らないけど、代

表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

はぁ・・・。つとため息をついて、木下さんはそう言いました

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・」

つと木下さんはまた顔を青くしました

「あんな格好？つてどんな格好ですか？」

「ああ、そういえば音尾は知らなかったな」

「あれを見てないなんて幸福ね・・・」

「あれって・・・？」

「聞かないで・・・思い出したくないわ・・・」

私の問いかけに木下さんは顔を青くして少し涙目でそう答えました

「でも、こちらからも提案。代表者同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争なんだからね。しかも代表でもないのにあなたが出てくるんだから警戒するわ」

つと木下さんは口元に指をつけて言います  
可愛い仕草で誘惑しても坂本君には・・・

「それもそうか。ならその条件を呑んでもいい」

「ホント？嬉しいな」

効きましたね・・・  
なぜかちよつと悔しいです

「その代わり勝負の内容はこっちで決めさせてもらつ、それくらいのハンデはあつてもいいだろ」

「え？うーん・・・」

「・・・受けてもいい」

「キャッー！」

突然の凜とした声に私は驚いて、声をあげてしまいました

「・・・雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

声の主はAクラス代表の霧島さんのようです

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……そう」

霧島さんが姫路さんと私をじっくりと観察するように見て、坂本君に顔を向けて……

「……負けた方は何でも1つ言うことを聞く」

つと言いました

「音尾どうする？」

坂本君は私に条件を受け入れるか聞いてきました

「え？う、うーん……できれば受けたくないですね。変なプレッシャー受けるのも何ですし……」

「だそうだ。悪いがその条件は呑めない」

「……そう、なら一騎打ちは却下で……」

「わかった、条件を呑もう」

条件を受け入れないと聞くと霧島さんは交渉を白紙に戻そうとして、坂本君はすぐ条件を受け入れます

「じゃ、こうしよう？勝負内容は5つの内3つそっちに決めさせてあげる。2つはうちで決めさせて？」

こっちが弱気になったと見えたようで、木下さんも少しでも自分側が有利になるように持って行きます

「ま、妥当なところか。交渉成立だな」

そうして宣戦布告と対戦内容の交渉が終わりました

その日の放課後・・・

「アウェイクン」

私は学園長先生に言われたデータ取りのために屋上で腕輪を起動します

実は腕輪をもらってから毎日10分くらいやっています。って言うても今日で3日目ですけどね

「サモン」

Fクラス 音尾奏 物理 101

召喚フィールドの教科選択はランダムの上です

さて・・・

くくくく

明日はAクラス戦なので難易度が高めの曲を練習します

ガチャツ

練習に集中していると誰かが屋上へ上がってきました

「あれ？音尾さん？どうしたのこんな時間に、こんなところで……？」

「あ、えっと……学園長先生に言われたデータ取りをかねて召喚獣の練習を……そう言う吉井君は？」

「僕は観察処分者の雑用で残ってたんだけど、屋上から音が聞こえたから来てみただけだよ」

「そうですか。吉井君少し聞いてもいいですか？」

「え、う、うん……な、なんでもどうぞ」

私の問いかけになぜか吉井君は顔を赤くしてテンパっています

「召喚獣の操作についてなんですけど……」

「え？うん、それがどうしたの？」

吉井君がガツカリした表情をしています……なんで？

「精密な操作をするイメージが難しくって……吉井君はどうしてるんですか？」

「え？ああ、僕はね……」

## 14話(前書き)

まあ様の「嘘と話術とノラ猫」の特別問題に音尾奏が出演?させて  
頂きました

まあ様ありがとうございます

## 14話

次の日、午前10時、Aクラス教室

「改めて見ると、すごいな」

「ですね・・・」

Aクラスの設備は、巨大サイズのプラズマディスプレイ、人数分用意されたシステムデスクにリクライニングシート、パソコンや個人用エアコンや冷蔵庫まであり、その中身も学園側で管理と優遇と言うより甘やかしてるような豪華さです

「それでは、これよりAクラス対Fクラス、試験召喚戦争を始めます。今回は特別ルールを用い、5回勝負を行い3勝したクラスが勝利とします」

決戦の立ち会い人は、Aクラス担任で学年主任の高橋先生です

「では、両陣営とも準備はいいですか？」

「はい」

「・・・問題ない」

高橋先生の確認に、それぞれの陣営の私と霧島さんが答えます

「それでは、1人目の方、どうぞ」

「行つてきます」

「ああ」

私<sup>が</sup>先鋒として前に出ていきます

「Fクラス代表、音尾奏です」

いきなり代表が出てきたことにAクラス陣営がざわつきます  
そして出てきたAクラスの1人目は・・・

「Aクラス木下優子よ」

昨日交渉を任されていた木下君のお姉さんです

「科目は何にしますか？」

「その前にこの対戦は5対5のチーム戦でお願いします。科目は後で言います」

「わかりました。それではあと4人ずつメンバーを集めてください」

私と木下さんは一旦両陣営に戻ります

「坂本君このあとの対戦に出る予定の人は誰ですか？」

「2回戦は決めてないが、3回戦がムツツリー二で4回戦が姫路だ」

「じゃあ・・・木下君と美波さんと吉井君と須川君お願いしていい？」

「うん、いいよ」

「任せるのじゃ」

「わかったわ」

「我らが姫が望むなら、な」

「みんなありがとう。須川君、私姫って柄じゃないよ・・・」

からかってきた須川君に言い返します

「まあいいじゃないか。音尾はFクラスの代表だから俺達から見ればお姫様だ」

そう坂本君が言います

「もう・・・」

恥ずかしくて顔が赤くなっちゃうよ・・・

「ホラ向こうが待ってるぞ」

「う、うん」

私達は前に出ます

「始める前にちょっといいかな？秀吉に話があるんだけど」

木下さんが木下君を見て言います

「姉上、悪いが代表に迷惑をかけたくないのでな、あとにしてもらえるかの」

木下君がお姉さんにそう冷たく言います

「へえ・・・言うじゃない秀吉の癖に・・・」

木下さんはそれを聞き、かなり怒っているようです

「では改めて、科目は何にしますか？」

高橋先生が試合の進行をするために教科を聞いてきます

「数学でお願いします。それと3分ぐらい作戦タイムいいですか？」

「わかりました。それぞれ3分間で作戦を話し合ってください」

流石にインスタントチームなので作戦タイムは外せません

「どうするのじゃ？」

「そうですね。とりあえず須川君と美波さんが前衛で。美波さんが1番点が高いのでとにかく誰か1人早めに倒してください。須川君は美波さんのサポートをお願いします。吉井君は私を守りながら指示出しをお願いします。吉井君は無理に敵を倒さなくてもいいですから、とにかく私に敵を近づけさせないでください」

「うん、わかった」

「オツケー」

「了解」

「それでわしは・・・?」

「木下君は・・・多分お姉さんに集中的に狙われると思うのでがんばってください」

「う、うむ・・・」

そして作戦タイム終了

「それでは試合を・・・」

「あ、ちょっと待ってください」

「まだなにか?」

「すみません、すぐ終わります。土屋君そこに置いてあるケースを取ってください」

そう言っつて私がこの教室に持ってきたケースを取ってもらい、中の物を取り出して、ケースを返します

「ほ、本当にやるの?」

「もちろんです。勝つためですから。吉井君、多分私全く動けないと思いますから、全てを頼みます」

「う、うん。任せて」

「いいですね？」

「はい」

高橋先生の確認に準備OKの返事をします

「それでは……」

みんなの召喚獣が武器を構えます  
そして私も……

「始め！」

）　　）  
）　　）  
）　　）

「なっ?!」

「えっ?!」

両陣営から驚きの声上がる……  
私は今、召喚獣とピッコロと狩猟笛で二重奏デュエットをしています  
なぜなら昨日、吉井君に聞いた質問の答えは……

頭の中で細かい動作をイメージし辛いなら実際に自分でその動作を  
すればいいんだよ

つと言っことだったからです

「奏……すごい……」

「美波！ボーっとししないで戦って、美波が1番点が高いんだから！」

「わ、わかったわ！」

私は集中するために目を瞑っているので周りの声でしか状況がわかりません

でもピッコロを吹いているからか、いい感じに集中できます……  
今なら手を出せなかったあの曲も……

＼  
＼  
＼  
＼

「す、凄い……かなり難そうな曲なのに召喚獣と一緒に……」

「くっ！！なによこれ?! 点数の何倍もの性能になってるじゃない……これが……」

Aクラス陣営から呆気に取られた声が聞こえ、木下さんの苦しそうな声が聞こえます

「そうじゃ！これが音尾の力じゃ！勝たせてもらっぞ姉上!!」

「なっ?! そんな……秀吉なんかに負けるなんて……」

木下君がお姉さんを討ち取ったみたいですね

「音尾さん、あとちょっとで終わらせるから、がんばって！」

そう言っつて吉井君も戦闘に参加していきます

もう4対4で戦えるので護衛はいりません

私はただひたすら・・・演奏を続けるのみです・・・

## 14話(後書き)

奏と召喚獣の二重奏は無理があるかなと思うけど、できれば気にしないしてほしいです

## 15話(前書き)

ヒヨウガ様の「バカと発明と召喚獣」のコラボに音尾奏と前作の坂本優紀子が出演しました

ヒヨウガ様ありがとうございます

## 15話

「第1試合、勝者Fクラス」

1人討ち取られ浮き足立つAクラスチームを各個撃破し私達は勝ちました

『うおおおおおー！！！』

高橋先生がそう宣言した瞬間、Fクラスから割れんばかりの歓声があがりました

「は、はぁー勝った・・・」

私はホツとして思わずその場にペタンと座り込みます

「よくがんばったね音尾さん」

「うむ、凄かったのじゃ」

「それに演奏してる奏、凄く綺麗だった」

「まさに姫って感じだな」

みんなが私に駆け寄ってきて褒めてくれます

「そんな・・・戦闘をみんなに任せて吹いてただけだから・・・」

「でもその演奏がなかったら勝てなかったよ」

「そうそう」

「じゃな誇っていいと思うぞい」

「みんな・・・ありがとう」

そう言われて涙が溢れてきます  
まだクラスが勝ったわけじゃないのに・・・

「ねえ・・・ちょっといいかしら」

木下さんがそんな私達に声をかけます

「な、なんででしょうか？」

「なんじゃ姉上、今の試合に物言いでもつけるのか？」

「そうじゃないわ。さっきの話の続きよ、秀吉」

そういえば試合前に話があるって言ってましたね

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

あれ・・・？もしかしてバレちゃってる？

「はて・・・誰じゃ？」

「じゃーいいや。かわりにちょっとこっちに来て・・・」

「あ、わ、だ、ダメです！」

木下君を連れて行くこととするのを慌てて止めますが・・・

「なに？もう試合は終わったんだから、あなたは関係ないじゃない」

「そ、そんなことない・・・です・・・よ・・・」

木下さんの迫力に圧されて声が段々小さくなっていきます

「いいんじゃない音尾。こうなるのはわかっておったんじゃ・・・」

結局木下君はお姉さんに連れて行かれました・・・

廊下のほうから木下君の悲痛な叫び声が聞こえて、お姉さんが顔や手についた赤い何かを拭き取りながら戻ってきました

「うええええん、木下君が、木下君が・・・」

「ああ、あいつは見かけによらず漢だったんだ・・・奴の死は無駄にしない」

「殺してないわよ！」

雄二君が泣いている私の肩に手を置いて言い、木下さんが突っ込みました

「では次の方前へ」

泣いてる私をよそに高橋先生が試合を進めます

Aクラスからは佐藤美穂さんという方が出てきて教科は物理を指定

しました

Fクラスからは・・・

「よし頼んだぞ、明久」

「え?!僕?!さっき出たよ?!」

「同じ人を2回以上出してはいけないなんてルールはないからな」

え?じゃあ姫路さん出せばよかった・・・

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

そう坂本君が吉井君に言います・・・

あれ?こんな感じの坂本君をつい最近2回見たような・・・

「ふう・・・やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

すっかり乗せられてますね吉井君・・・

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか?」

「いや、そんな話は聞いたことないが」

「いつものジョークだろ?」

味方であるはずのFクラスのみんなの声・・・

最後の方、正解だと思います

「吉井君、でしたか？あなた、まさか・・・」

対戦相手の佐藤さんが吉井君の何かに気づいたような発言

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない」

袖をまくって不敵な笑みを浮かべる吉井君

あれ・・・まさか、本当に・・・？

「それじゃ、あなたは・・・」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕・・・」

そして吉井君は、大きく息を吸い込んで・・・

「・・・左利きなんだ」

Fクラス 吉井明久 物理 62

VS

Aクラス 佐藤美穂 物理 389

「勝者Aクラス」

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

流石に1人じゃ6倍以上のの点差をひっくり返せるわけ無いですよ

「美波さん、そ、そのへんで・・・」

「そうだな、勝負も振り出しだし、ここからだ」

「ちよつと待った雄二！お前、僕を全然信頼してなかっただろ！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

「あ、あはは・・・」

何が狙いの2回戦だったんでしょ？

「では、3人目の方どうぞ」

「・・・(スック)」

土屋君が立ち上がりました

「土屋君、がんばってください」

「・・・(グッ)」

土屋君は私の応援に応えるように親指を立てて前に歩いていきました

「じゃ、ボクが行こうかな」

対するAクラスからはボーイッシュな女の子が出てきました

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

「・・・保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね。でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？・・・キミと違って、実技でね」

その言葉に、Fクラスの面々は沸きました  
実技つてラジオ体操とかでしょうか・・・？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

工藤さんに吉井君が指名されます

「フツ、望むところ・・・」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

美波さんに姫路さん・・・よくわかりませんが吉井君が死ぬほど哀しそうな顔をしていますよ？

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。サモンっと」

「・・・サモン」

2人の召喚獣が、それぞれ武器を持って出現します

土屋君の方は2本の小太刀。一方工藤さんは巨大な斧です

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの召喚獣が腕輪を光らせて動きます

斧に雷光をまとわせて、かなりのスピードで距離を詰めて斧を振るうとしたとき・・・

「・・・加速」

「え？」

突如土屋君の召喚獣の姿が消え、相手を挟んだ反対側に・・・  
そして・・・

「・・・加速、終了」

土屋君がそう呟いてから一呼吸置き、工藤さんの召喚獣が倒れました

Fクラス 土屋康太 保健体育 572

VS

Aクラス 工藤愛子 保健体育 446

「そ、そんな・・・！この、ボクが・・・！」

相当なショックを受けたようで、工藤さんはさっきの私のようにその場に座り込みました

「これで2対1ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ！」

「それなら、僕が相手をしよう」

Fクラスからは姫路さん、Aクラスからは学年次席である久保利光君

「事実上の、学年次席争いだな・・・」

坂本君がそう呟きます

「科目はどうしますか？」

高橋先生が声をかけます

「総合科目でお願いします」

久保君がそう言います

総合科目は学年順位がそのまま影響する科目です

「大丈夫でしょうか・・・」

「大丈夫さ・・・」

坂本君はニヤリと笑います

Fクラス 姫路瑞希 総合科目 4409  
VS

Aクラス 久保利光 総合科目 3997

「ま、マジか!？」

「いつの間にこんな実力を!？」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!」

両陣営から驚きの声が上がります

点数差400点オーバーなのだから、無理もないですね

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ?」

「……私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

その言葉とともに、姫路さんの召喚獣の大剣が久保君の召喚獣を切り倒しました

「しょ、勝者、Fクラス!……よってFクラス対Aクラス、3対1で……Fクラスの勝利です!」

高橋先生の言葉が響きわたると同時に、Fクラスのみなさんが歓声を上げ、私は今日2回目の嬉し涙を流しました

## 16話

勝利の宣言がされてFクラス陣営から大歓声をあげります

『う、うおおおおおおお！！』

「や、やったぜ！」

「ああ、とうとうAクラスを！」

「音尾さんマジ女神！！！」

「姫路さん音尾さん愛してる！」

などなどいろいろな言葉が飛び交います  
女神って……

「ま、まさかAクラスの僕達が……」

「そんな……」

「うそだろ……？」

私達とは逆に、Aクラスではまるでお葬式のような空気になっています  
少し可哀想に見えてきますね……

「……みんな、まって……」

そんな霧島さんの言葉に、辺りの視線が霧島さんに向きます。何で

しょう……？

「……まだ、勝負は全部終わってない」

その一言に、辺りがざわめきだします

「どづいづことだ……？」

「いや、確かにそうだが……」

「でも、もういまさらじゃ……」

「おい、翔子。なにを言ってる？見苦しいぞ」

「……私はただ、事実を言ってるだけ。それとも雄二、私に負けるのが……怖い？」

霧島さんはどうして自分の試合に拘るんでしょう？

霧島さんのそんな煽るような言葉に、坂本君がいきり立ちます

「んなわけあるか！そんなに大敗を喫したいならやってやるうじやねえか！高橋女史、第5試合の教科は日本史。ただし、小学生レベルで上限100点で頼む！」

「坂本君、落ち着いて……」

あらかじめ決めてた作戦を高橋先生に言う坂本君

霧島さんはなぜここまでして戦いたいのでしょうか……？

「……わかりました。では、問題を用意しますので少々お待ちく

ださい」

高橋先生も霧島さんの意図がわからないようで首を傾げますが、とりあえずそう言っておいて教室を出ていきます

「雄二、いいの？あんなあからさまな挑発に乗っちゃって」

「構うか。もともと俺とあいつの一騎打ちのはずだったんだろ。それに勝敗は決してる。あいつらは自分達の負けをよりいっそう自覚するだけだ」

「それならいいけど・・・」

吉井君と坂本君がそんなやり取りをしています

『では、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

テストが行われる視聴覚室の様子はAクラスの巨大プラズマディスプレイに映し出され、他の面々はそれを見ながら待機しています

『不正行為などは即失格になります。良いですね？』

『・・・はい』

『わかってるぞ』

『では、始めてください』

そして試験が始まります・・・  
ディスプレイに問題が映し出されていきます

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

・

・

・

「でました・・・」

「うん、僕達の大勝利だ！」

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

V S

Fクラス 坂本雄二 90点

え？あれ？

「雄二、あの点数なに・・・？」

「うるさい・・・俺だって悔しいんだ・・・」

吉井君の問いかけに坂本君が明らかにイライラした声で答えます  
いつもはあまり表情から感情や気持ちを読み取れない坂本君ですが、  
今の表情からははつきりと悔しさが見て取れました

「・・・雄二」

そこに、霧島さんがやってきました。何でしょうか・・・？

「約束、覚えてる・・・？」

「ん？負けた方が勝った方の言うことを聞くってあれか？そうだな、  
なら・・・」

こっちが何か要求できるってことですね。特にありませんけど

「・・・うん。私の言うことを聞いてもらう」

・・・はい？

「ちょ、ちょっと待て翔子！勝ったのは俺達の方だぞ?!」

「・・・雄二は全く分かってない」

「はあ？何がだ？」

「私は、試召戦争に負けた方が勝った方の言うことを聞く、なんて一言も言っていない……」

え……それって屁理屈じゃ……？

「ま、待て翔子！まさかその約束って……！」

「私と雄二だけの約束……」

霧島さんが勝負に拘った理由はこれだったんですね……

「……雄二、それじゃあ……」

霧島さんが坂本君に近づいて……

「……私と付き合って……」

つと言いました……はい？

え？これって告白ですよね……？

「お前とは付き合えない。悪いが断らしてもらおう」

坂本君もそんなに即答で断っちゃうんですか？！

「拒否権なんかない。これからデートに行く」

霧島さんが坂本君の襟を掴んで引っ張っていきます

「ちよ、ちよつと待て！まさかお前、試召戦争に勝っても負けても揚げ足取ったりしてこうするつもりだったな？！・・・ちよ、離せ！こら！俺には他に好きな奴がつ！！！」

ピタ

好きな人がいる・・・

坂本君のそんな爆弾発言に霧島さんも思わず止まります

「・・・誰？」

## 17話

「・・・誰？」

「え？あ、えーつと・・・」

霧島さんの問いかけに坂本君は真っ赤になりながら私を見てきました・・・

え？ウソ？！坂本君の好きな人って・・・

「私?!」

「・・・浮気は許さない。夫を誑かす泥棒猫は・・・」

霧島さんがそう言いながら怒りに染まった表情でこちらに近づいてきて・・・

霧島さんが腕を振り上げて・・・叩かれる?!

私は目を瞑って身を縮めます・・・

「・・・雄二、放して」

・・・が霧島さんの腕は振り下ろさませんでした

目を開けると霧島さんの腕を坂本君が掴んでいました

「こいつに何かしてみろ・・・俺は絶対許さないからな・・・」

怒りと少し悲しみの混じった声で坂本君は言いました

「・・・っ!」

霧島さんは私を涙目で睨んで視聴覚室から出て行きました・・・

「大丈夫か音尾？」

「う、うん・・・」

坂本君が声をかけてきますが私は坂本君の顔を見ることができません・・・

「雄二、協定違反じゃない？」

「そうじゃ抜け駆けはせぬと決めたじゃろ」

「・・・(コクコク)」

そんな私達を呆れたように見る吉井君、木下君、土屋君の3人

「悪いな、あの状況じゃ言っしかないだろ。ならお前らもこの場で言っちまえよ」

「え？」

坂本君はそう3人に言います

「こんな雰囲気と言うのも何じゃが遅れはとりたくないし仕方ないの」

「みんなで言えば怖くないってね」

「普通は1人で言うものなんじゃがな」

「……(コクコク)」

え？ちよつとまさか……

「音尾さん……僕も音尾さんのことが好きなんだ」

え？！ちよつ？！

「わしも音尾のことが好きなのじゃ」

なっ？！

「……(ジー)」

「えっと……土屋君もですか？」

「……/ / (コクン)」

私の問いかけに土屋君は頷いて答えました

「あの、えっと……なんて言えばいいんでしょうか。そ、その……」

「今すぐ答えを出す必要はないのじゃ、ゆっくりでいいから音尾が一番一緒にいたいと思う人を選んでくれれば……それがわしらの中の誰かでも違つ誰かでも……わしらは文句は言わぬ。そう決めたのじゃ」

「みんな・・・ありがとうございます。ゆっくり考えます」

「そうしてくれ。ただ・・・できれば早く答えを出して欲しいがな」  
「そっだね」

「・・・(コクコク)」

そ、それはそうですね・・・

「これは僕にもまだチャンスはあるってことかな」

「え？」

やっと落ち着くかなと思った矢先に声がかかる

「久保君?!」

「お前、明久に惚れてるんじゃないのか？」

「ゆ、雄二?! あれは冗談じゃなかったの?!」

え? 男同士ですよ?

「そんな昔の事は忘れたよ。音尾さん、今日、演奏する姿を見て、僕もあなたを好きになりました。付き合ってくださいませんか？」

え? う? あ? ちょ・・・

「ほう・・・俺達を差し置いて交際を申し込むなんていい度胸じゃ



「まで! どういうことだ、鉄人?!」

「西村先生と呼べ、坂本。Aクラスに勝ったとはいえ、もう試召戦争に参加しないわけではない。他クラスから宣戦布告を受ければ当然試召戦争をしなければならん。だからお前らの成績向上のために、俺が担任になったのだ。明日からビシバシいくから覚悟しとけよ!」

せ、せつかくがんばってAクラスに勝ったのに・・・  
はあ・・・

「さあ、アキ。とりあえず今日はもう何もなみないだし、約束通りクレープを食べに行きましょうか? じっくり聞きたい事もきたしね」

「え? 美波、それは週末の話じゃ・・・」

「そうですね。吉井君には聞きたいことが山ほどありますね・・・  
美波さんと姫路さんが妙に迫力のある笑顔で迫られています

「そんじゃ俺達は明久放って置いてどこか遊びに行くか?」

「そうじゃの明久は忙しそうじゃし」

「・・・(コクコク)」

「え? ちょっと? みんな置いてかないで!」

吉井君の助けを求める声を無視して私達は視聴覚室を後にしました

美波さんや姫路さんに嫉妬されると怖そうだし、私を想ってくれるなら、ちゃんと2人にわかってもらってからにしてくださいね

- ・ 久保君はフードを被った男の子達にどこかに連れて行かれました・

## 17話（後書き）

なんじゃそら・・・ありえねえ・・・的な突っ込み、批判は勘弁してください

FFF団の基準

告白のみ・・・セーフ

告白+交際の申し込み・・・アウト

というか霧島の告白から明久達の告白まではFFF団も頭がフリーズ  
ズしていて久保の告白で再起動したって感じかな

## 18話

「それでは、クラスの出し物を決めたいと思います。なにか意見のある方はいますか？」

Aクラス戦から1ヶ月ちょっと・・・

文月学園では、新年度最初の行事である清涼祭の準備が始まりつつあります

私は代表としてみんなにクラスの出し物について意見を求めます

「・・・(スクツ)」

「はい、康太君」

「・・・写真館」

ちなみにこの1ヶ月の間にわたしに告白したFクラスの4人とは名前前で呼び合うようになりました

久保君は・・・FFF団によって処刑されたそうです

「はい、写真館ですねー」

出された意見をパソコンに打ち込んでディスプレイに出します

「次は・・・はい、横溝君」

「メイド喫茶・・・っと言いたいけど、流石に使い古されてると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶・・・ですか？なんですか、それ？」

「普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着てるんだ」

「えっと・・・結婚式以外でウェディングドレスを着ると婚期が遅れるというジンクスがあつてですね・・・」

「却下だな」

私の言葉を聞いて坂本君が意見をバツサリ切り捨てます

「ま、まあ、意見の1つなので書いておきますね」

ディスプレイに意見を表示します

「さて、次は・・・はい、須川君」

「俺は中華喫茶を提案します」

「中華喫茶ですか？今度はチャイナドレスですか？」

「いや、そんな色物で稼ぐような奴じゃなくて、本格的なウーロン茶や飲茶、あとは簡単な中国料理を出す奴です。姫様」

須川君・・・意見はまともでもいいのですが、そろそろ姫様と呼ぶのは勘弁して欲しいです

「他に意見は・・・ないようですね」

「奏よ、お主はないのか？」

意見が途切れると秀吉君が私にやりたいものはないか聞いてきました

「え？わ、私ですか？そうですね・・・せっかく教室が広いですし、ステージを作ってショーをやるのも面白いかなって思っていましたけど・・・この3つじゃ合いませんね」

「ならそれに合う出し物を考えようか。奏はもうちょっとわがままになってもいいと思うぞ」

私の案を聞き雄二君が私の意見も取り入れた出し物にしようと言います

うーん、わがままに・・・ですか・・・

「そ、そうでしょうか・・・」

「ショーに合う出し物ねえ・・・」

『うーん・・・』

明久君の言葉にクラスのみんなが考え込んでしまいます

「ショーと言ったらアメリカってイメージだな・・・」

「アメリカ・・・ワシントン・・・」

「ニューヨーク・・・フロリダ・・・」

連想ゲームのように言葉が出て来ます

「ハワイ・・・カリフォルニア・・・」

『ラスベガス!』

クラス全員の思考が一致しました

「カジノか・・・いけるんじゃないか？」

雄二君がそこから導き出される答えを言います

「そうじゃの、カジノならショーがあってもおかしくないのじゃ」

秀吉君はカジノに行ったことがあるんでしょうか・・・私達の年じや入れないはずですが・・・

「流石にカジノじゃ通らないかもしれませんがからカジノっぽい遊びができる喫茶店ということにして今までの3つと合わせて多数決をとりますね」

多数決の結果カジノになりました

「ではカジノに必要なスタッフは・・・ディーラーとステージ班はパフォーマーに裏方に・・・」

「軽食や飲み物も出すならホールと厨房だね」

「そうですね。ではまず何かステージで出し物をしたい方いますか？」

シーン……

ついでですよね……

「手品、歌、漫才、コント、なんでもいいですよ」

「歌なら、わしが歌おうかの」

「はい、じゃあ今のところ私と秀吉君だけですな……」

「もうおらんのなら2人だけでがんばるかの、奏よ」

秀吉君が自慢するようにそう言うと明久君と康太君と雄二君がビクツと反応します

「な、なにか僕にできることは……」

「クソツ秀吉に遅れはとりたくねえ」

「……鼻血パフォーマンス……やるか……」

3人が焦ったようにそう言います

康太君それは命に関わるからやめてね……

「秀吉君煽らないの。3人とも気にしなくてもいいよ、ずっとステージをやるわけじゃないんだから、それ以外はホールに入るよ。秀吉君はディーラーと兼務でいいですね」

「そ、そうだよな、じゃあ僕はホールにしようかな」

「・・・料理は任せろ」

「じゃあ俺はディーラーをやるか」

「じゃあ厨房班、ホール班、ディーラー班に分かれて、それぞれ康太君、明久君、雄二君がまとめてくれる？」

「わかった」

「おう、任せろ」

「・・・(コクコク)」

「ステージ班のパフォーマーと裏方は基本他の班と掛け持ちで、やってもいい人は秀吉君に言ってください・・・それでは行動開始！」  
パンツと手を叩くとみんなが行動に移ります

「だいぶ代表が板についてきたの」

「そ、そうかな・・・」

出し物の申請書を書いていると秀吉君が声をかけてきます

「うむ、1ヶ月前とは大違いなのじゃ」

「秀吉君のアドバイスのおかげかな」

「そうならわしも嬉しいぞい」

「秀吉！ 抜け駆けしてないでこっち来い！ お前もディーラー班の1人なんだからな！」

そんな会話をしていると坂本君が怒った風に秀吉君を呼びました  
ふふ・・・嫉妬ですね

「じゃあ私は申請書を出しに行つてきま・・・」

《ピンポンパンポーン》

《2年Fクラス音尾奏、坂本雄二、学園長室に来てください。繰り返し  
返します・・・》

な、なんでしょう・・・？

19話

コンコン

「音尾です」

『入りな』

ガチャッ

私と雄二君が学園長室に入ります

「失礼します。学園長先生、私達に何か用ですか？」

学園祭の準備中に突然学園長室に呼び出された私と雄二君……  
なんでしょう？召喚獣のデータの事かな？でもそれなら雄二君も呼  
ばれるのはおかしいですよ  
と言うかなんで雄二君が呼ばれたんでしょう？

「ふむ。実はね、アンタ達に頼みがあるのさ」

「頼み……ですか？」

「ああ。清涼祭でやる召喚大会のことは知ってるね？」

「はい、知ってますけど……」

「それがどうかしたのか、ババア？」

「雄二君、女性に向かってそれはダメだよ」

それに目の前にいるのは学園長先生だよ？

「その大会の優勝賞品の副賞なんだけどね、それを回収してほしいのさ」

「回収？ちなみにその賞品というのはなんだ？」

「如月グランドパークって知ってるかい？そのプレミアムチケットなのさ」

如月グランドパークとは、この学園から電車で数駅の所に近々オープンする遊園地のことです

「ここは学校なのに学校主催の大会で賞品に遊園地のチケットはいいのか、とかはこの際置いといて、なんでプレミアムチケットを回収するんですか？」

「細かいことは気にするんじゃないよ、それでプレミアムチケットっていうのは如月グランドパークが考えてるイベントの引換券みたいなものなのさ」

「引換券？」

「ああ。そのイベントってのは、パークが総力あげてそのペア、つまりはカップルを結婚までコーディネートするってものさ」

「な、なんだとお！！」

学園長先生の言葉を聞いていきなり雄二君が驚愕します

「まさか、賞品の内容はもう他の生徒に公開したのか?!」

「してなきゃあんたたちに回収なんて頼まないよ」

つまり私と雄二君で優勝して穩便に回収して欲しいと・・・

「まずい・・・まずいぞ・・・あいつのことだから絶対出場して優勝を狙ってくる・・・行けば結婚・・・行けば結婚・・・」

頭を抱えて、なにかを呟いている雄二君。結婚がどうとか言ってますけど、もしかして霧島さんがまだ諦めてないのかな・・・そのとき・・・

「「ちょっと待ったあ（つのじゃ）!!」」

バンッ

明久君と秀吉君が凄い勢いで扉を開けて入ってきましたその後、康太君も普通に入ってきます

「なんさね!アンタらは?!」

「雄二!また抜け駆けする気だな!」

「そつじゃ!お主これで2回目なのじゃ!」

「・・・(コクコク)」

「ちょっと待て！何のことを言ってるんだ?!」

「とぼけるな雄二！プレミアムチケット手に入れて奏と2人で如月グランドパークに行くつもりだったろ?!」

3人は私達の後をつけてきて盗み聞きをしていたようですね・・・  
4人は私と学園長をそっちのけで口喧嘩をしています

「アンタらあたしを無視する気かい？」

「すみません学園長先生・・・」

「まあいいさね・・・それにしてもアンタも随分と罪作りな女さね・・・」

「あ、あはは・・・」

私が謝ると学園長先生がニヤニヤと私を見ってきます

「・・・！（キョロキョロ）」

急に康太君が辺りを見回し始めました

「?どうしたんだムツツリーニ?」

「康太君・・・?」

「・・・（シッ）盗聴の気配」

康太君は口に指を当てて静かにするようにジェスチャーをしてそう

言います

「なんだと?!」

「……(キヨロキヨロ)そこ」

康太君は観葉植物の鉢を指差します

「……あつた」

康太君が小さな機械を鉢から取り出しました  
それを学園長先生に渡すと……

「やれやれ……面倒なことになったね……」

学園長先生はため息をついてそう言います

「ムツツリーニ、犯人探しをしてくれ。放つて置くと奏にも危険が  
及ぶかもしれんからな」

「……(コク)」

「それでチケットの回収だが奏と俺ら3人でちょうど2組だな」

「じゃあ奏、僕と組ん……」

「明久、<sup>アウト</sup>抜け駆けじゃな」

「お前だつてさっき抜け駆けしてたろ……」

3人でまた口喧嘩が起こりそうです・・・

「あ、あの！じゃあクジで・・・」

「ま、それが妥当だな」

クジの結果、私と雄二君、明久君と秀吉君になりました

「みなさん、絶対優勝して賞品を手に入れましょう！」

『おおーっ！』

「じゃあ、引き受けるってことで良いんだね？」

「はい」

「その前に、少し提案がある」

「なんだい？」

「1回戦から決勝まで、科目の選択は俺にやらせてほしい。あと対戦の組み合わせをいじって俺達を決勝まで当たらないようにしてくれ。可能性は少しでも高くしたいからな」

そんなことを提案してする雄二君・・・  
いったいどうしたんでしょうか？

「ふーん・・・まあ、それくらいならいいだろう。点数の割り増し  
だったら一蹴していたけどね」

「なら、交渉成立だな」

あれ？学園長先生も認めるんですね・・・

「その代わりに、勝てるんだろうね？」

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

Aクラスに勝ったFクラスの主力メンバーですからね、並みの強さじゃないですよ

## 20話

「あ、やっと帰ってきた。全く・・・指示出す人がいないから作業が進まないじゃない」

「それで、なんで呼ばれたんですか？」

教室に帰ると美波さんと姫路さんに声をかけられました

「学園長先生に召喚大会に出るように言われましてですね」

「召喚大会に？」

「はい」

「どうしてですか？」

姫路さんが理由を聞いてきます

「私の召喚獣のデータ取りのためにだそうです」

「あと優勝賞品の副賞に興味があつてね」

私が理由を隠した意味無いじゃないですか・・・

「え？吉井君も大会に出るんですか？」

「うん、まあね」

明久君の返答を聞いて美波さんと姫路さんの背後に黒いオーラが・

「副賞つてたしか如月グランドパークのプレミアムチケット……  
ですよね？」

「ねえ、アキ」

「なに、美波？」

「奏と行くつもり？」

「奏が選んでくれたらね」

学園長室からの帰りにみんなで話し合って手に入れたチケットは私  
が選んだ人と行くことにしました  
美波さんも姫路さんもまだ明久君を好きなようですね……私いつ  
か刺されるかもしれません……

学園祭初日の朝……

教室は少し暗めの照明に、ポーカー、ブラックジャック用の机が並  
べられています  
もちろんゲームで現金を賭けることはしませんよ。色々景品は出ま  
すけど……

あと飲食のみのテーブルではプラズマディスプレイで召喚大会の中  
継を見ることが出来ます（3回戦までは非公式に中継）

康太君が一晩でカメラとマイクを会場に設置して回線も引いてくれました。もうプロの域ですね  
クラスメイトによれば、先生には内緒で召喚大会の勝敗予想の賭けも行う予定だそうです

バレて営業停止は勘弁してくださいね・・・

ゲームコーナー、観戦用テーブル席のどちらからでも見える位置にショーを行うステージを設置しました。あれから数人出し物をする人が出てきて、交代で裏方することにしました

「随分と本格的な内装になったのじゃな・・・」

「そうですね・・・こんな大規模になる予定じゃなかったんですけどね・・・」

秀吉君と私が呆気に取られながら話します

秀吉君はディーラーの衣装を着ています。ちなみに私はまだ制服です

「じゃあ私は開催セレモニーに行つてきます。そのまま召喚大会に行く予定ですので雄二君に伝えてくださいね」

「開催セレモニー？」

ホール用ウェイターの衣装を着た明久君が不思議そうに聞いてきます

「ええ、吹奏楽部で開催セレモニーで演奏するんです」

「そうなんだ、見に行きたいけど流石に、ここを回さないといけな  
いから無理かな・・・」

明久君が残念そうに言います

「そうですね。でも康太君が撮影してくれますよ」

「・・・任せる（グッ）」

厨房班はAクラス設備にドリンクバーがあるから料理だけでお昼時以外は忙しくないですしね

「では、みなさんお願いします」

「うむ、任せるのじゃ。演奏がんばるのじゃぞ」

「行ってらっしゃい。がんばってね」

「はい、行ってきます」

何の問題なく開催セレモニーも終わり召喚大会1回戦

「えー、それでは試験召喚大会1回戦を始めます。3回戦までは一般公開もありませんので、リラックサして全力を出してください」

今回立会いを務めるのは数学の木内先生がそう言います  
すみません・・・ウチのクラスで一般に公開されてます・・・

「演奏効果は・・・使ったほうがいいでしょうか？」

「そうだな、難しい曲はまだいらないけど欲しいな」

私達のペアは前衛後衛きつちり分かれていますので、戦闘は雄二君に任せて私は後ろに下がります

「頑張ろつね、律子」

「うん」

対戦相手の女子2人が頷き合う・・・微笑ましい光景です  
対戦相手は2・Bの試召戦争のとき前線にいた人ですね

「では、召喚してください」

「」「」「サモン！」「」「」

4人の掛け声で、召喚獣が姿を現します

2・Bクラス	岩下律子&菊入真由美	数学	179&163
VS			
2・Fクラス	音尾奏 & 坂本雄二	数学	121&138

「わぁ・・・雄二君凄い・・・もう点数抜かされてる・・・」

「まあな、前回の試召戦争のとき以来、翔子に勝つために本気で勉強してるからな」

「え？なんで？」

「俺が勝つたら俺を諦めろって命令するためだな」

「は、はあ……」

雄二君も大変なんですね……

「そろそろ開始してもらえますか？」

木内先生が困った顔で言ってきました……  
召喚してとは言ったけどまだ開始してなんて言っ  
てなかったじゃないですか……

「はい、わかりました」

そう言っ  
て演奏を開始します

くくくく

「まずい！演奏を止めるわよ！」

「うん！」

流石にもう演奏効果についてはバレているので相手は私を狙ってき  
ますね

でも……

「そうは問屋が卸さねんだな！」

雄二君が2人の前に立ち塞がります

「2対1で何ができ、キャッ！」

「はあはっはっはっはっは！！無駄無駄無駄あ！！！」

2対1がなんのその、連打連打でガンガン点を削っていきます・・・

「・・・教育者としては、坂本君にはぜひとも負けてもらいたいのです」

私を守ってるんですからそういう発言は止めて欲しいです・・・

「隙有り！」

あ、1人を囿にして雄二君に隙を作って、もう1人がこっちに来ました

私が戦えないと思ってるみたいで警戒もせずに飛び掛ってきます

「あの・・・演奏ばかりだからって別に私戦えないわけじゃないんですよ？」

そう言っただけで演奏を止めて相手の召喚獣に合わせるように笛をスイングします

カッキーんといい音は鳴りませんが演奏効果が乗った攻撃力で相手は戦闘不能みたいです

私は1ヶ月の間、演奏だけを練習していたわけじゃないので、近接戦闘の練習もやってみましたし演奏効果についての実験とか色々やってみました

召喚獣使ってる時間は観察処分者の明久君の次に多いはずですよ

「さて演奏を再」とどめっ！「・・・って必要なさそうですね」

「困役の方も雄二君がたつた今倒しました」

「・・・勝者、音尾、坂本ペア」

不服そうに木内先生が勝者の名を告げる。失礼ですね・・・  
でも、とりあえず1回戦突破です

## 21話

「営業妨害……ですか？」

1回戦を勝ち抜いた後、クラスメイトの1人が私達のところに来てそんなことを言いました

「でも、学園祭の出店なんかには営業妨害って……メリットなんかはないですよ？」

例の盗聴犯の仕業でしょうか？

「いったい相手はどこのだいつだ？」

「うちの学校の3年だ」

しかもよりによって3年生ですか……面倒ですね……  
そして教室に近づくと、騒ぎ声が大きくなります  
教室の扉を開けると……

「イカサマしてんじゃねえぞ、コラア?!」

「なんでワンペアすらできねえんだよ?!」

ポーカーのテーブルで2人の男性が大声でそんなことを言っています  
いや……イカサマしても儲けは変わらないからメリットないです  
し……役ができないのはあなたの運がないだけじゃ……

「まったく、しゃあねえ。ちよっくら行ってくるか」

そう言つて雄二君は首をコキコキ音を鳴らしながらその2人に向かつて歩いていきます

「まったく、責任者もいねえのか！このクラスの代表はゴペツ！」

「私が代表代理の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」

恭しく頭を下げる雄二君・・・

話しかける前に相手を殴っていなければ、まるで模範的な責任者に見えます

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが・・・」

殴られていないソフトモヒカンの男の人が驚きます

「それは私のモットーのパンチから始まる交渉術に対する冒涇ですか？」

うわぁ・・・すごい交渉術ですね

「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・！なにが交渉術ふざげやあつ！」

「そしてキックでつなく交渉術です。最後にはプロレス技で締める交渉術が待ってますので」

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっとまで常村！お前、俺を売ろうというのか?!」

2人でトコ×4常夏（ある歌の替え歌）ですね

小村さんと小夏川さんだったらそのまま歌えたのに・・・  
私のシヨーでこの曲吹こうかな？

「それで、常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるか？」

どうやら雄二君も同じような考えに至ったみたいですね

「いや、もう十分だ！退散させてもらおう」

雄二君の険やかな雰囲気を感じ取ったようで、2人は慌てて逃げ始めますが・・・

「そうか、それなら・・・」

頷いた雄二君は坊主頭の方の人を抱え込んで・・・

「これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めて平然と立ち上がります

流石、ディーラー兼警備員です（警備員は勝手に言ってます）

「お、覚えてろよ!」

倒れた相棒を抱えて走り去って行く先輩

方法はともかくこれで問題は片付きましたね

「なあ・・・俺さっきフラッシュ来たんだが・・・」

「ああ、俺もツーペアとかちゃんと来るし」

「どんだけ運が無いんだろうな、あの2人・・・」

あちらこちらで2人に対する批判の聲が拳がり始めます  
やっぱり運が無いみたいですね

「あの雄二君？」

「なんだ？」

「さっきの人達って例の・・・」

「かもしれんな・・・まあムツツリーニが調べてるから、泳がしておくさ」

「そうですね」

私達はそれぞれの持ち場につこうと着替えに行きます

「・・・チツ！」

え？今どこからか舌打ちする音が・・・  
後ろを向くと、教頭先生が目に入ります・・・こういう遊びが好き  
そうには見えないんですけどね・・・

そして私のステージの時間です

私はステージの脇に待機しています

『お待たせしました。これよりステージにてショーを行います。ピッコロの演奏で、演奏者は我らがクラス代表、音尾奏さんです!』

司会役の男の子の紹介を受けて私はステージに出ます

ワーパチパチパチ

「みなさん、今日は清涼祭、そして私達のクラスの出し物、カジン風喫茶にお越しくださいまして、誠にありがとうございます。精一杯演奏しますので、最後まで聞いてくれると嬉しいです」

ワーワー ヒューー ヒューー

「それでは1曲目はさっき吹こうと決めたこの曲を・・・ふたりの愛ランド」

『アンタ本当に高2か?!』

し、失礼ですね・・・

私のステージも終わって召喚大会2回戦

「それでは、2回戦を始めてください」

私のステージのおかげで(っとみんなが言っていました)忙しいクラスの出し物を抜けてきて私と雄二君は試合会場に來ました

「2回戦の相手ははやっぱお前か」

「さ、坂本?!お前が相手か!」

雄二君を見て戦慄しているのはBクラスの根本君です  
そのパートナーは・・・

「ちょっと根本君?なにビビッてるのよ?」

そう言つて根本君に呆れているのは、Cクラスの代表の小山さんです  
確かこの2人は恋人同士です

「おい、Cクラス代表の小山。これが見たかつたら俺達に負けるんだ」

そう言つて雄二君は何かを小山さんに見せます

「さ、坂本!お前は鬼か?!」

「・・・いいわ。私達の負けよ」

それを見て根本君は焦つて、小山さんは降参しました

「雄二君、それなんですか?」

「ん?これか?」

根本恭二個人写真集 生まれ変わった私を見て!

「え……?」

私は表紙を見て呆然とします……  
実物を見た秀吉君のお姉さんがあんな反応するのもわかります

「じゃあ交渉成立だな」

悪役の笑みを浮かべる雄二君……  
写真集が小山さんの手に渡りました

「ゆ、友香?!頼む!見ないでくれ!」

根本君の懇願も虚しく、小山さんは写真集を開いてマジマジと観ています

「じゃあ勝負はついたし、店が気になるから戻るぞ、奏」

「はい、それでは遠藤先生。私達の勝ちということでもいいですか……  
って先生?」

声をかけながら遠藤先生の方を向くと先生は脇から写真集を覗き込んでいます

先生……興味あるのかな?

「あ、はい!音尾さんと坂本君の勝利です!」

はい、これで3回戦進出決定です  
ちよつと汚いかもしれませんが優勝しないといけない理由もありません  
すし仕方ないのです

決してお店の方が忙しくて早く教室に戻りたいわけじゃありません

「別れましょう……」

去り際にそんな声が聞こえた気がしましたが、気がしただけですね……

「ただいま戻りました……って、あれ？お客さんが少ないですね……」

私のステージ直後は結構繁盛していたんですけど……

「お帰りなさいませ、姫様」

ちょうど厨房から出てきた須川君が私に声をかけてくれます  
相変わらず私を姫と呼ぶんですね……

「ただいま、須川君。それでこれはいつたい……？」

「それが急にお客が来なくなっただけ……あれ？坂本はどうしたんだ？」

「雄二君はお手洗いだそうです」

原因として考えられるのはさっきの2人、または盗聴犯の仕業でしょうか……  
私が考え込んでいると……

『お兄さん、すみませんです』

『いや。気にするな、ちびっ子』

『ちびっ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二君と小さな女の子の声が聞こえてきました

## 21話（後書き）

替え歌は直前の会話で常村のほうが微妙に立場が強いのかな？つと思つて常が多くなつてます

- あとピッコロはソロで吹く楽器じゃないとかは気にしない方向で・

## 22話

「んで、探してるのはどんな奴だ？」

教室に帰ってきた雄二君は連れてきた女の子に尋ねます

相手の女の子は小柄なのか、雄二君の影になつて姿が見えませんか

「雄二君、妹さんですか？」

兄弟姉妹がいるって聞いたこと無いけどな・・・

「かわいい子だな。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

お客さんがいなくて暇なのでクラスメイト達が集まってきました

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ」

どうやら女の子は人を探していて雄二君に声を掛けたようです  
雄二君は面倒見が良いんですね

「お兄ちゃん？名前はなんていうんだ？」

「あう・・・分からないです・・・」

「？家族の兄じゃないのか？それなら何か特徴は？」

「えっと・・・バカなお兄ちゃんでした！」

なんともすごい失礼な特徴ですね・・・  
小さい子だから許される発言ですね

「そうか・・・」

そう言っつて雄二君はグルリと教室を見回します

「・・・たくさんいるんだが？」

「あ、あはは・・・」

悔しいですが、否定はできませんね・・・

「あ、あの、そうじゃなくて、その・・・」

「うん？他に何か特徴があるのか？」

「その・・・すっごくバカなお兄ちゃんだっただんです」

『吉井だな！』

クラスメイト達が声を揃えてそう言います

「ただいまーどうしたのみんな？」

「あつ！バカなお兄ちゃんだつ！」

その時ちょうど明久君が召喚大会から帰って来ました  
小さな女の子は明久君の姿を見るや否や、満面の笑顔で駆け寄り、

そのまま明久君に抱きついて、お腹に顔を埋めます

「なんじゃ明久。お主は奏の他にも女子おなこに手を出しとるのか？」

明久君と一緒に戻ってきた秀吉君がニヤニヤしながら聞いています

「そんなこと無いよ！つで、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん・・・知らないつて、ひどい・・・」

明久君の言葉を聞いて、女の子の顔が歪みます

「バカのお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命バカなお兄ちゃんを知りませんか？つて聞きながら来たのに！」

小さい子つて時に残酷ですね・・・

「明久・・・じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

雄二君と秀吉君が今にも泣きそうな女の子を慰めます

明久君のライフはもう・・・

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに・・・

」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

「ぐあっ!？」

またちようどタイミングが悪いときに姫路さんと美波さんが召喚大会から戻ってきました

明久君の首筋に2人の攻撃が入ります

「瑞希、そのまま首を真後ろにひねって。ウチは膝を逆方向に曲げるから！」

「こ、こうですか？」

「もう止めて！明久君のライフは（肉体的にも精神的にも）もう0です！」

私は関節技をかけている2人を止めようとしませんが全く聞く耳を持ちません

「姫路に島田か。どうやら、勝ったようだな」

雄二君は落ち着いていて、そんなことを言っています

「結婚の約束なんて、僕は全然・・・」

「ふえええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ

「！」

明久君が否定しようとするのと女の子はとうとう泣き出してしまいました

「坂本、包丁持ってきて！5本あれば足りると思う！」

包丁5本もどうするんですか、美波さん？

「吉井君、そんな悪い事をするのはこの口ですか？」

それは私の台詞じゃないですか、姫路さん？

まあ別にまだ付き合っているわけではないので私は構いませんが・

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

つと女の子が明久君に関節技をかけている2人に言います  
あの2人のどちらかの妹さんのようですね

「ああっ！あのときのぬいぐるみの子か！」

明久君がガバツと起き上がりそう言いました

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

明久君の呼び方にぶうつと頬を膨らませる女の子こと葉月ちゃん

「そっか、葉月ちゃんか。ひさしぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「それより、よく僕の学校が分かったね？」

「お兄ちゃんこの学校の制服着てましたから」

そう言っつて葉月ちゃんは明久君の制服を引っ張ります

「あれ？葉月とアキッつて知り合いなの？」

どうやら美波さんの妹さんみたいですね

「うん、去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、葉月はウチの妹だもの」

「へ？」

はい、これで確定です

「吉井君はずるいです・・・どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？私はまだ両親にも会ってもらってないのに・・・もしかして、実はもうお義兄ちゃんになつちやったり・・・」

だから姫路さん、それは私が言うべきことなんじゃ・・・？

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ぬいぐるみありがとつでしたっ  
！」

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！毎日一緒に寝てます！」

あれ？姫路さんとも知り合いなの？

「それはそうと、この客の少なさは何なんだ？」

そう言っつて教室を見回す雄二君・・・

そういえば、そのことをすっかり忘れてましたね

「そういえば葉月、ここに来る途中でいろいろな話を聞いたよ？」

「ん？どんな話だ？」

「カジノ風喫茶はイカサマで絶対勝てないから行かないほうがいい  
つて」

あー・・・絶対あの2人ですね・・・

## 23話

「カジノ風喫茶はイカサマで絶対勝てないから行かないほうがいい  
って」

そんな葉月ちゃんの言葉に、雄二君は顎に手を当てて・・・

「ふむ・・・例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出して  
シバき倒すか」

そう言いました

「そうだね。このままじゃ、せつかくここまで作った出し物が無駄  
になるし」

明久君が私に笑いかけながらそう続きます

「ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「だね・・・少なくとも、噂がどこまで拡がっているのかを確認し  
ないとね」

小学生の葉月ちゃんが聞いたくらいですし、かなり拡がってるでし  
ょうね・・・

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びに行こっ！」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんは喫茶店を成功させたいから、  
あんまり一緒に遊べないんだ」

明久君が葉月ちゃんの頭を撫でながら謝ります

「むー折角会いに来たのにー」

「なら、葉月ちゃんもつれて行ってあげたらどうですか？」

「そうだな。飲食店をやっている他のクラスの偵察する必要もあるからな」

私の提案に雄二君が続いて言います

「んー・・・そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

葉月ちゃん表情が先ほどまでと一転して満面の笑みになります

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

「わ、私も行きます」

葉月ちゃんが心配なようで、美波さんが一緒に行くと言つと姫路さんが慌てて自分もと言います

「わかりました。では宣伝も忘れずをお願いします。予定外ですが私は少ししたらステージをしようと思えますので、今外に出ているクラスメイトにも連絡してお客さんを集めるようにしてください」

『はい、姫様！』

クラスメイト達が声を揃えて返事をしました

「しかしそれでは奏がきつくないかの？昼食もとる暇が無いかもしれんぞ」

「大丈夫ですよ」

「じゃが・・・」

「心配してくれてありがとう、秀吉君」

私がお礼を言うと秀吉君が少し赤くなります

「秀吉、お前もこっち来い・・・」

「なっ！ちよっ！わしはっ！」

秀吉君は雄二君に引きずられて行きました

私のステージと雄二君達が噂の元を断って、お客さんは少しだけ戻ってきました

そして召喚大会3回戦・・・お腹空いた・・・

「えー・・・対戦相手が体調不良のため・・・音尾、坂本ペアの不振です」

先生がそう私達に告げます

よかった・・・お腹が空いて集中できそうにありませんでしたし・・・

「で、3回戦は不戦勝じゃったと?」

「はい」

私は早く帰って来れたので少し遅いお昼を食べています

「まさか、の・・・?」

「なんですか?」

「いや、なんでもないのじゃ!それより、こっちの建て直しをするのじゃ」

「そうですね」

まだ空席が目立ちますしね・・・

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやらなくちゃな・・・」

インパクトがあることですか・・・

「カジノといえば・・・」

「バニーガールの衣装なんてどうだ?」

私の問いかけにクラスメイトの1人がそう言いました

「・・・バ、バニーガールだとお・・・（ブシャアアアア）」

「ちよつ！康太君?!」

それを聞いた康太君が鼻血を吹いて倒れました

「バ、バニーガールはちよつと・・・流石にそんな衣装で接客したら営業停止になりかねません・・・」

私が恥ずかしそうに言います

実際恥ずかしいんですけどね・・・

『うーん・・・』

みんなが頭を抱えて悩みます

召喚大会のトトカルチヨを前面に出すわけにもいかなしですし・・・

「あ、あの、お姉ちゃんっ!」

葉月ちゃんが私の制服を引っ張ってきます

「どうしたの、葉月ちゃん?」

「葉月もカード遊びしたいですっ」

「うん、わかった。じゃあお姉ちゃんと勝負しようか。ルールも教えてあげるね」

「はいですっ」

ん？これは・・・

「美波さんと姫路さんそれと私、3人の勝負をステージでショーとして見てもらうってのはどうでしょうか？女の子が綺麗なドレスを着てステージ上で勝負をする・・・絵になると思っんですが・・・」

「うーん・・・それだけだとインパクトが・・・」

「ならば、飛び入りで客にもその勝負に参加できるようにすればいいのではないかの」

「いいね。秀吉も着て出たら？」

確かに秀吉君も似合いそうですけど、それは・・・

「わしは男じゃ！」

「奏とステージに出れるぞ？」

「むっ・・・なら着るのじゃ」

それで折れるんですね・・・

「それじゃあ必要なのは・・・私達が着るドレスですね・・・」

「ドレスなら演劇部の衣装で着あるのじゃ」

「1着足りないか・・・でもドレスなんてどこで手に入れれば・・・」

「・・・！！（チクチクチクチク）」

康太君が急に復活してお裁縫を始めました

「ム、ムツツリーニ！どうしてそんな凄い勢いで裁縫を？！っていうかさっきまで倒れてたよね？！」

「・・・俺を舐めるな」

まさかこれからドレスを作る気ですか？

「たっだいま〜！って、なんだ。アキってば女装やめちゃったんだ」

「あ・・・残念です。可愛かったのに・・・」

そうこう言ってるうちに姫路さんと美波さんが帰ってきました  
それにしても・・・

「明久君、女装したんですか？」

「え？あ、うん・・・」

明久君が気まずそうに答えます

「詳しく聞いて欲しくなさそうなので、とりあえずお疲れ様でした、明久君」

「う、うん・・・ありがとう」

明久君が凄く助かったような表情をしています

「それで・・・あのね姫路さん、美波さん、客足回復のためにお願いがあるんだけど・・・」

## 24話

出てきた案を2人に話し、その間に秀吉君が部室から衣装を持ってきました

「え！それを着るの!？」

「さっ流石に、それは・・・」

衣装を見て2人は恥ずかしそうにして戸惑っています  
た、確かに、露出がそれなりにあって恥ずかしいですね・・・

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？」

「このままじゃ、お店に誰も来なくなっちゃうよ・・・お願い・・・」

「うっ・・・」

私が上目遣いをお願いすると美波さんが怯むように一歩下がります

「はぁ・・・そんな目をお願いされると断れないわよ。店の売り上げの為に、仕方なく来てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

姫路さんと美波さんがそれぞれドレスを手に取ります

「康太君、あとのくらいでできそうですか？」

「・・・できた」

早!

できたものを受け取ると確かにドレスです・・・

「それじゃ、3回戦が終わったら着替えますね」

「いや、今着替えてくれないか？ 宣伝の意味合いもあるから、できれば頼む」

「」「」「え？」「」「」

雄二君の言葉に私達4人の声が重なります

流石に私も予想外です

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

「こ、これを着て出場しろって言うの・・・?」

「流石に恥ずかしいです・・・」

雄二君の提案に美波さんと姫路さんが難色を示します

「もしかして私も4回戦は来たまま出るんですか?」

「もちろんだ」

「自分で提案しておいてなんですけど、それは・・・いえ、わかりました。やりましょう」

私も拒否しようと思いますが、思い直します

「奏、本気なの?!」

「そうですね音尾さん・・・」

「本気ですよ。私は代表ですからね。期待には応えないと。せつかくここまで本格的に作ったのに失敗で終わるなんて嫌ですからね」

「「・・・」」

「それに・・・これは個人なことですけど、私の夢は演奏者で食べていくことです。綺麗な衣装を着て大きなホールで演奏とかもしたいですからね。恥ずかしいなんて言ってもらえません」

「奏・・・」

「音尾さん・・・」

「別に私だけでもいいですよ。私達は次の試合から公式に一般公開ですからね。秀吉君も嫌ならこの教室内だけでいいですよ」

「いや、わしは着て行くぞい。わしだって将来は演劇で食べていくつもりじゃ」

「じゃあ着替えますか」

そう言って教室内に作ってある更衣室にそれぞれ行くこととします

「はぁ・・・ウチも着るわ。奏には負けたくないしね、色々と」

「そうですね、負けたくないですね、色々と」

そう言っつて私の後を2人がついてきました

「2人ともありがとうございます」

こんなに2人に好かれているのに明久君も罪な男ですね

しばらくたって・・・

「ただいまー」

「ただいま戻りましたー」

姫路さんと美波さんが戻ってきました

「おかえりなさい、丁度良かったです、2人ともにステージに上がってください。交代しましょう」

「はい」

「わかったわ」

2人が召喚大会に行った後、私と秀吉君が校内を回って宣伝して大分お客さんが来るようになりました  
しかし女の子とカードゲームで勝負・・・営業停止ギリギリですね

そんなこんなで召喚大会4回戦  
対戦相手は美波さんと姫路さんです

「それでは召喚してください」

「」「」「サモン！」「」「」

Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 古文 1 1 3 & 1 5 5  
VS  
Fクラス 姫路瑞希 & 島田美波 古文 3 9 5 & 3

「ちよつと?! 4回戦は数字じゃなかったの?!」

召喚獣の頭上に出た点数を見て美波さんがそう叫びます

「雄二君、実は今回演奏効果は使えないかもしれないです」

「どうしてだ?」

「同じクラスだから向こうにも演奏効果がつくかもしれませんが」

「なるほどなあ・・・じゃあ姫路はどうするか・・・?」

雄二君の顔が曇ります

「とりあえず最初は私が引き付けますから、その間に美波さんを・・・」

「大丈夫なのか？」

「私は2年生で明久君の次に召喚時間が長いはずですからね。簡単には負けませんよ」

「ふっ・・・じゃあ任せるぞ」

「はい」

「それでは試合・・・開始！」

「行きます！」

わざわざそう宣言して私は突っ込みます

姫路さんは点数の低い美波さんを守るように立っています

「ごめんなさい姫路さん、正々堂々勝ちにいきます！」

「負けませんよ！」

慣れない煽り言葉で煽って姫路さんの注意を引きます

私は狩猟笛で大剣を何度も叩いて、武器を放棄するわけにはいかない姫路さんは、あっちへヨロヨロ、こっちへヨロヨロとふら付きまますそして点差があるのにいいようにされている姫路さんは徐々に焦っていきます

その間、美波さんは戦闘に参加できず、ただ見ているだけですもちろんそれを雄二君が見逃すわけも無く・・・

「ボーとしてる余裕は無いぜ！」

「あつ、はぁ・・・まあいても変わらない点数だし仕方ないわね」

一撃で美波さんを倒しました

「美波ちゃん?! キャツ!」

「私の勝ちですね」

美波さんに気を取られた隙に私が一発クリーンヒットを当てます

Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 古文 110 & 155

VS

Fクラス 姫路瑞希 & 島田美波 古文 105 & 0

「まだ続けますか?」

「・・・降参です」

点差があるのに操作技術で私に勝てない上にさらに雄二君もいますから姫路さんに勝ち目はありませんね  
しかし・・・腕輪があつたら負けてたかもしれませんね

「勝者、音尾、坂本ペア」

「あ、お姉ちゃん! お客さんがいっぱい来てくれたんだよ!」

私達4人が教室に帰ると葉月ちゃんが私達のところに来ます

「葉月ちゃんお手伝いありがとうね」

「バカのお兄ちゃんといれるから楽しいですっ！」

私が葉月ちゃんを撫でながらそう言つと笑顔で返してきました  
その明久君はもうすぐ試合なので秀吉君と一緒にもう会場に行つて  
ます

「もうすぐ明久君達の試合が始まるからディスプレイと一緒に見ま  
しょうね」

「はいですっ」

「お、あの子達だ！」

「近くで見ると一層可愛い・・・いや美しいな」

「手伝いの小さな子も可愛いし、レベルが高いな！」

お客さんが私達に注目しています

「おーい、いつまでもそんなところに固まらないでくれー」

クラスメイトからそんな声がかかります

「はい、じゃあ雄二君ディーラーでみんなでステージに上がりま  
しょう」

「はいー！」

「.:」

## 25話

「それでは、準決勝に行つてきますね」

「はい。頑張ってくださいね」

「勝ちなさいよ、奏」

「もちろんです！」

姫路さんと美波さんに送り出され、私と雄二君は準決勝に向かいます

「それでは準決勝を始めます」

準決勝の相手は2 - Aの霧島さん、そして秀吉君のお姉さんの木下さんです

「雄二君、作戦とかある？」

「任せておけ。抜かりはない。・・・頼むぞ秀吉っ！」

何故か雄二君は木下さんに向かって秀吉と呼びかけます  
まさか、入れ替わったんですか？

「・・・ふふっ」

木下さんが口元に手を当てて笑います

秀吉君じゃないの？どつち？

「えっと・・・秀吉君なんですか？」

「秀吉？秀吉って、あのゴミのこと？」

木下さんがステージ脇の一角を指します  
そこにあるのは・・・

「ひ、秀吉君？！どうしてそんな姿に?!」

ポロポロにされて、手足を縛られた秀吉の姿でした

「バ、バカな！」

雄二君が目を大きく見開いて叫びます

「匿名の情報提供があったからね」

「くっ、スマヌ、雄二。ドジを踏んだ・・・」

倒れていた秀吉君が起き上がって、申し訳なさそうに唇を噛んでいます

「・・・!!（パシャパシャパシャパシャ）」

「何でムツツリーニがいるんだ？」

そんな秀吉君を康太君がカメラで撮っています  
いや、手足の拘束を解いてあげましょうよ・・・

「はぁ・・・まさかこんな早く翔子とガチでやることになるとはな・・・」

「私も本気を出しますね」

「それでは召喚してください」

「」「」「サモン」「」「」

Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 保健体育 1 2 1 & 1 3 5

VS

Aクラス 霧島翔子 & 木下優子 保健体育 3 8 9 & 3 2 1

うわぁ・・・

「点数が3倍近くありますね・・・」

「あ、ああ・・・」

演奏効果が必須ですね

「試合開始！」

）  
）  
）  
）

試合のしが聞こえた時点で私は演奏を開始します  
1秒でも早く効果が欲しいですからね  
しかし・・・

「あなたに負けた私がそれを許すと思う?!」

効果が来る前に倒そうと木下さんが突っ込んできます

「奏?!」

「大丈夫!雄二君、そっちは任せるよ」

雄二君がフォローに来ようとしますが、私はフォローを断ります  
相手の作戦は点差押し of 各個撃破のようで、霧島さんが雄二君に向  
かっています

「敵を前にお話なんて随分と余裕ね」

「1回勝ってますからね」

「前と違って護衛はいないのよ!」

木下さんがドンドン距離を詰めてきますが私はまだ一歩も動きません

「やっぱり演奏中は動けないんじゃない!」

木下さんがランスで突きを放ってきますが・・・

「私が・・・」

ヒラリ

「なっ!」

「あの時と同じだと思わないでくださいね」

演奏しながら攻撃をかわし、ニツコリ笑いかけながらそう言います  
1ヶ月の練習の成果です。甘く見ましたね、木下さん

「そろそろ効果が来ます・・・残念でしたね、木下さん」

「なら演奏を止めるまでよ！」

度重なる煽りでかなり怒っている木下さん・・・怖いですが・・・  
でもその分攻撃が単調になってきてますので止めるわけにはいきま  
せん

木下さんは連続で突きを放ってきますが・・・

「なんで当たらないのよ?!」

演奏効果で機動性能が上がった私はそれを最小限の動きで、さらに  
高速で回避していきます  
もちろん演奏は全く止めません。ノンストップです

「こんのお!」

やけになって大きめの動作で突きを放ってきますが、簡単に私はか  
わして・・・

「私の勝ちです」

演奏を急に止めて狩猟笛をスイングして頭に当てました

その勢いでクルッと回って、その間にまた演奏姿勢に戻り演奏を再  
開します

Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 保健体育 1 2 1 & 1 1 0  
VS

Aクラス 霧島翔子 & 木下優子 保健体育 2 5 7 & 0

〽 〽 〽 〽

「く、悔しいけど完敗ね・・・」

木下さんはがっくり肩を落としてそう言います

「個人的な勝負ならいつでも受けますよ」

「ふふっ言ってくれるわね」

負けたことで怒りも消えたみたいで木下さんは少し笑顔になってその言いました

「さて、演奏の難易度を上げますよ！」

〽 〽 〽 〽

私は今までの動く余裕のある難易度から一步も動けない全く余裕の無い難易度に曲を変えます

「雄二君・・・がんばって！」

召喚獣の操作に集中しながらも必死で雄二君を応援します

霧島さんの召喚獣の武器は刀で雄二君の武器はメリケンサック・・・  
間合いが霧島さんの武器のほうが広いので雄二君はカウンター狙い

で戦っています

「任せろ！奏が勝ったんだ、俺も絶対勝つ！」

雄二君がそう返してくれます

「なんか羨ましいな・・・信じ合ってるって感じで」

木下さんがそう呟く声が聞こえました

「・・・私は勝つ。勝って雄二を取り戻す」

霧島さんが大降りですり寄り雄二君に切りかかります

「悪いな・・・俺の心にもうお前の入れる余地はない」

そう言って雄二君は刀をかわして相手の頭に手の甲を当てました。  
裏拳ってやつですね

Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 保健体育 1 2 1 & 1 0 5

VS

Aクラス 霧島翔子 & 木下優子 保健体育 8 8 & 0

「・・・音尾奏・・・あなたさえいなければ・・・」

霧島さんの背後にどす黒いオーラが出てきました

「霧島さん、あなたは本当に雄二君が好きなんですね」

「・・・うるさい！」

霧島さんが私のほうに突っ込んできました

「でも、私がいなくてもあなたは雄二君と恋人同士になることはなかったでしょうね。だって……」

演奏を止め、振られた刀を狩猟笛で受け止め……

「あなたの考えは雄二君の気持ちを全く考えていない独りよがりのものですから……」

霧島さんの召喚獣の頭にを拳を叩き込みました  
あえて雄二君と同じ戦闘スタイルで……  
演奏効果が切れる前だったので威力は充分でした

Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 保健体育 1 1 8 & 1 0 5

VS

Aクラス 霧島翔子 & 木下優子 保健体育 0 & 0

「勝者、音尾、坂本ペア」

『わあああああああ！』

勝者の宣言がされると会場から飛び切り大きな歓声が上がりました

「じゃあ帰りましょう雄二君」

「あ、ああ……」

雄二君は霧島さんを心配そうに見ていました

なんだかんだいって幼馴染なんですね

「あの私お手洗いきますね」

気まずいので私は先に会場を出ました

「はあ・・・私って酷い人だな・・・」

そう呟きながら教室に向かいますが・・・

ガッ！

「うっ！」

私は頭に強い衝撃を受けて意識を失いました

## 26話

「う、うーん……」

「奏?!大丈夫?!」

私が目を覚ますと美波さんが心配そうな顔で声をかけてきます

美波さんの傍に姫路さんがいて、葉月ちゃんは男達に捕まっています……

そして……

「秀吉君……」

準決勝に出ているはずの秀吉君もいました

「うむ、わしもやられたのじゃ……それより奏は大丈夫か?」

「はい……頭が少し痛みますが、それ以外は」

悔しそうに、そして心配そうに秀吉君は言います

準決勝はたぶん不戦敗になってしまったでしょう……

「さてどうする?坂本か?そいつを、この人質を盾にして呼び出すか?」

「待て。坂本は下手に手を出すとまずい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな」

奥のほうからそんな会話が聞こえてきます

どうやら例の盗聴犯の手先みたいですね。ここまでやってくるとは  
・  
・

「坂本って、まさかあの坂本か？」

「ああ、できれば事を構えたくないんだが・・・」

「気持ちはわかるがそもいかないだろ？依頼はそいつを動けなく  
することと、こいつらの監禁なんだから」

狙いは私と秀吉君だけですな・・・

盗聴犯は私達に召喚大会で勝たれるとかなり不味いでしょうね・・・

「お、お姉ちゃん・・・」

「アンタ達！いい加減葉月を放しなさいよ！」

「お姉ちゃん、だつてさ！かつわいいー！」

『ギャははははー！』

男達が気持ち悪い笑い声を響かせます

「・・・灰皿をお取替えします」

その時、店員が入ってきました

周りを見てみると、ここはカラオケボックスの1室のようです  
しかしこの声・・・どこかで・・・

「おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていいの？」

「だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー！」

「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせてください！」

姫路さんが男達にそう言いました

「だってさーどうする？」

「それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？」

「やつ！さ、触らないで・・・」

「姫路さんから手を放しなさい！！！」

私は声を張り上げてそう言います

怖い・・・でも私は・・・代表だから・・・みんなを守らなきゃ

「うっせえよ、引っ込んでろ」

ゴッー！

「ぎゃっー！」

「「奏？！」」

「音尾さん？！」

私の頬に男の手の甲が振り抜かれました  
その時……

ドオンッ!

部屋のドアが蹴り開けられて……

「おじゃましまーす!」

つと言つて1人の男の子が入ってきました  
その男の子は……

「よ、吉井君?」

「アキ……」

「明久君……」

明久君でした

「ハア?お前誰よ?」

男の1人が明久君にそう言います

「それでは、失礼して……死にくされやあつ!」

「ほごあああつ!」

明久君は不意打ちで1人倒しました

「てっ、てめえ！ヤスオに何しやがる！」

「イイツシャアアー！」

「ぐあぁっ！」

明久君は殴られながらも必死に戦っています

「テメエら、よくも奏に手をあげてくれたな！全員ブチ殺してやる  
！」

完全に頭に血が上っている様子の明久君・・・

「なんだこいつ?！」

「坂本の仲間か?！」

「そんなのどうでもいい！ぶち殺せ！」

明久君が男達に囲まれてしまいました

「やれやれ・・・この阿呆が。少しは頭を使って行動しろってー  
のっ！」

「げぶっ！」

いつの間にか雄二君も来て男達に殴りかかっています

「雄二っ！」

「貸しイチ、だからな？」

「で、出たぞ！坂本だ！」

「坂本つて、か、神無月の悪鬼羅刹？！」

雄二君を見て男達が浮き足立ちます  
その時……

「きゃっ！放して！」

「坂本よお。この女がどうなってもいいのぉ？」

男の1人が私を人質にしました

「大人しくしているよ？さもないと、ヒデエ傷を……」

「……負つのはお前」

ドゴッ

「あがあっ！！」

「きゃっ！！」

男がいきなり倒れ始めて私が下敷きになりそうになります

ガシッ

しかし店員さんが私の腕を掴んで下敷きになる前に引っ張り出して

くれました

「・・・大丈夫か、奏」

「その声・・・康太君？」

「・・・（コクリ）」

私を助けてくれたのは店員に格好をした康太君でした  
そして康太君が私を守っている間に雄二君と明久君が男達をみんな  
倒しました

「うつ・・・うわああん・・・怖かった、怖かったよお・・・」

安心した瞬間涙が溢れてきます・・・  
そして思わず康太君に縋り付きます

「奏・・・」

「音尾さん・・・」

美波さんと姫路さんの呟く声が聞こえます

「ちよっ！奏、ムツツリーニから離れる！」

雄二君が焦ったようにそう言います

「雄二、大人気ないよ」

「そうじゃの、流石にここは空気を読んで・・・」

明久君と秀吉君が雄二君を抑えようとしていますが・・・

「バカヤロツ！よく見ろ！」

「・・・我が生涯に一片の悔い無し・・・」

あれ？今私の格好って・・・ドレスですね

羽織るものも無いから肩が出てて少し寒いんですね・・・  
っと思つたら肩の辺りがなんか暖かい・・・

「わー！ムツツリーニ！死んじゃダメエ！」

「奏、早く離れるんじゃ！じゃないとムツツリーニが！」

その後康太君はギリギリで一命を取り留めました

## 27話

誘拐騒ぎも一段落

喫茶店の1日目が終了した教室にて、あの時学園長室で依頼されたメンバーが集まっています

姫路さん達はFFF団で護衛してもらって帰りました

「雄二君何を待っているんですか？」

「ああ、もうそろそろ来る頃だ」

私の問いかけに雄二君はそう返します

「？来るって、誰がじゃ？」

「ババアだ。俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、話を聞かせろってな」

「話ねえ・・・ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

「それにそんな呼び方ダメですよ」

「用事もくそも・・・この一連の妨害の原因は、あのババアにあるはずだ。事情を説明させないと、気がすまん」

雄二君はそう腹立たしげに言います

「確かにあの依頼が原因でしょうけど・・・」

「それもそうだが、あのババアまだ何か隠してることはあるはずだ」

「何じゃと?!」

「あ、あのババア！僕らに何か隠してたのか！」

「・・・やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

と、ここで学園長先生が扉を開けてやってきました

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

「まあ黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないのは充分な裏切りだと思っが？」

雄二君は学園長先生を睨みながら言います

「ふむ・・・やれやれ、賢い奴だとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺達に頼む必要はない。もっと高得点を叩き出すことのできる優勝候補をつかえばいいからな」

「そうですね。いくらAクラスを倒したと言っても成績はまだAクラスに届いているわけじゃないですしね・・・」

「そうだ。わざわざ俺達を擁立するなんて、効率が悪すぎる。歩の悪い賭けもいいとこだ」

一点特化のFクラスより全ての教科で点の高いAクラス生徒のほうが勝てる確立が高いですからね

「だからこそ、俺は科目を選択させると提案した。アンタが他の参加者にも同じ話をしてると踏んでな」

「なるほど、あれでアタシを試したのかい？」

「ああ、他の参加者に提案してれば俺達だけが有利になる話には乗ってこない」

雄二君はあの時そこまで考えてたんですね・・・

「要するに、あんたは余り成績の高い奴には話せない理由があったってことだ」

「はぁ・・・アタシの無能を晒すような話だから余り言いたかないんだけどねえ・・・」

そう言いながら、学園長先生はため息をして、口を開きました

「アタシの目的はチケットなんかじゃないのさ」

「チケットじゃない？どういうことですか?!」

私が学園長先生に聞くと・・・

「アタシの目的はそれさね」

そう言って私の腕を指差しました

「それって・・・この腕輪ですか？」

「そうさ・・・その白金の腕輪さね」

「実用機は大方欠陥があるってことか？」

「その通り・・・実用機は一定基準の点数で暴走するんだよ」

「え？じゃあこれも・・・？」

私は腕輪を外そうとしながらそう聞きます

「いやそれは出力を抑えてあるから大丈夫さね。実用機はその100倍の広さの召喚フィールドを展開できるからね」

試作機が1メートル四方だから面積が100倍なら10メートル四方ですか・・・

「まあだからアンタ達に腕輪を勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕等が勝ち取る？回収して欲しいわけじゃなくて？」

「あのな・・・回収が目的だったら俺達に依頼する必要はないだろ

う？そもそも、回収なんていう真似は極力さげたいだろうし、な」

「本当にアンタは頭がよく回るねえ・・・そうさ。できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使って見せてナンボだからね。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体疑われることになるさね」

学園長先生が感心ながら言います

「でもそれなら私のでデモンストレーションをすれば・・・」

「それにしたって何でアンタが持っているかをほとんどの生徒は知らないんだ。実験機の横流しとか情報漏洩とか色々言われかねないさね。それにアンタにはもう1つの方を受け取って欲しかったのさ」

「もう1つの方？」

そういえば白金の腕輪には2タイプあるんでしたね

「同時召喚型・・・それを使えば同時に2体の召喚獣を召喚できるさね」

「なんで奏にそれを勝ち取らせたんだ？」

「ここまでしとるのじゃ。奏の召喚獣同士の上重奏を聴きたいとかそんな理由じゃなからう」

「・・・(コクコク)」

くだらない理由じゃ許さないと云う表情でみんなが学園長先生を睨

みます

「アタシは研究者だ・・・こいつができたとき、アンタがこれを使ったらどうなるか・・・それしか考えられなかった・・・システムに介入して他の召喚獣に影響を与えるアンタがこれを使ってどうなるか・・・学園長として理性が研究者の本能に負けたのさ・・・」

学園長先生が静かにそう語ります

「ふざけんなクソババア！！そんなくだらない理由で奏が、秀吉が、姫路に島田が、さらに島田の妹までが誘拐されたってことか?!」

雄二君が学園長先生の服の襟を掴んで怒鳴ります

学園長先生はまさかそんなことがあったとは思わなかったようで、表情が驚愕と後悔の色に染まっています

「止めて雄二君！」

今にも殴りかかろうとする雄二君を私は必死に止めます

雄二君が突き放すように手を放しました

「そんなことが・・・それは申し訳なかったね」

そう言っつて学園長先生は深く頭を下げました

「っで？ババアはあの時の盗聴犯や誘拐をさせるように指示した奴の目星はついてるんだろ？」

「恐らく首謀者は教頭の竹原だろうね。近隣の私立校に出入りしていたっていう話も聞くし、ほぼ間違いないだろうね」

もう教師という人種が信じれなくなりそうです・・・

「あのさ、これってかなりまずい話じゃない？」

「そうじゃの文月学園の存続が懸かった話じゃの」

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を話して回収したら・・・」

「残念ながらそうはいかない。決勝戦の相手を知っているか？」

雄二君がズボンのポケットから小さな冊子を取り出して私達に見せます

書き込まれているトーナメント表を追っていくと、対戦相手は・・・

「常夏コンビ・・・」

明久君が対戦相手を呟きます

「そうだ。やつらは教頭側の人間・・・喜んで観客の前で暴走を起すだろっな」

「学園長先生、1ついいですか」

「なんだい？」

「私が安全に同時召喚の腕輪を使えるリミットはどれぐらいですか」

「現状のままだと平均点程度で暴走する可能性があるさね」

「それは総合科目で、ですか？」

「そうさ。1つや2つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起かないよ」

「そうですか。それはよかったです」

「奏……お前まさか……」

みんなは不思議そうに私を見ていますが、雄二君だけは私の考えに気付いたようです

「私だつてここまでされたら仕返しの1つもしたくなりませんよ」

「ふっ……だよな」

「……(ニヤニヤ)」

康太君も気付いたようです

「じゃあそろそろ帰りましょうか。今日は徹夜になりそうですし、帰って少し仮眠しないと」

「そうだな。送ってくぞ」

「はい、お願いしますね」

帰り道・・・

私は雄二君と明久君に送ってもらっています

なぜ康太君と秀吉君がいないかといえば、家の方向の違いもあるのですが、今5人みんな一緒していると私は平常心を保てそうにないから・・・

康太君に縋り付いて泣いたり・・・

秀吉君とは誘拐されてつり橋効果だったり・・・

明久君も突入してきたときの姿が目蓋に焼き付いているように鮮明に記憶に残ってますし・・・

実は雄二君とも準決勝直後から一緒にいると胸がドキドキします、明日一緒に戦うのに大丈夫でしょうか・・・

どうしましょう・・・

私は4人みんなをそれぞれ好きになってしまったのかもしれない・・・

## 28話

次の日・・・

私は迎えに来た雄二君と一緒に登校して、そのまま日本史の試験を受けました

徹夜して詰め込んだのでそこそこいけたと思います

「2人とも早いですね」

試験が終わって教室に戻ってくると姫路さんがいました  
他のクラスメイトも大体揃っているようです

「朝一番でテストを受けてましたからね。ふわぁ・・・」

「眠そうね奏、大丈夫？」

美波さんが心配そうに言ってきました

「ちょっと仮眠とったら？」

明久君がそう勧めてきます

「え？でも私代表なのにそんな・・・」

「いいのじゃ、クラスの出し物はわしらでしっかりやっどくのじゃ」

「うん・・・ありがとう、みんな・・・それなら、11時まで起きてこなかったら起こしてもらえますか？」

「11時？試合は1時からじゃなかったっけ？」

明久君が首をかしげながら聞いてきます

「1番混み合うお昼どきくらいは手伝いますよ。それに色々準備することがありますし」

「そっか、わかった」

そして私は教室内の更衣室で仮眠を取りました

午後の1時・・・

いよいよ決勝戦の時間になりました

私と雄二君は試合会場で登場の準備をしています

「うわぁ・・・随分とお客さんが多いですね」

「緊張するか？」

「まさか、私は演奏者ですよ・・・」

『それでは皆様。長らくお待ちしました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

会場にアナウンスの声が響きます・・・

「最高の演奏を披露しますよ」

私は笑顔でそう言いました

『それでは出場選手の入場です!』

私と雄二君はステージに出て行くとお客さんの拍手の音が響きます  
いいですね、この感じ・・・

『まず登場してきましたのは、2年Fクラスの音尾奏さん、坂本雄  
二君のペアです。なんと、決勝戦に上がってきたのは、2年生の最  
下級であるFクラスの生徒、準決勝ではAクラスのペアを破って決  
勝進出を決めました。これはFクラスが最底辺だという認識を改め  
る必要がありますね!』

ふふっ嬉しいこと言ってくれます

『そして対する選手は3年Aクラス所属・夏川俊平君と同じくAク  
ラスの常村勇作君です。出場選手が少ない3年生ですが、それでも  
きっちり決勝戦に食い込んできました。Aクラスということでの  
勝負、面白い対決になりそうですね』

それからアナウンスの人が試験召喚システムのルールの説明に入り  
ます

「ようセンパイ方。もうセコい小細工はネタ切れか?」

雄二君が対戦相手の2人にそう言って少し口喧嘩をしています  
私は黙ってただひたすら集中力を高めていきます・・・

『それでは試合に入りましょう。選手の皆さん、どうぞ!』

「「「サモン!」「」」

3 - Aクラス 常村勇作&夏川俊平 日本史 209 & 197

「どうした？俺たちの点数を見て腰が引けたか？」

「Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないな」

2人がそう煽りますが・・・

2 - Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 日本史 190 & 241

「なんだ俺らとあんま変わんねえな」

「お、同じなのは点数だけだ！そ、操作技術で軽く圧倒してやるぜ！」

2人が態度に動揺の色が見えます

『それでは試合・・・開始!』

）  
）  
）  
）  
）

「「なっ!」「」

『おっと！音尾さんが楽器を演奏し始めた！これはいったいどういうことでしょうか?!そして召喚獣のほうも演奏をしています！召喚者と召喚獣の二重奏です』

「何、あの子……？凄い……」

「ああ……演奏の質も凄く高いな……」

実況の人が驚き、観客も同様に驚いています

「覚悟しろよ。常夏コンビ……本気でお前らを潰しにいくぞ」

雄二君が2人に突っ込んでラッシュをかけます

前と違って今回は集中していますがしつかりまわりも見ています

「けっ確かにテメエの召喚獣はすげえが結局相手できるのは1人だ  
！」

そう言っつて片方が私のほうに来ます

1回戦と同じですね

「オラオラ、逃げなくていいのかよ?!それとも怖くて逃げられない  
ってか?!」

こっちの事を全く調べていないですね

私は自分の演奏だけ止めて……

「これなら木下さんの方が全然張り合いがありますね……つま  
らないです」

心底ガツカリした口調で言います

そして召喚獣をその場で一回転させて、演奏を止めずに攻撃しました

3 - Aクラス 常村勇作&夏川俊平 日本史 0 & 0  
VS

2 - Fクラス 音尾奏 & 坂本雄二 日本史 190 & 241

表示を見ると雄二君もほぼ同時に倒したみたいでした

「雄二君！」

「ああ、わかった」

『音尾、坂本ペアの勝・・・あ、ちよつと！』

雄二君が審判の先生からマイクを取り上げて私に投げてきます  
私をそれをキャッチし・・・

『ご来場のみなさま、決勝戦なのにこんな一方的な試合運びで勝つてしまい誠に申し訳ありません・・・お詫びにと言ってはなんです  
が、私の演奏をお聴きください』

そして雄二君にマイクを投げ返し・・・

）  
）  
）  
）

私は演奏コンサートを始めました

観客の人達もそれに聞き入ってしまったい召喚フィールドを消すに消せない審判兼立会の先生・・・  
アンコールに次ぐアンコールでそれは表彰式が始まるまでずっと続  
くのでした

28話（後書き）

奏の仕返しは精神的に責める方向です  
観客の記憶に残らない準優勝者ペア（笑）

表彰式と賞品の授与式も終わって、これから腕輪のデモンストレーションです

会場は私のコンサートの影響か立ち見のお客さんまでいます

「それじゃ行くぞ！アウェイクン！」

雄二君が腕輪を着けた腕を真上に上げて起動ワードを言います

雄二君を中心に、10メートル四方の召喚フィールドが形成されます

「確かに教師が張るフィールドと同じくらいの広さだな。じゃあ奏、いいぞ」

「はい、サモン」

Fクラス 音尾奏 数学 110

「さあおいで・・・新たな楽団員さん・・・ダブル！」

Fクラス 音尾奏 数学 55&55

点数が2分されてもう1体召喚獣が出てきました  
装備は同じですね

「ふふっこれで三重奏トリオができますね」

でもパート分けはちゃんと練習しないとできそうにありませんね  
今までは私が高音パートで召喚獣が低音パートを担当して同じよう

に演奏してましたけど、せっかく低音パートが2体いますからテノールとバスで分けたいですしね・・・

「とりあえず今は召喚獣は2体とも同じパートでいきます」

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

そしてコンサート第2部が開演しました

「笛のお姉ちゃんおかえりです！演奏凄いいよかったですっ！」

デモンストレーションも終わって教室に帰ると葉月ちゃんが出迎えてくれました

教室内は召喚大会会場の中継もしていたので会場に入れなかった人が押し寄せて大盛況です  
よく見ると、一般来場客だけでなく他のクラスの生徒・・・しかも自分のクラスの出し物を抜け出してきたような格好の人もチラホラ  
います

「ありがとうございます」

私は葉月ちゃんの頭を撫でながらお礼を言います

「しかし、あそこでいきなりコンサートを始めるとはの。こっちでもみな聞き入っておったのじゃ」

秀吉君も近づいてきてそう言います

「あ、秀吉君。こんなにお客さんが来てくれますから感謝の意味を込めてスペシャルステージなんてどうですか？秀吉君の歌に私が伴奏しますよ。」

「それはいいのう。わかったのじゃ、すぐ準備するのじゃ」

秀吉君が準備をしに奥に向かいます

私はそのままステージに向かって・・・

「お客様にお知らせします。これより歌と演奏のスペシャルステージを行います。演奏は私、音尾奏が、歌は文月学園演劇部のホープ、木下秀吉君です」

ワーワーパチパチパチ

ヒューヒュー

そして第3部を開演しました

それは清涼祭の一般公開が終わるギリギリまで続きました

「ふうっ・・・」

「お、おわった・・・」

「流石に疲れたのう・・・」

「そうですね……でも楽しかったですね……」

「……(コクコク)」

一般公開時間が終わって、お客さんが帰った教室で私達5人は机に突っ伏してそんな会話をしています

他のクラスメイトは打ち上げ準備のために買出しに行ってます

「とりあえず着替えて学園長先生の所に行きましょうか」

「そうじゃな」

そう言っつて立ち上がる面々……

「あ、その前に……康太君、一枚みんな撮りましょう」

「……(コクリ)」

康太君がカメラのタイマーをセットします

ピッ……ピッ……ピッピッピッピッピッピッ、パシャッ

私と秀吉君がドレスで、雄二君がデューラーの服、康太君がコックの服で、明久君がウェイターの服……学園祭の思い出の1枚ですね  
その後それぞれツーショットで撮ったりしました

そして、着替えて学園長室へ……

「失礼します。いるかババア？」

雄二君がノックとあいさつをして、学園長室の扉を開きます  
だから雄二君、その呼び方は……

「つたく……普通は返事を待つもんだよ」

「すみません……学園長先生、優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかってるよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰  
だと思ってるんだい？」

それはそうなんです……

「さて、これで問題は解決したな？」

「ああ。感謝するよ、おかげでデモンストレーションも無事終わっ  
たし、予定外のこともあったしね」

来賓も満足していたつと私を見ながら嬉しそうに言う学園長先生

「それで腕輪の不具合はちゃんと直すんでしょうね？奏がよくても  
僕らが安心できませんから」

つと明久君が学園長先生に言ったときでした

「……盗聴の気配」

康太君が学園長室の入り口の扉を見てそう言います

「またかよ!」

扉を開け放った雄二君が、逃げていく例の2人組を発見します

「あいつら、追うぞ明久!ムツツリーニ、2人を頼むぞ!」

「ちよっ?!どういう事?!」

「常夏コンビが、今の会話を盗み聞きしてやがったんだ!」

「なんだって?!」

雄二君と明久君が2人を追って学園長室から出て行きます

先程の会話を録音されていたら・・・

新技術が実は欠陥があって召喚者に危険があるなんてことを大袈裟に流されたら、今までの苦勞が水の泡です・・・

それから数分後・・・

ドオーーン

「キャツ!」

耳を突き刺すような大きな爆発音・・・

私は慌てて耳を塞ぎます

それでもまだ大きな爆発音がさらに2回鳴って直後に何かが崩れる音が・・・

「あのバカども・・・教頭室を打ち上げ花火で吹き飛ばすなんて・・・

」

窓から外を見た学園長先生がそう言います

「すみません……」

「まあいいさね……これで堂々と教頭室にガサ入れができるからね」

「あ、あはは……」

学園長先生のそんな言葉に私は笑うしかありませんでした

### 30話

あの後顔をボコボコにされた雄二君と明久君と合流して教室に戻って打ち上げを始めます

「えーみなさん飲み物と食べ物行き渡りましたか？」

『はい』

「それでは学園祭の打ち上げを始めたいと思います」

『イエー』

「じゃあ学祭の出し物成功を祝って、そしてみなさんお疲れ様でしたってことで、カンパニー！」

『カンパニー！』

そんな感じで打ち上げが始まりました

「しかし奏もお主らも、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「・・・(コクコク)」

秀吉君が私達に言います

私は召喚大会での演奏で、雄二君と明久君は教頭室爆破でということですね

でも・・・

「それは秀吉君もなんですよ。あの歌は凄かったですからね」

「そ、そうかの？」

役者じゃなくて声楽家でもやっていけると思っくらいです

「アキと坂本はあれだけのことをやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ウチだって気になるし」

美波さんが話に入ってきてきます

「そ、そういえば、売り上げですけど、結構な額になったんですけど、どうしますか？みんなで山分けにしますか？それとも何かクラスでパーツと使いますか？」

あまり追求されると不味いので私は話題を変えます

「教頭室の修繕費用で寄越せとか言われなの？」

しかし美波さんにそう言います

「なんだと?!」

それを聞いたクラスメイト達が雄二君と明久君を睨みます

「お前らのせいで俺達の苦勞が・・・」

「死んで償ええええええ!!」

「わ、ちよつ、みんな！落ち着いて！！」

「そつだ、ここは冷静に話し合いをだなあ！」

『黙つて死ねえええええ！』

あー・・・雄二君と明久君がクラスメイト達に追われてどこかに行つちやいました・・・

「みんな元気ですなー」

「そついう問題かなあ、姫路さん・・・」

そつ姫路さんに突つ込みながら私は近くにあつた缶を開けて一口飲みました

うえ・・・なにこれ苦い・・・誰が買つてきたんだろ・・・

あーでもなぜかもう一口飲みたくなりますね・・・なんででしょう・

・

あと頭がポーっとしてきます

「ちよつと奏、大丈夫？顔が赤いわよ？」

美波さんがそつ言っています

「はーい、だいじょうぶですよあーゴクゴクゴク・・・プハア」

そつ言つて私は缶の中身を飲み切ります

「全然大丈夫じゃなさそうなのじゃ・・・」

「ええ・・・ウチも同感だわ・・・」

美波さんと秀吉君がなぜかそう言います

「え〜どうしてですか？わたしはあゝ、このとお〜りだいじょうぶですよ〜」

そう言って立ち上がりますが・・・

「ちょゝ、ちょつと、ふらついてるわよ」

「え〜これはあゝ・・・じめんがゆれてるんじゃないんですかあゝ」

そしてふらつきに耐えれなくなって・・・

「ちょつ！危ないのじゃ奏！」

ドタン

秀吉君のほうに倒れました

「か、奏?!」

「んふふ〜（スリスリ）」

私は秀吉君の胸に頭をスリスリします

「・・・（ブシヤアアアア）」

「ちよつ?!土屋?!しつかりして」

「あわわ・・・土屋君が死んじゃいます!」

「あれ〜こつたくん寝ちゃったんですかあ〜?」

そう言つて秀吉君から離れて康太君のところに行きます

「膝枕してあげますねえ〜」

康太君の頭を持ち上げて膝に乗せます

「はあ・・・やつと振り切つたな」

「全く・・・ゆっくり打ち上げがしたいよ」

その時、雄二君と明久君が戻ってきました

「あ〜ゆづじくんあきひさくんおかえりなさい〜」

「な、なんだこの状況?!どうなつてんだ?!」

「ムツツリーニは死にそうだし秀吉は顔が真っ赤だし・・・なにがあつたの?」

「あれ〜なにかあおかしいところがありますかあ〜?」

顔が引き攣っている2人には私はそう言います

「ひよしいくうん・・・」

「え？姫路さんどうしたの？顔が赤いよ？」

「しょうでしゅかねえ」

姫路さんが明久君に迫ってます

「この匂い・・・酒だな。奏も姫路も酔ってるみたいだな」

雄二君がそう言いながらこっちに来ます

「ホラ奏、ムツツリーニが死にそうだから膝枕は止めてやれ」

「は、いい、わかりました」

私は康太君の頭を膝から降ろします

「んふふ、ゆづじくん」

ガバッ

「おっと危ないだろ奏」

私は雄二君に飛びついて抱きつきます

雄二君はガツチリしてるから、私が飛びついたくらいじゃビクともしないですね

「ゆづじくんにはあ、ししよーせんそーでえ、守ってもらったりしてるからお礼あげますね、ちゅ」

私は雄二君のほっぺに唇をつけます

「か、奏?!お前今何を……」

「ん〜ふふ〜ゆうじくんがんばってねえ〜」

私は雄二君から離れます

「は?頑張れって何を……」

『坂本キサマあああ!死に晒せええええええええええ!!』

「俺が何をしたっていうんだああああああ……」

雄二君はまたFFF団に追われてまたどこかに行きました……

「んふふ〜た〜のし〜ですね〜」

そう言ってもう1本缶を開けようと思いますが……

「ちょっと奏、いい加減にきなさいよ」

しかし、美波さんに缶を取り上げられます

「かえしてくださいよ〜」

そう言っ私は缶を取り返そうとしますが……

グラッ

「「キヤッ!」」

ドターン・・・

バランスを崩して、美波さんを押し倒すように倒れてしまいました

「「?!」」

私のすぐ前に美波さんの顔があります  
そしてお互いの唇が触れ合っていて・・・

「あはは〜キスしちゃいました〜私のファーストキスは美波さん  
です〜」

「ウチのファーストキスがあ〜」

「「ごちそうさまでしたあ〜美波さん・・・（コテン）ZZZZZZZ・・・」

### 31話

「うーうー頭痛いです・・・」

昨日学校で打ち上げして帰った記憶が無いのですが起きたら、いつもどおり私のベッドでした

そしてお父さんとお母さんに凄い怒られました・・・

どうやら私は打ち上げでお酒を飲んだあと、前日の徹夜と3回の演奏公演の疲れも合わさって寝てしまっただけです。寝てしまった私を雄二君達が負ぶって来たそうです

そして学園祭が終わった次の日の今日・・・

「それにしても、なんででしょう・・・？みんなこちらをチラチラと・・・」

私は今登校中です

正直休みたかったですけど学園祭の後片付けや出し物の報告書を書かないといけませんから休めません

それにお母さんが自業自得だと言って休ましてくれませんでした・・・

しかし、なんで道行く人が私を見てくるのでしょうか？もしかして昨日のコンサートの影響でしょうか・・・？

「あ、あの娘、昨日の凄い演奏の・・・」

ふとそんな声が耳に入ってきました。しかも言っていた人は文月学園の生徒じゃないです・・・

私この町の有名人になってしまったんでしょうか？

その後も下駄箱の私のところに手紙がいっぱい入っていたりしました・・・

頭痛いし面倒なので全部読まずに捨てましたが・・・

「おはようございます・・・」

テンション低めな挨拶しながら教室に入ります

「お、おいおい大丈夫か、奏？」

「な、なんとか大丈夫です・・・」

雄二君が心配そうに声をかけてきます

正直二日酔いじゃない頭痛も出てきて今すぐ帰りたいですか・・・

「雄二君昨日はすみませんでした・・・その、家まで運んでもらったり、他にも色々・・・」

「あ、ああ・・・気にするな」

私はモジモジしながら言うと雄二君も少し赤くなっています

昨日の事は・・・酔ってたとはいえ記憶はありますからね・・・

「色々と謝りに行かないといけませんね・・・」

「あ、ああ、そうだな」

気まずそうに言うと雄二君も気まずそうに返します

そういえば教頭室爆破も学園長先生にしか謝ってませんし、高橋先生や西村先生の所に行かないといけませんね

「おはようなの、じゃ・・・か、奏・・・」

「おはようございます、秀吉君」

教室に秀吉君が入ってきて挨拶しますが、私の姿を見た瞬間それがぎこちなくなります

「昨日は秀吉君にも迷惑をかけましたね。ごめんなさい」

「あ、いや、そんな気にするでない、奏」

「おはよ・・・ん？奏調子悪そうだね、大丈夫？」

その時、4人の中で唯一酔った私からの被害が無い明久君が入ってきました

「おはようございます。大丈夫です。ただの二日酔いですから・・・」

「保健室とか行く？」

明久君がそう聞いてきます

「いえ、二日酔いがバレたら停学になりかねませんよ。それに学祭の片付けや報告書も書かないと・・・」

ただお酒を飲んだだけなら嚴重注意で済むでしょうけど学校で飲ん

だなんて知れたらお終いです  
とりあえず先生が着たのでこの場は解散して席に着きます

1時間目が学祭の後片付けなのでクラスメイトに任せて、教頭室の  
件を謝罪して回ってきて、教室に戻り報告書を書いています

「うう頭痛くて集中できない・・・」

「大丈夫、奏？」

見るに見かねた美波さんが声をかけてきました

昨日の事を意識しているのか美波さんの顔は少し赤いです

「あ、美波さん・・・えっと昨日は、その・・・ごめんなさい・・・」

「全く、ホント大変だったわ。坂本達だけで眠ったアンタを送らせ  
るわけにいかないし・・・」

「あ、それもありますが・・・その・・・キ、キスのこと・・・」

「ダメよ絶対許さないわ。ウチのファーストキスを奪ったのは許さ  
ないわ」

そう言っつて私の肩をガシツと掴んできます

「だから・・・せ、責任、取ってよね」

美波さんは真っ赤になりながらそう言いました

「え？それってどういう、わぶっ」

私は美波さんに抱きしめられました

「はぁ・・・ウチも美春のことが言えなくなったわね・・・」

私を抱きしめながら美波さんは小さくそう呟きました

「み、美波？！奏に何をしてるの？！」

「そうじゃ、そんなうらや・・・ゲフンゲフン、奏が苦しそうなのじゃ！」

秀吉君、本音が漏れてますよ

「お前、明久が好きなんじゃないのかよ？！」

「雄二？！それ本当なの？！」

え？明久君気付いてなかったんですか？

「ふんっ！もうアキなんてどうでもいいわ。それにもう奏のファーストキスはウチがもらったし、ウチのファーストキスは奏にあげたもん」

『なああああにいいいい？?!!!』

美波さんの爆弾発言にクラス中から声が飛んできました

あげたつていうより奪ったんですけどね。しかも事故で・・・

「・・・百合キタコレ（ブシャアアアア）」

康太君が鼻血の噴水を上げました。昨日、一昨日とかなり出血量は  
はずですけど、よく生きてますね・・・

「お姉さま！美春というものがありながらメス豚にそんなことを？  
！」

突然、女の子が現れてそんなことを言いました

「ウチもアンタに影響されたみたいね。奏のことが好きになっちゃ  
った」

そ、そんな、女の子同士ですよ？！

「メス豚ではなく泥棒猫でしたか・・・どちらにせよ、私が処刑し  
て差し上げますわ！」

そう言つてその女の子は手のカッターを持ち刃を出します

「美春、奏に何かしたら・・・2度と口聞かないわよ？」

「ぐっ・・・」

美波さんがドスを効かせてそう言つと女の子が悔しそうに去ってい  
きました

私のこれからはいったいどうなるのでしょうか・・・

## 雄二編

如月グランドパークプレミアムチケットの特典のウェディング体験・  
私と雄二君はそれを受けています

『それでは、いよいよ新婦のご登場です・・・本イベントの主役、音尾奏さんです!』

アナウンスと同時にいく筋ものスポットライトが、壇上の1点、純白のドレスに身を包んだ私に当てられます

「雄二君・・・」

スポットライトがもう1点・・・雄二君を照らします  
私はゆっくり雄二君のもとに歩み寄ります

「奏・・・うん、綺麗だ」

雄二君は上から下に視線を動かした後、私にそう言います

「あ、ありがとう・・・雄二君も素敵だよ」

「ふっそうか?」

私が照れながら言うと雄二君はおどけたように言います

「奏・・・好きだ。あの時はなんだかんだで口に出して言ってなかったから、ちゃんと言葉にしておく・・・」

雄二君は顔を赤くしてそう言いました

「え？あ、はい・・・私も雄二君のこと好き・・・です・・・」

「それはちゃんと俺を選んでくれたってことでいいのか？」

「うん・・・試召戦争のときから、ずっと守ってくれて・・・召喚大会でペアになって・・・雄二君といると・・・安心できるんです・・・何があっても守ってくれるって・・・だから・・・」

「ああ、ずっと一緒にいて、守ってやるよ」

『いい雰囲気なようですし、色々すっ飛ばして誓いのキスいつてみようかな』

アナウンスの言葉にガクツときながらも私は雄二君と向き合います  
雄二君が私にかかったのヴェールを上げてキスをし・・・

「これからよろしく・・・っでいいんだよね？」

「ふふっ・・・はい、雄二君」

## 秀吉編

『それでは、いよいよ新婦のご登場です・・・本イベントの主演、音尾奏さんです!』

アナウンスと同時にいく筋ものスポットライトが、壇上の1点、純白のドレスに身を包んだ私に当てられます

「秀吉君・・・」

スポットライトがもう1点・・・秀吉君を照らします  
私はゆっくり秀吉君のもとに歩み寄ります

「綺麗じゃぞ・・・奏」

「ふふっ秀吉君も綺麗ですよ」

「そこはカツコイイと言ってほしいものじゃが・・・嬉しいぞい」

秀吉君は少し苦笑いをしてそう言います

「あの時はなくす似的な感じで告白したのじゃが・・・改めて言わせてもらうのじゃ・・・奏、わしはお主のこと好きなのじゃ」

「私・・・学祭で秀吉君の歌に合わせて吹いてた時・・・ああ、なんか一体になれてるって思えたんです・・・それで、他のどんな演奏よりも楽しくて・・・ずっと、ずっとあのステージが続けばなっ  
て思っくらいに・・・私、秀吉君の歌が好きです・・・そして秀吉君のことも・・・」

「奏……？それはホントかの？」

「うん……私、音尾奏は、木下秀吉君のことが……好きです」

私は自分の想いを秀吉君に伝えました

「う、うむ……これからよろしく頼むぞい」

「はい、秀吉君」

『それではここで新郎新婦の誓いのキスを……』

秀吉君が私にかかったのヴェールを上げてキスをし……

「いつか奏と同じ舞台に立てるといいの」

「はい」

## 明久編

『それでは、いよいよ新婦のご登場です……本イベントの主役、音尾奏さんです!』

アナウンスと同時にいく筋ものスポットライトが、壇上の1点、純白のドレスに身を包んだ私に当てられます

「明久君……」

スポットライトがもう1点……明久君を照らします  
私はゆっくり明久君のもとに歩み寄ります

「き、綺麗だよ……奏」

明久君は緊張してるのか少し声が上ずっています

「明久君、緊張してる?」

「う、うん……こういう大勢の前に出るのって慣れてなくて……僕の格好おかしくないよね?」

「はい、どこもおかしくありませんよ」

オドオドとしている明久君を私は少しかわいいと思いました

「明久君……私、あの時、誘拐されたとき、明久君が扉を開けて入ってきたときの……明久君の姿が頭から離れないんです……」

「え？それってどういう……」

「私は明久君を好きになったんだと思います……明久君は……  
どうして私を好きになってくれたんですか？」

「僕は……僕が言い出した試召戦争に一生懸命になってくれる  
奏を見ていたら……いつの間にか好きになってた、かな」

明久君は笑いながらそう言いました

『それではここで新郎新婦の誓いのキスを……』

「えっ?!キ、キス?!えっと、その、まず……」

アナウンスの言葉を聞き、明久君は慌てます

「明久君、落ち着いてください。まず私にかかっているヴェールを  
上げて……」

「う、うん……」

明久君がゆっくりヴェールを上げます

「あとはわかりますね」

そして私は目を瞑ります……

「じゃあ……いくよ?」

戸惑っているような声で明久君が聞いてきます

ふふっ・・・度胸があるんだか、ないんだか・・・  
そして唇に暖かな感触が・・・

「これからよろしくお願いしますね」

「もちろん」

## 康太編

『それでは、いよいよ新婦のご登場です……本イベントの主演、音尾奏さんです!』

アナウンスと同時にいく筋ものスポットライトが、壇上の1点、純白のドレスに身を包んだ私に当てられます

「康太君……」

スポットライトがもう1点……康太君を照らします  
私はゆっくり康太君のもとに歩み寄ります

「康太君……どう、ですか、私?」

「……／＼／＼(コクン)」

康太君は赤くなりながら首を縦に振ります  
私はクスリと笑い……

「そうですね……でも言葉で聞きたいですね」

つと意地悪っぽく言います

「……よ、よく似合ってる。か、奏」

康太君はなぜか少し鼻声でそう言います

「ありがとうございます。康太君に名前を呼ばれるの、これで3回

目ですね」

1回目は名前で呼び合うことを話した日、次はその誘拐騒ぎのとき、そして今日……

「なぜでしょうね……康太君に名前を呼ばれると……他の人が呼んだときよりドキドキするんです……もつと、もつと私の名前を呼んでほしいって思っちゃうんです……康太君だけが私をそうさせるんです……私にとって康太君は……特別、なんです……」

「……奏」

「はい、康太君」

「……もう、げん、かい……（ポンッブシャアアアアアアアアアアアア）  
ア」

康太君の鼻から血の付いた綿が飛び出て、鼻血が吹き出しました

「ちよっ?!康太君?!しっかりして!!康太くーん!!」

その後、私と康太君の衣装は血で染まったため、買い取りになりましたとさ……

## あとがきのもの

「え？代表？私ですかあ？！」を読んでいただき、ありがとうございます  
ございました

本当に中途半端な感じですがこれで本編は完結です

この作品も前作と同様、あまり誰もやってないことをやろうと思いい、  
逆ハーレムそれも超逆ハーレムにしました

ですが、展開を急ぎすぎた感がありすぎて感想の賛否がきっぱり分  
かれてしまいました

他にあまり見ない展開、要素として・・・

- ・特に得意不得意が無い普通の成績の主人公
  - ・Fクラス代表が雄二じゃない
  - ・雄二が翔子以外に、はつきりとした好意を示す
  - ・ムツリーニが主人公を好きになる
  - ・学園祭の出し物が初めから中華喫茶ではない
  - ・雄二が明久以外と召喚大会に出場
  - ・同時召喚の腕輪を主人公がとる
- などを意識しました。しかしやりすぎて結末がまったく見えなくな  
ってしまいました・・・

自分としてもこの終わり方は納得してませんが、このままだと未完  
で投げてしまいそうで、それだけはしたくないために無理やり完結  
させました

腕の無い自分をお許しください

これからは、奏がまだ誰も選んでいないという仮定の上でのプール編、合宿編を投稿して終わりにしようと思います

### 32話

学園祭から2週間経ち、私の周りも少し落ち着いてきた今日この頃・

・  
・  
そして季節も徐々に夏に近づいてきています。まあFクラスの教室は個人エアコンがありますから全く気になりませんが・

「・・・てな事があって、おかげで散々だったよ」

朝のSHRが始まるまでの時間、私達は明久君達と話しています  
なんでも雄二君と明久君が学校に無断侵入してプールに入ろうとして西村先生に捕まったそうです

「もう、やんちゃも程々にしてくださいね。私が謝りに行くんですから」

「そうよ、奏が怒られるんだからね」

私と美波さんが2人に言います

「スマンな、奏。こいつがガス代払ってないせいでシャワーが水しか出なくてな」

「僕のせい?!雄二が忍び込もうって言ったんじゃないか」

「お主ら・・・反省の色が全く無いの・・・」

「・・・(コクコク)」

「はぁ・・・」

言い合いを始めた2人を見て私達はため息をつきます

「あーあ、今週末はプールの罰掃除か・・・気が滅入るな」

「自業自得よ」

雄二君の言葉に美波さんが突っ込みます

「あんな広い所を掃除なんて、何か褒美が欲しいくらいだよ」

「褒美という程じゃないが、掃除をするのならプールを自由に使っても良いと鉄人に言われたぞ？」

「え？そうなの？」

「ああ。だから秀吉とムツツリー二も、今週末にプールに来ないか？」

折角の貸し切りなら、と早速2人を誘い始めます  
まず最初に康太君が領こうとして・・・

「ただし、ムツツリー二にも掃除を手伝ってもらっけどな」

「・・・」

「仕方ありませんね、代表ですから私も掃除を手伝いま・・・」

「ブラシと洗剤を用意しておけ」

私が言い切る前に康太君がそう言いました

「奏が手伝うなら、わしが手伝わんわけにはいかんの」

「そうねウチも行くわ」

秀吉君と美波さんも参加の意向を示します

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「構いませんよ。代表としてですからね。そんな心配するなら次からは気をつけてくださいね」

まったく・・・気を使うなら最初からこんな問題起こさないでください

「う、うん・・・ごめんね、奏」

「悪いな、奏。じゃああとは・・・誰か誘つか？」

「瑞希誘っていい？」

「いいぞ」

「ねえ瑞希ー？」

美波さんが姫路さん呼びます

「何ですか美波ちゃん？」

「今週末って暇？学校のプールを貸切で使えるみたいだけど、どう？」

「え……？」

プール、という単語に姫路さんが一瞬ビクンと反応します

「あ、さては予定があったりする？」

明久君がその反応を見てそう言います

「い、いえ、予定はないですけど、その……プールって言うと、水着ですよ……その、えっと……」

あ、そういうばそうでしたね……掃除のことしか考えてませんでした……

まあ仕方ありませんね

「み、美波ちゃんは行くんですか？」

「うん、奏が行くって言うてるからね。ウチも行くわよ」

「そうですね、なら私も行きます」

姫路さんは複雑な顔をしながらも参加の意を表しました

そんなこんなで週末・・・

「この度はご迷惑をおかけしまして、申し訳ありませんでした」

「ああ、もう説教も済んでることだ。あまり気にするな。ホラ、更衣室の鍵だ。怪我とかに気をつけるよ」

私は職員室に行き、ちょうどいた西村先生から更衣室の鍵を預かります

「はい、では失礼します」

そして職員室から出て、校庭に出てプールに向かいます

「あ、おはよう、奏」

「おはよう。早いわね、奏」

「あ、笛のお姉ちゃんですっ」

玄関を出た所でみんなと合流しました

美波さんは葉月ちゃんを連れていました

「葉月ちゃんも来たんですね。いっぱい楽しもうね」

「はいっ」



「んじゃ、早速着替えるとするか。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二君の言葉に従って、一旦メンバーは男女に分かれます

女子更衣室に私と姫路さんと美波さん

男子更衣室には残りのメンバーが……ってあれ？

「葉月ちゃん？こつちでしょ？」

「えへへ。冗談ですっ」

葉月ちゃんは美波さんを止めてもらうストッパーなんですからちゃんとこつちで着替えてもらわないと……私が襲われかねません……

「……遊んでないで行くわよ葉月、木下」

美波さん、そこで不機嫌にならないでください……あなたの妹の安全のためですよ？

それに何で秀吉君がこつちなんですか？

「わしは冗談じゃないのじゃが……？島田、ついにお主までそんな目でわしを見るように……」

完全に女として認識されてる事に、改めて実感した秀吉君でした……

「奏と一緒に着替えるなんて認められるか！仕方なくだが、お前はこつちだ」

「いや仕方なくってわしは男なんじゃが・・・」

雄二君が美波さんの言葉に文句を言います

秀吉君が凄い可哀想です

「いけません！吉井君と木下君と一緒に着替えるなんて・・・ダメです！」

「え？何を言ってるの姫路さん？僕は別に秀吉を襲ったりはしないよ。奏が好きだからね」

グサツと姫路さんの心に今の台詞が刺さる音がした気がします

「と、とにかくダメなんです！！木下君は1人でどこか別の場所に着替えてください！！」

「わし泣いていいかの・・・」

いいと思いますよ秀吉君・・・

### 33話

「お待たせしました」

私は女子の中で一番に更衣室から出ていきます  
今の美波さんは襲われそうで怖いです・・・

「  
×（ううん、そんなに待ってないよ奏）」

「落ち着け明久、ここは地球だ」

明久君がなその言語を発し雄二君が突っ込んでいます

「えっと・・・そうですか？私の水着・・・？」

「ああ、よく似合ってる」

「うん、可愛いよ」

「・・・（グッ）」

「ありがとうございます」

水着の感想を聞くと3人が赤くなりながら答えてくれました  
1人血で赤かったですけど・・・

ガチャ

誰か次の人が着たみたいですね

「どどどどどどうしよう?! あれってスクール水着だよな?! そんなものを着た小学生と遊んでいたら、逮捕されたりしないかな?!」

「・・・弁護士を呼んでほしい(ボタボタボタ)」

「あのな・・・落ち着け2人とも。小学生の水着姿でそこまでとりみだすな」

出てきたのは葉月ちゃんみたいですね

それにしても明久君と康太君は慌てすぎです・・・

「お兄ちゃん達、お待たせです」

と、息を弾ませて駆け寄ってきた葉月ちゃん

「懲役は2年程度で済みそうだね」

「・・・実刑はやむおえない(ボタボタボタ)」

もう・・・2人とも・・・

「こ、コラ葉月っ!」

突然そんな声が響き、明久君と康太君動揺している2人も呆れて私と雄一君いる2人も、一斉に聞こえた声の方向へと目を向けます

現れたのは、胸元を手で隠している美波さん

「お姉ちゃんのソレ、勝手に持っていったらダメでしょ?! 返しなさいっ!」

「ソレ?・・・何のことだろ?」

「あうっ、ズレちゃいました」

明久君と康太君を動揺させていた、小学生とは思えない胸のふくらみ  
それがいつの間にか、そのふくらみがおなかの方へ行っています

「ん?今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パツ・・・」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ・・・!」

「わ、わ、落ち着いてください、美波さん!」

つと明久君と美波さんの間に入ります

「うう・・・せつかく奏のために用意して来たのに・・・葉月のバカ・・・」

はい?私別に胸の大きな女の子が好きとか言ってますんよ?という  
か女の子が好きとも言ってますんし・・・

「すみません!背中 of 紐を結ぶのに、時間がかかっちゃって・・・!」

つと声が聞こえ、声のほうを見ると駆け足でこちらに来る姫路さんの姿が・・・

それを見て、とうとう貧血で倒れてしまう康太君と、それと同様に  
出血多量で倒れた明久君・・・

「Worauf für einem Standard hat  
Gott jene unterschieden, die  
haben, und jene. Die nicht hab  
en!? Was war für mich ungenüge  
nd! (神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの  
?!ウチに何が足りないっていうのよ!)」

「わーネイティブなドイツ語ですね・・・」

私も留学準備のために覚えたいです

「あとは・・・秀吉だな」

「遅れてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、いか  
んせん校舎からプールまでが遠くての」

雄二君がそう言つとちょうど秀吉君が来ました

校舎まで言つて着替えたんですね・・・お疲れ様です

つてあれ?秀吉君の格好・・・トランクスですけど、あれ女物じゃ  
・・・?

上は肌張り付く様なショートタンクトップでやっぱり女物に見え  
ますし・・・

「秀吉・・・それ女物だろ?」

「な、なんじゃと?!」

雄二君の指摘に秀吉君が驚愕します

やっぱり・・・

「ち、違っのじゃ！わしは本当に男物を買った筈なのじゃ！きちんと店員にも普通のトランクスタイプが欲しいと言ったのじゃぞ?!」  
確かに普通のトランクスタイプですね・・・女物の

そんなこんなでみんなプールに入って遊んだりしています  
美波さんは泳げない姫路さんに泳ぎを教えています

「笛のお姉ちゃんっ!」

「ん?どうしたの、葉月ちゃん?」

「水中鬼をします」

「水中鬼?水中でやる鬼ごっこ・・・っでいいのかな?」

私は聞いたことが無い遊びに首を傾げます

「違っですっ。水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追い掛けるです。それで鬼が他の人を水の中に引きずり込んで、溺れさせたら勝ちです」

鬼です・・・ていうか危険すぎます

ん?でもコレを使えば姫路さんも泳げるようになるんじゃない?・・・

「ちょっと葉月ちゃんには危なすぎるかな?どう危ないか、今から見せてあげるね」

そう言うと葉月ちゃんがキョトンとします

「姫路さん、ちょっといいですか？」

姫路さん呼びながら近づいていきます

「どうしました音尾さん？」

「もっと効果的な練習しませんか？」

「効果的……ですか？」

姫路さんが首を傾げます

「うん……具体的に言うところ褒美が出るとかね。あそこにいる明久君を本人に気付かれないように泳いで近づき抱きつく、とかどうですか？」

「わかりました。行ってきます」

ビシッと敬礼しそうな勢いで返事をして姫路さんは泳いでいきま  
た……

しかもさっきまで美波さんに手を引いてもらってやっと泳いでたは  
ずなのに1人で潜水で明久君のほうに向かってます

「葉月ちゃんよく見ててね」

「はいですっ」

ザバァ・・・ガシッ

「ちよっ?! 姫路さん?! 急にどうしたのってのわああ!!」

明久君は急に抱きつかれてバランスを崩して水中に沈んでいき、付近の水を赤く染めていきます

「ね、危険でしょ?」

「はいです・・・葉月、水中鬼は諦めるです・・・」

「ちよっとアキ! プールの水を汚さないでよ!」

やりすぎちゃったかな?

### 34話

「あれ？プールを使っているのは誰かと思ったら、音尾さん達だったの？」

そんな声が聞こえ、プールにいるみんなが声にしたほうを向きます

「えっと・・・工藤さん、でしたっけ？どうしてここに？」

「よかった、ボクのこと覚えてくれたんだ。ボク、水泳部なんだ」

「そうだったんですか。でも今日は水泳部は休みのはずですが・・・」

私はプールサイドに座って工藤さんにそう聞きます

「そうなんだけどね、忘れていて学校に来てやっと思い出したんだ・・・でも人の声がしたから寄ってみたんだけど、まさか音尾さん達だったとはね。ラッキーだよ。良かったらボクも混ぜてもらっていい？」

「はい、いいですよ。貸切ってわけじゃないですしね」

つとそのとき・・・

「お姉さまっ！どうしてプールに行くのなら美春に声をかけてくれないのですか？！」

「美春?!アンタどうしてここにいるのよ!プールで遊ぶなんて誰

にも言わなかったはずなんだけど?!!」

「美春にはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありますから!」

「私と奏の仲を邪魔するなんて、いい度胸じゃない清水さん」

「なっ?!この泥棒猫めええええ!!!!」

清水さんが私に向かって来ようとしています・・・

「ちょっとそこの女の子?奏に何をしようとしているのかしら?」

「いやああああ!ごめんなさいごめんなさい名前を読んでください、お姉さま!」

「じゃあ今すぐ帰りなさい」

「はいすぐに!」

清水さんの姿がパツと消えました

「あははー音尾さんも罪作りだね。まあボクも音尾さんのこと好きだよ」

「え?それはどういう意味・・・」

「どついつ意味でだろうね〜じゃあ着替えてくるよ」

私の言葉を途中で遮ってそう言い、工藤さんは更衣室に入っていく

ました

願わくばファンという意味であってほしいです・・・

バシーン・・・バシーン・・・

水面にビーチボールが叩きつけられる音が響きます

「あ、あの・・・姫路さん、美波さん、あと葉月ちゃん・・・」

「なんですか？」

「なに、奏？」

「どうしたんですか、笛のお姉ちゃん？」

私達はその様子をプールサイドから見えています

「私の気のせいかもしれないですけど・・・あの4人、かなり本気で水中バレーをやっていますか？」

2対2じゃなく1対1対1対1でやってますし・・・

「大丈夫よ。ウチにもそう見えるわ」

「ええ、私にもそう見えますね」

「葉月もです」

私達は女の子を放って本気で水中バレーをしている4人を眺めます

「雄二！この勝負、絶対僕が勝つからね！」

「へっ明久あ・・・何の勝負であれ、お前が俺に勝てると思うか？！」

「いい加減わしを男扱いさせるために、この勝負、負けるわけにはいかんのじゃー！」

「・・・(ゴゴゴゴ)」

最初は仲良くやっていたのに・・・いつのまにあんなことになったんだろう？

「1位の奴が奏とデートだからもし負けてもちゃんと守れよ！」

「雄二が言い出したんだからもし負けてもちゃんと守れよ！」

「うむ、邪魔とかも無しじゃぞー！」

「・・・(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ)」

ちよっと？私をそっちのけでそんなこと賭けないでくれます？

まあはっきり答えの出せてない私も悪いですから、デートくらいなら、構いませんけど・・・

「それにしてもアキが集中的に狙われてるわね」

「そうですね」

美波さんの指摘に少し嬉しそうに答える姫路さん

「多分先に明久君を潰す作戦ですね。雄二君がやり始めて秀吉君と康太君がそれに乗ったって感じですね」

「ちょっと！さっきから僕に集中してない?!」

「気のせいだろ」

「気のせいなのじゃ」

「……(コクコク)」

明久君も気付いたようです

「これじゃ3対1じゃないか?!」

「ホラホラ口を動かす暇は無いぞ!」

「うむ、そうじゃ!」

「……とどめ」

バシーン

「はい、これで15点。吉井君脱落ね」

審判をやっている工藤さんが手を挙げて、そう宣言します

15点取られたら負けのルールのようにですね

「さてここからガチだ。悪いが勝たせてもらおう」

「ふっ演劇部の体力舐めるでないぞ！」

「……（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

結局勝負は美波さんが乱入してビーチボールを素手で割って無効になりました

「さて、どじするっ」

「そうだね。少しお腹すいてきたし、何か食べない？」

「じゃあ何か買いた」

「あ、それなら……」

そこで姫路さんが、何かを思い出したかのようにポンッと手を打ちます

そして嬉しそうに、あるバスケットを取り出しました

「姫路さん、そのバスケットには何が入ってるの？」

「実は、今朝作ったワッフルが3つほど」



「くたばれええっ！！！」

工藤さんの合図と同時に、明久君と雄二君はとび蹴りを互いに放ちました

「明久、テメエ卑怯な真似してくれるじゃねえか！この恥知らずが！！！」

「その言葉、そっくりそのまま返してやる！！！」

「あのさ2人とも、取っ組み合いもいいけど、木下君とムツツリー二君はそろそろ折り返しだよ？」

ふと見ますと、秀吉君、康太君の順ですでに折り返しが行われています

「そうは行くかつ！俺はムツツリー二を止める、明久は秀吉をやれ！！！」

「了解！」

2人はプールに飛び込み、雄二君は康太君、明久君は秀吉君を止めるように立ち塞がります

「な、何じゃ明久？！お主は隣じゃろう？！」

「ダメだよ秀吉！ここは通さない！」

脇を抜けて先に進もうとする秀吉君にしがみつくと明久君

「明久、離すのじゃ！」

「逃がすもんかあああつ！！！」

ズルッ！

「……？なんだろう？」

明久君が秀吉君の水着の上を取っちゃいました

「よ、吉井君！何をしているんですか？！」

「え？……もしかして、これって秀吉の……？」

「んむ？そういえば胸元が涼しいのう」

「……まだ……死ぬわけには……いか……な……い……」

康太君を中心に水面が朱に染まっていきます

「うおっ！大丈夫かムツツリーニ？！この出血量はマジでヤバくないか？！」

「……ダメだ……せめて最期は奏の胸の中で……」

「わああっ！ムツツリーニが大変な事に？！血がものすごい勢いで出ているんだけど！」

「わああああ康太君?!死んじゃダメええええええ!!」

「早く胸を隠さない!土屋の血が止まらないから!」

「いいイヤじゃっ!ワシは男なのじゃ!胸を隠す必要はないのじや!」

「木下君、わがままを言っちゃダメです!土屋君が死んじゃいます!」

「うわああああん。康太君が死んじゃうよお、どうしよう、工藤さん?!」

「うん、とりあえず救急車呼ぶね。それにしても、泣いてる音尾さんも可愛いね。抱きしめたくなるよ」

「バカなお兄ちゃん達、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

その後康太君は駆けつけた救急隊員の懸命な延命措置で一命を取り留めました

### 35話

プールの1件からまた2週間くらい経った今日この頃・・・  
明日から強化合宿という行事が行われます  
つと言ってもただの4泊5日の勉強会なんですけどね・・・

「はぁ・・・あれから1ヶ月経ったのにまだ手紙を入れてくる人が  
いるんですね・・・」

私はいつもどおり登校して下駄箱を開けてガツクリとしています  
毎日毎日もうしつこいです・・・まァ1通も読んでませんが・・・

「処分することちの身にもなってほしいです・・・ん？」

その中に普通はこういうことに使わない茶封筒を見つけました

「なんででしょう？学園長先生からのデータの催促でしょうか？」

そう呟きながら封筒を開けます

クラスメイトドモカラキヨリヲオケ

サモナクバ・・・ワカルナ？

つと中の紙に書いてありました

え？これって・・・

「グスツ・・・グスツ・・・」

私は泣きながら教室に入りました

「どうした奏?!なにがあった?!」

雄二君が私に気付きそう聞いてきてクラスメイトがみんな集まっています

「雄二君・・・みんな・・・ふええええん」

「我らの姫を泣かせるとは許せん。ぶっ殺してやる」

「ああ、FFF団の名の下に血祭りにして日本海溝の底に沈めてやる」

「落ち着けお前ら。それで奏、いったいどうしたんだ?」

「これ・・・」

私は封筒の中身を渡します

「脅迫状か・・・こんなもの送るとはいい度胸じゃねえか。ムツツリーニ!」

「・・・任せろ。必ず見つけ出す」

「グスツ・・・雄二君・・・ヒック、康太君・・・」

「安心するのじゃ奏。わしらがついとるのじゃ」

「奏に何があっても守ってあげるからね」

『そうだ！我らFFF団、その目的は姫の笑顔を絶やさぬこと！！』

『おおーっ！！』

「秀吉君・・・明久君・・・みんな・・・」

いつの間にか私の涙は止まっていました

「俺達に任せろ。絶対解決してやるからな」

「うん・・・ありがとう、みんな」

次の日、いよいよ合宿スタートです

私達は合宿所に向かうリムジンバスに乗っています

「それにしても、移動がリムジンバスとはな。流石はAクラス設備だ」

「まったくじゃ。姉上達Aクラスは自分達の足で現地集合だそうじゃぞ？」

「おいおい、学校から卯月高原まで結構あるぞ？」

本当にAクラスに勝ってよかったですね・・・

「ん？美波、何読んでるの？」

「ああ、これ？百円均一で買った心理テストの本。結構面白いのよ？」

心理テストですか。面白そうですね

「じゃあ美波、なにか問題出してよ？」

「ええ、いいわよ。それじゃいくわよ。次の色でイメージする異性を挙げてください。？緑？オレンジ？青？でそれぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

「うーん・・・緑が姫路さんで・・・」

「わしは・・・緑が島田かの。それで・・・」

「俺は緑が翔子だな、つで・・・」

『オレンジと青が奏だ（じゃ）！』

つと3人が答えます。ちなみに康太君は脅迫状の件の調査で疲れて寝ています。ご苦労様です

ブリイッ！

「奏はウチのものよ！！」

そう言っつて美波さんが手元の本を破り捨てます

いつ私はあなたのものになったんですか？私はそんな趣味はないですよ

「……（ムクリ）」

その声で康太君が起きました

「ん？ムツツリーニ。おはようなのじゃ」

「おはようございます、康太君。起こしちゃってごめんなさい」

「……（フリフリ）空腹で起きた」

「ふふっそうですか。じゃあお昼ご飯にしましょうか」

そう言って私はカバンから小さめのお弁当箱4つと普通の1人用のお弁当箱を出します

「あまりたくさん量は作って来れませんでした、これみんなの分です。お昼の足しにしてください」

つと云って雄二君達に小さいお弁当箱を1つずつ渡します

「お、スマンな、奏」

「ありがとう、奏」

「ありがとうなのじゃ、奏」

「……／／あ、ありがとう、か、奏」

康太君も少し柔らかい言葉遣いになってきましたね

「むうーいいなーウチには無いの、奏？」

「ありません。自分でそれくらい用意してください」

私は美波さんには恋人なんて関係は望んでません。親友なら嬉しいですけど

同性愛なんてそういうものも存在するって認識程度で充分です  
ファーストキスを奪ってしまったのは申し訳ないと思いますが、  
もうそろそろ我慢の限界です

「ところで、なにか情報はつかめたか？」

「・・・妙な情報が少し」

お昼を食べながら雄二君が康太君に聞きます

「妙とはどんなだ？」

「・・・校内に網を張った。小型録音機、昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

手段は選ばないって感じですね・・・

それから、康太君が用意した小型録音機が取り出され、そこに収められた会話が流れ始めます

『……らっしゅい』

『雄二のプロポーズを、もう一つお願い』

『毎度。2度目だから安くするよ』

『……値段はどうでも良いから、早く』

『流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃ明日……と言いたいらるけど、明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で』

『……わかった。我慢する』

『なんじゃこりゃあああ!!』

録音された会話を聞き雄二君が絶叫します

「片方は、霧島さんでまず間違いないね。もう一つってことはすでに1つは持つてるって事だよな」

「じゃな。雄二のプロポーズを欲しがる上にお嬢様と来て、この独特の話し方とくればの……」

「絶対全部消してやる」

「で、他には？」

康太君が機械を操作し、続いて録音機から声が流れます

『相変わらずすごい写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら、酷い目に遭うんじゃないですか?』

『ここだけの話、前に一度母親にバレてね』

『大丈夫だったんですか?』

『文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだから』

『それはまた・・・』

『おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対してひどいと思わないかい?』

「・・・っでこれと私の脅迫状が関係するんですか?」

会話を聞き終わり私はそう聞きます

「・・・おそらく脅迫状の犯人と同一犯」

「なるほどな、俺が奏といるのが面白くないから、翔子がそいつに頼んだってことか」

「霧島さんが直接やったってことはないの?」

雄二君の推理に明久君が質問する

「それはないな、あいつは機械音痴だからな。この脅迫状は印刷されてるしあいつには無理だ」

「あ、そうなんだ」

「でもそれ以外に奏のファンが結構いるし、依頼人の特定は難しいな」

「うーん・・・」

雄二君の言葉にみんなが考え込んでしまいます

「手がかりは女子生徒でお尻に火傷の跡か・・・」

あまり見えそうに無い情報ですね・・・

### 36話

「あはは、そんなことがあったんだ」

あれから合宿所に着いて私は雄二君達の部屋で普通におしゃべりしています

ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

急にすごい勢いで部屋の扉が開け放たれて、女の子達がぞろぞろと入って来ました

「な、なに?!」

「な、何事じゃ?!」

「奏と木下はこっちへ！」

いきなりなことでは驚いている私を美波さんが手を引いて雄二君から離そうとします

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなた達が犯人だつてことくらい、すぐわかるというのに」

そう言うのはCクラス代表の小山さん

「犯人って何ですか?!」

「何のことだか知らんが俺らはここで奏と話していたから人違いだな」

「そんな嘘が通用するとも思ってるの?!これの事よ!」

小山さんが雄二達の前に何かを突き付けました  
それは・・・

「・・・CCDカメラと小型集音マイク」

康太君がそう言いました

「女子風呂の脱衣所に設置されていたわ」

「なるほどな。だから、1番疑わしい俺達の所へってか?」

「疑わしい?何言ってるのよ、あなた達がやったんでしょ!」

「Fクラスのみんなはそんなことしません!!美波さん放してください!」

決め付けるように言う小山さんに私は言い返し、美波さんの手を振りほどこうとします

「じゅめんね奏。でも・・・」

「いいから放して!!同じクラスなのに美波さんは疑うんですか?

「！」

「で、でも瑞希も・・・」

「放してー！ー！！」

なかなか放さない美波さんに私はそう叫びます

「おい島田。いい加減にしろよ」

「何よ坂本、ウチに文句言う権利なんかあるの？盗撮犯の癖に」

「雄二君達はそんなことしてないよ！！」

「それ以上奏の嫌がることをし続けるなら俺達も黙ってないぞ」

「・・・(コクコク)」

「僕達は奏が好きだからね。それに守るって約束したし・・・」

雄二君と明久君が指を鳴らしながら立ち上がり、康太君もスツと立ち上がります

「な、なによ。ウチを殴るっていつの？女子を殴るなんて最低ね」

「じゃあわしが殴ろうかの。お主らはわしを女扱いしとるし女同士なら問題ないのじゃろ？」

そう言っつて肩を回して準備する秀吉君・・・

ここまで怒った秀吉君は見たことが無いです

「ぐっ……」

そんな秀吉君を見て美波さんが怯みます  
腕を掴む力が緩み私は力いっぱい腕を振り解きます

「それで小山さんはなんでFクラスがやったと思ってるんですか？  
！そこまで言うなら証拠があるんですよね？！」

私は雄二君と小山さんの間に立ち聞きます  
もう色々ありすぎて私は暴走しています

「あなた達以外に誰がやるっていうの？！」

「証拠も無いのに決め付けしないでください！！小山さんは代表の癖  
にそんな証拠も無く決め付けるからAクラスに負けたってことわか  
らないんですか？！」

「なっ?!」

小山さんの表情が怒りで真っ赤になります

「あ、もしかしてそれ仕掛けたのあなたなんじゃないですか？自分  
達が負けたAクラスに私達が勝つたのが気に入らないんですよ。だ  
から……」

パシーン

私が感情の任せて言っていると頬に痛みが走りました  
目には腕を振りぬいた小山さんが……

「なにするんですか?! 凶星過ぎて手が出ましたか?! 最っ低ですねあなた!」

「黙りなさい!! バカクラスの代表の癖に!!」

「黙らないよ!! 私の好きな人達クラスメイトをバカにされて黙っていられるわけがないじゃないですか?!」

「うっさい!! 黙れって言ってるでしょ!!」

また小山さんが腕を振り上げてきましたが・・・

パシーン×2

今度は私も小山さんの頬に平手打ちをします

「そつちが暴力で黙らせるつもりならこつちだつてやるんだから! 私にだつて腕が2本あるんだからこれくらいできるんだよ!! こんなことも予測できない無能さんが代表だなんてCクラスは可哀想だね!!」

「きいいいいいい!! いい加減、その生意気な口を閉じなさい!!」

小山さんがカメラとマイクを捨てて私に掴みかかってこようとしますが他の女の子達に掴まれて止められます

「奏、お前も落ち着け」

「奏も感情的になりすぎなのじゃ」

雄二君と秀吉君が私を宥めます

ダメ・・・今落ち着いたら私・・・

「とにかく！この件で勝手にFクラスの人に尋問することは代表の私が許しません！尋問したいなら私が納得する動かぬ証拠を持つてきなさい！！もうみんな出て行ってー！！」

私の治まりつつある感情を何とか奮い立たせ、最後に叫び女の子達を追い出します

部屋の中が5人だけになって・・・

「うわあああああん・・・なんで？なんでみんなFクラスをバカにするの？！成績が悪くたってみんなこんなことしないよ・・・」

私は泣き出しました・・・

私の問いかけに4人はただ黙っていました・・・

「落ち着いたか奏？これで頬を冷やしとくのじゃ」

泣きやんだ私に秀吉君が湿らせたハンカチを渡してきました

「しかし奏があんな怒るとはの・・・」

「秀吉だつて結構怒ってたじゃない。美波を殴るつてあれ本気だつたでしょ？」

「もちろん本気じゃったぞ。奏のためならわしは女扱いされとる」とだつて利用してやるのじゃ」

明久君と秀吉君が笑いながらそう話します

「さて・・・これからどうする？多分奏は2年の女子の中で裏切り者つて扱いになつてると思つが・・・」

「別にいいですよ。みんなをバカにするならこつちから願ひ下げです」

私は不機嫌さを隠さずそう言います

「ねえ・・・まさかこれつてあの脅迫犯の仕業じゃないの？」

「可能性は高いな。盗撮で奏が俺らから離れていくように仕向ける予定だつたんだろつな」

「しかし奏がわしらの側についてしまつたと・・・なら次もなにか・・・」

「あるだろつな」

「・・・(コクコク)」

これ以上みんなに何かされるなんて耐えられません

「ならこつちから動きましよう」

『か、奏？』

私が静かにそう言つとみんながポカンとする

「犯人は2年でお尻に火傷のある女の子で・・・今この合宿所には2年の全ての女の子がいます」

「おいおいまさか・・・」

あ、わかりましたか雄二君・・・

「そうです。ここまでされたんですから犯人探しのついでに仕返しもしようと思います。だから・・・」

4人がゴクツとつばを飲み込みます・・・

「私達Fクラスで私を除いた2年の全女子生徒に模擬試召戦争を仕掛けようと思います」

### 37話

「私達Fクラスで私を除いた2年の全女子生徒に模擬試召戦争を仕掛けようと思います」

そう私が言い放つとなぜかみんなキョトンとしました

「な、なんだ・・・僕はてっきり女子風呂を覗こうとか言い出すのかと・・・」

「う、うむ・・・」

「そ、そんなこと言うわけ無いじゃないですか！盗撮の疑いを覗きで晴らしたんじゃない意味ないですよ」

「それもそうだよな。でも2年の女子ってざっと80人はいるよ？Fクラスが大体40人だから人数が2倍だよ？勝てるの？」

「勝てる勝てないじゃなく、勝つんです。2倍が何ですか。明久君はここまでバカにされて黙ってるんですか？」

「いやそんなことはないけど・・・」

「それにこれで勝てばFクラスをバカにしたことを撤回させれるし、負けた女の子達に命令してお尻に火傷があるか確認させることもできます」

「でもそれだと本当に女子をみんな参加させないといけないな・・・」

「

雄二君がそう難しい顔で言います

「とりあえず明日、自習の時間にFクラスの男の子に集合するように連絡してください。あと間違ってもこの合宿で覗きをしないようにって」

「ああ、わかった」

そして今日は解散しました

私の部屋は美波さんと姫路さんと同じ部屋だったけど2人とは一言も話ませんでした

そして次の日、強化合宿2日目

今日から本格的に勉強合宿がスタートします

この合宿の趣旨は他クラスと一緒に勉強することでのモチベーションの向上なのですが、Fクラスの男の子達はみんな私の近くに集合していて他のクラスと一緒に勉強する意味が無い状況になっています

「さてみなさん昨日連絡が合ったと思いますが、私達Fクラスはバカだからという理由で盗撮の疑いがかけられました」

「全く許せねえ・・・俺達を疑うだけならともかく姫に手を上げるとは・・・Cクラスの小山は死刑だな」

『異議無し!』

私の言葉にみんなが怒りを示します  
ビンタのことも連絡したんですね・・・

「それで私達Fクラスは2年の私を除く全ての女の子達に模擬試召  
戦争を仕掛けようと思います。ここまでバカにした仕返しと私の脅  
迫犯の捜査をかねてのことなので絶対負けるわけにはいきません。  
いいですね」

『我らが姫が望むなら!!』

「今日は補給を行い明日宣戦布告をし、明後日勝負の予定です。そ  
れまでは派手に動かぬように。では解散!」

「よし、とりあえず小山を殺しに・・・」

「そつだな」

うーん・・・大丈夫かな？

別にあの人がどうなってもいいけど、できれば私が直接負かしたい  
し・・・

次の日、合宿3日目・・・

《全クラスの女子、聞きなさい》

私は合宿所の中にある放送設備を使って館内に放送をかけています

《私、そしてFクラスの男子はあなた達2年の全女子生徒に対して模擬試召戦争を布告します。日時は明日10時、場所は3階フロア全域で勝利条件は全滅のみ。まさかとは思いますが逃げたりはしませんよね？逃げるなんてバカより最低な行いを御偉いあなた達がするわけ無いですよ？ああ、どこか無能な代表さんは思ってるかもしれませんがせんね。試召戦争で作戦のさの字も理解しないうちに負けたようですし。別に構いませんよ。しかしそれならあなた達は私達をバカにする権利すら無いクズでバカです。では明日10時忘れないでくださいね？ブツッ》

私は宣戦布告とできるだけ煽り文句を言います  
ここまで言われてあの女が逃げるわけないですね

「ふう……これでよしつと……」

「凄い挑発だったね……大丈夫かな小山さん……頭の血管切れてないかな？」

「さあな……でもここまで来たらもう戻れねえな……」

「うむ……後は勝つだけじゃな」

「……（コクコク）」

そして私達は放送室から逃げました……が西村先生に捕まり説教を受けました

しかしここで私に何者かが脅迫状を出したことを全て話して、模擬試召戦争の許可を取りました

まあ逃げ切れたとしても召喚フィールドを張る先生がいないとできませんからね

雄二君の腕輪だけじゃ100人も入る召喚フィールドは張れませんし……

さらに次の日、合宿4日目……

昨日先生の許可をもらったので女子は逃げられませんし、男子は邪魔できません

みなさん覚悟してくださいね……

午前9時55分

「よしお前ら！我が姫の望みは敵の全滅だ！1人たりとも生きて返すな！」

『おおーっ！』

雄二君の掛け声にクラスメイトが反応します

まあ1人でも生きてたら戦争が終わらないんですけどね

「みなさん絶対勝って女子達の鼻を明かしてやりましょう！いいですわね?!」

『殺せ殺せ殺せ！！』

あ、あれ？なんか変な方向に気合が入ってます……

チツ……チツ……カチ

「開戦だ！！全員戦闘開始！！」

『おおおおおおお！！！』

音尾奏 + Fクラス男子 42人

VS

2学年全女子（音尾奏を除く） 88人

午前10時・・・模擬試召戦争開戦

「じゃあお願いしますね。くれぐれも戦死なさらぬよう」

『了解!』

私はクラスメイトに指示を出していきます

今回は敵の人数が多く、強さもA〜Eクラスレベルと幅が広いため強固な守備と高い攻撃力、そしてそれらを維持する持久力が必要になります。前2つは私の演奏効果で引っぱり上げますし、持久力は私以外みんな男の子ですから問題ないですね

そして今回の作戦は至って簡単、こっちが攻めるのではなく相手に攻めさせる、です

索敵部隊が敵を発見し挑発、奇襲部隊の待機してる場所に誘導し困んで叩く・・・それを2チーム編成しました

「さて最初はどこのクラスが何人来るのか・・・」

「・・・(シユタ)索敵部隊より伝令、敵部隊が接近中」

「ご苦労様です康太君。では現在位置で迎え撃ちます。みなさん準備を」

『了解』

こちらのチームには主力メンバーは誰もいません。康太君は伝令班で戦闘に参加はしません

雄二君達や準主力の須川君ももう1つのチームにいます

その分こっちのチームのほうが人数が多いですけどね

「来ましたね」

索敵部隊の人が廊下の角から出てきました  
角の向こうには敵部隊がいるはずですよ

「いつまでも逃げてない・・・」

「はい、もう逃げませんよ。Fクラス音尾奏がみなさんに勝負を申し込みます。サモン」

『サモン！』

敵部隊の油断しきったような顔から血の気が引いていきます

Fクラス 音尾奏&Fクラス生徒×20 日本史 142&平均7

0×20

VS

B C D Eクラス混成 女子生徒×15 日本史 90〜180×15

どうやら連れてた先生は日本史の先生の様子ですね

召喚大会の時の徹夜勉強で140点台に乗るようになりましたね

「さあみなさん狩りの時間です。1人も生きて返してはいけません  
よ」

そうやって私は演奏を開始します

）  
）  
）  
）

『うおおおおお殺せ殺せ殺せ!!!』

うーん・・・やっぱり気合の入れ方を失敗したみたいですね  
インスタントチームで勝とうなんて甘いですね

こっちは同じクラスで連携も取れますし点差も演奏効果で無いも同  
然・・・

15人狩れました・・・つと

「向こうはどれくらいの撃墜<sup>スコア</sup>数出してるんですかね・・・」

「姫、次の部隊が接近中の模様です」

「はい、では準備をお願いします。点数が減っている人は私の護衛  
に回ってくださいね」

『了解!』

あれから大体30人くらい狩りましたかね

もう1クラスは落とした計算です。これなら試召戦争解禁されても  
設備維持は余裕ですね

しかしまだAクラスの女子とは全く当たってません・・・  
流星Aクラスですね、連携が取れる同じクラスでまとまって動いて  
いるのでしょうか

「・・・(シユタ)向こうのチームから、こちらの状況の確認要請」

「えっと、45人を撃墜、被撃墜は8名です」

「・・・了解。向こうは20人撃墜、被撃墜は9名」

「わかりました。ではそろそろ合流しましょう。あとはAクラスとCEクラス代表、そして美波さんと姫路さんぐらいですしね」

「・・・了解」

CEの代表は自分のクラスメイトと行動せずにAクラスと行動してるんですか・・・本当に代表として最低ですね・・・

「ではみなさんこれから合流地点に向かおうと・・・」

「いたわ！！Fクラス代表音尾奏！！」

「散々言ってくれたわね！覚悟しなさい！！」

うわぁ・・・残りの生徒が攻めて来ました・・・  
ちよっと不味いかもしれません・・・

「自分のクラスを捨ててAクラスに縋るあなた達に私に文句を言う権利は無いんじゃないですか？」

「「なんですって?!」」

CEクラス代表が顔を真っ赤にして言い返してきます

「ちよっと奏！言い過ぎよ!!」

「そうですね音尾さん！」

「Fクラスの裏切り者のあなた達にも私に文句は言えないかと思えますが？」

美波さんと姫路さんに私は冷たくそう言います

「姫路さん・・・4月に私達がなぜ試召戦争を始めたか知っていますか？」

「えっとそれは・・・私のためです・・・」

「それをわかっててなぜ明久君のことを信用しないんですか？それにAクラス戦のとき、あなたは確か人のためにがんばれるFクラスが好きって言ってましたよね？あなたは好きな人のことを信じないんですか」

「そ、それは・・・」

姫路さんは答えることができません

「美波さん・・・いえ島田さん。あなたもです。あなたは何をふざけているのか知りませんが私を好きって言ってますけど、あなたは私の言うことを信じないんですね。所詮あなたの言う好きなんて気持ちはその程度なんですね」

「そ、そんな・・・ことは・・・」

「無いならなぜそこまで声に戸惑いがあるんですか？もういいです。あなた達とこれ以上話すことはありません。サモン」

Fクラス 音尾奏&生徒12人 世界史 148&平均70×12  
VS  
Aクラス Aクラス生徒18人 世界史 300}399×18  
CEクラス 小山友香&中林宏美 世界史 167&101  
Fクラス 島田美波&姫路瑞希 世界史 34&395

うおお・・・これはかなり不味い・・・せめてもの救いが腕輪持ち  
がないことですか・・・  
あと私の目立たない得意不得意の中の得意科目の世界史だったとい  
うこと・・・

「そんな戦力で勝てると思ってるの？」

「虎の威を借る狐のあなたが何を言っても虚しいですね・・・」

余裕そうに言う小山さんを私は煽ります

「面倒ですからEの代表のあなたもかかってきなさい。同時にお相  
手してさしあげます」

「なっ?!相変わらず生意気な」

「そこまで言うなら行ってやるわよ。後悔させてやるわ!!」

2人が私に向かってかかってきました

「動かないなんてあなたは口だけ何もできないのかしら?!」

「所詮はFクラスの代表ね!」

「・・・ダブル」

Fクラス 音尾奏 世界史 74 & 74

「同時召喚?!」

「しまった!腕輪のことを忘れて・・・」

「忘れていた?違いますね。覚えていらなかったんです」

そう言つて私は演奏効果無しで2人の召喚獣を倒しました  
同時召喚ができるようになって1ヶ月、毎日練習を欠かしていません  
んからね

それにこの2人は試召戦争の経験も少なく、召喚大会も1、2回戦  
で敗退してますから召喚時間が私のほうが桁違いに多いです

「さて突撃代表2名撃墜つと・・・次は誰ですか?」

Fクラス 音尾奏&生徒12人 世界史 (74 & 74) &平均7

0x12

VS

Aクラス Aクラス生徒18人 世界史 300 } 399 x18

Fクラス 島田美波&姫路瑞希 世界史 34 & 395

お願い・・・雄二君達・・・早く来て・・・

### 39話

Fクラス 音尾奏&生徒12人 世界史 (74&74)&平均7  
0×12

VS

Aクラス Aクラス生徒18人 世界史 300(399×18

Fクラス 島田美波&姫路瑞希 世界史 34&395

「さて突撃代表2名撃墜つと・・・次は誰ですか？」

「どうしましょう・・・」

演奏効果を使えるようにしたいので、できればFクラスの2人を倒したいですが・・・

Aクラスの人達がそれを許してくれるとも思えません・・・

「姫路さん、島田さん、あなた達が言ってくれるかしら？」

木下さんが突然そう言いました

「え？」

「どういうことよ?!ウチらを捨て駒にする気?!」

2人は木下さんに食ってかかります

「今回の勝利条件は敵の全滅よ。あなた達がやられてもアタシ達で勝ってあげるわ。それに・・・」

「間に合ったか?!」

「みんな!!」

雄二君達のチームと康太君率いる伝令班が救援に来ました  
ちょうどAクラスを挟んで向こう側にいます

「Fクラスがこんな簡単に落とせるわけないでしょ。自分達のクラスなのにわからなかったの?」

「ぐっ……行くわよ瑞希!!」

「はい!」

2人が私に仕掛けてきます

島田さんとはかく、姫路さんはどうやって倒しましょう・・・  
この2人は連携もできてるようですし・・・

『俺達を忘れるなあああ!! 姫様には指一本触れさせんわああああ  
!!』

その時、こっちのチームの数人が2人に突撃していきました

「ダメ!! みんながないとAクラスには・・・」

その数人は捨て身で島田さんを落とし、姫路さんに倒されました

「姫、勝手な行動をお許してください。それではあとは頼みます」

倒された男の子達がそう言って下がっていきました  
どこの時代劇ですか・・・もう・・・

「姫路さん、私もね、このクラスが好き。だから、あなたには絶対負けない。恩を仇で返したあなたが許せないから……」

そう言つて召喚獣を1体に戻し、武器を構えます

「あなたの好きが本物だと言つなら私に勝つてそれを証明しなさい  
!!!」

私は姫路さんの召喚獣に向かつて突つ込みながらそう言います  
私の戦闘スタイルは基本カウンター重視で自分から攻めはしないの  
ですがあえて今回は攻めます

「私だつて……私だつてFクラスみんなが好きです！でもみんな音尾さんばかりで……吉井君も音尾さんのことばかり見  
いて……だから!!!」

姫路さんが召喚獣が大剣を振り下ろそうとします

「そんな暴力で振り向かせて嬉しいんですか、姫路さんは?!」

私は狩猟笛を左下から右上に振つて大剣を弾き飛ばします

「そんなんじゃないや誰も本当に好きになつてもらえませんか!!頭を冷  
やしてよく考えなさい!!!」

私は振り上がった狩猟笛を野球のバットのようにスイングして胴体  
に重い一撃を食らわせて倒しました

「Aクラス戦のときの、好きって気持ちで学年次席の久保君に勝つ

たあなたは・・・もういないのでしょうか・・・残念です・・・」

「音尾さん・・・？」

私は姫路さんに聞こえるかわからないくらいの声でそう呟きました

「さてあとはAクラスの生徒ですね・・・」

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&吉井明久&木下秀吉&土屋康太&須川亮&生徒11人

世界史 148&173&55&87&33&78&平均70×11

VS

Aクラス 霧島翔子&木下優子&工藤愛子&佐藤美穂&Aクラス生徒14人

世界史 399&387&367&352&300×350×14

これは勝てるのでしょうか・・・

って不安になっちゃダメ・・・挟撃だしうまくやれば絶対勝てる

「音尾さん、あなた随分と変わったわね・・・4月の頃は本当に代表なのって思ったりもしたんだけど、今のあなたはクラスの名誉を守るうと戦って・・・とても立派だわ」

木下さんがいきなりそう話し出しました

「そ、そうでしょうか・・・」

「実はね音尾さん、あたし達Aクラスは今回の盗撮に関して1%もFクラスを疑っていないのよ」

「え？」

私は呆気にとられます

「だってこんなあなたを悲しませること、Fクラスの人がするわけじゃないじゃない。たぶんFクラスはね、2年で・・・いいえ文月学園で1番クラスの結束が固い、いいクラスだと思うわ」

木下さんが笑顔でそう言います

「でも、せっかくだし・・・本気でやりましょう。あなたのクラスの結束の強さをあたし達にも見せて頂戴!!」

「はい！ダブル！」

木下さんの言葉に私は力強く返事をして副獣を呼び出し演奏を開始します

くくくくくく

「やっぱりできるようになってるわね！来るわよ！総員戦闘準備！敵の点数が自分より上と思って戦いなさい！」

『はい..』

木下さんが他の生徒に指示を出していきます

召喚獣同士の二重奏を予測していたみたいでかなり警戒していますでも私達の召喚獣の性能を何点分だと思ってるんでしょうかね？

「なによこれ?!1000点以上超えてんじゃないの?!」

「はい、多分超えてると思います。演奏効果二重奏仕様は上昇率が倍以上ですから」

わかったときは私も驚きましたよ・・・まあその分難しいですけど今回の戦闘データを渡したら学園長先生は大喜びでしょうね・・・

「そ、そんなの聞いてな・・・」

木下さんが目に見えて焦っていきます

「私も始めて言いました。だって実戦で使うのも初めてですもん」

私は笑って言います

「誰でもいいわ!演奏を止めて!」

「・・・任せて」

「代表手伝うよ!」

木下さんの叫ぶような要請に霧島さんと工藤さんが自分に向かって来た召喚獣を吹き飛ばし、こちらに突撃してきました

霧島さんは背後に変なオーラが出てきてます・・・正直逃げたいです。今すぐダッシュで逃げたいです・・・

「・・・あなたを倒して雄二をもらおう」

「ならボクはムツツリー二君をもらおうかな」

「あげません！絶対負けませんから！」

私の召喚獣の1体が狩猟笛を霧島さんの召喚獣目掛けて投げます・  
・楽器投げるのはどうかと思いましたが、霧島さんとの接近戦は小回りの利かないこちらが不利ですからね  
霧島さんの召喚獣に顔面に狩猟笛が突き刺さって召喚獣は消えましたもう1体ずつと演奏を続けています

「いきますよ工藤さん！！」

狩猟笛を投げた方の召喚獣が工藤さんに襲いかかります

工藤さんの召喚獣の武器は大斧なので無手で小回りを利かせて戦ったほうが相手は戦いづらはず・

無手の練習は雄二君の戦い方を見て独学で練習しましたからね

「こ、これは予想しなかつたなあ・・・」

苦笑しながらそう言う工藤さん  
でもこちらもあと数十秒以内に演奏再開しないと演奏効果が大幅に減少するのでピンチなんですよ

「一撃で倒させてもらいます！」

上昇した機動性能をフルに使って加速し、工藤さんの召喚獣の腹部に一撃を入れ、吹き飛ばします

「あ、あはは・・・素手なのに凄い攻撃力・・・」

工藤さんが軽く引きながらそう言います

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&吉井明久&木下秀吉&土屋康太&須  
川亮&生徒11人

世界史 (74&74)&171&54&79&25&70&平均  
58x11

V S

Aクラス 霧島翔子&木下優子&工藤愛子&佐藤美穂&Aクラス生  
徒14人

世界史 0&287&0&252&180)247x11&0x3

そして勝負は最終局面へ・・・

## 40話

Fクラス 音尾奏&坂本雄二&吉井明久&木下秀吉&土屋康太&須川亮&生徒11人

世界史 (74&74) &171&54&79&25&70&平均

58x11

VS

Aクラス 霧島翔子&木下優子&工藤愛子&佐藤美穂&Aクラス生徒14人

世界史 0&287&0&252&180 } 247x11&0x3

向こうは主力2名を含む5名の撃墜・・・それに比べてこちらの被害は微々たる物ですね

演奏効果で防御も桁違いなのでかなりいい一撃をもらわない限り落ちませんし・・・

「あーもう!どうすればいいのよー?!」

木下さんがパニックになり始めています

指揮官が機能停止して、Aクラス生徒達は動きが鈍ります

私はその隙に狩猟笛を拾い、二重奏を再開します

）  
）  
）  
）  
）  
）

「ギリギリつてところでしょうかね・・・」

演奏効果二重奏の効果が延長されました

「あー！しまった！」

木下さんが悔しそうに言います  
無手になったところを数で攻めれば私も落ちたと思います・・・残念でしたね

「一気に片をつけるぞ！」

『おおーっ！』

雄二君が混乱したAクラスに攻勢に出て討ち取っていきます

「今度は勝たしてもらおうよ、佐藤さん！」

「なっ！ちょっと！」

明久君が佐藤さんと戦闘に入りました

性能差に操作技術の差で佐藤さんに勝ち目はないですね

「さて、もうワンランク性能を上げますよ、覚悟してくださいね」

そう言っつて私はピッコロを取り出し構えます

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

私が演奏しても性能が上がるわけじゃありませんが、これでもう少し難しい曲をできるようにします

これで元の点数が低い明久君や康太君も1000点超の性能になっ

たはずです

「もう！こんな勝てるわけじゃないのよー！！」

ふふっ・・・諦めたらそこで試合終了ですよ？

Aクラスの女の子を全員討ち取ったあと、事情を話します

「なるほどね・・・それでこんなことになったのね」

「はい・・・ご迷惑をおかけしました」

木下さんがそう言い、私はAクラスの生徒に頭を下げます

「いいのよ、あたし達もAクラス設備を取り戻すために戦わないといけないから勉強になったわ」

つまり私達に仕掛けてくると・・・できれば遠慮したいですね・・・

「それで代表は、その人にそんな依頼をしたんですか？」

「・・・プロポーズの音声を買ったのは本当、でもそんな依頼はしていない」

「よし、持つてる俺の音声全削除してやる」

雄二君が霧島さんにそう言います

「まだお父さんに聞かせ・・・」

「だからお前と付き合う気はないし、結婚だなんて絶対嫌だって・・・」

「それでその音声を誰から買ったんですか？」

霧島さんの言葉を雄二君が遮るように、その雄二君の言葉を遮るように木下さんが言葉を発します

「・・・Dクラスの清水美春」

あー島田さんを狂わせた人ですね・・・

「私達のチームは見ませんでしたけど雄二君達のほうで倒しましたか？」

「いや俺らも見えてないな」

「え？じゃあまだ模擬試召戦争続いてるんですか？」

「そうみたいだな。よし全員Dクラスの清水を探し出せ！！」

『了解！』

「木下さん、西村先生に脅迫状の容疑者として清水さんが上がったことを伝えてもらえますか？」

「わかったわ。じゃあがんばってね」

「はい、ありがとうございます」

「さて・・・とりあえず、なんでこんなことをしたのかを聞きましようか？」

あのあと清水さんを発見し撃墜、西村先生と高橋先生（一応女の子の荷物ですから女性の高橋先生が主導で）が荷物検査を行い盗撮に使われたカメラと同型の物を発見し、本人を問いただしたところ、脅迫状も含めて全て認めため、こうして動機を聞いています

「ふん！泥棒猫からお姉さまを取り戻すためですわ！！」

清水さんは悪びれもせずそう言いました

「なんだ、じゃああなたの目的は達成されたんですね。おめでとうございます」

「嫌味のつもりですか？」

「嫌味？私は心から祝福してますよ。私にそっちの趣味はありませんからね。それに私の好きな人達を傷つけるのなら誰であろうと私の敵であってその人のことは嫌いです。よって島田さんも私の敵です。これで満足ですか」

「ええ、満足ですわ！あなたに勝てたんですから！」

そう清水さんは勝ち誇るように言います

「そうですか。ならよかったです」

私は清水さんに背を向けてそこから去ろうとして・・・

「しかし、私に拒絶される原因を作ったあなたに島田さんが振り向くとは思えませんかね」

そう言い残して私は清水さんの前から消えました

「はぁー疲れた・・・」

私や雄二君達は食堂で夕食を食べながらホッと一息ついています

「大変だったけど脅迫犯も見つかったし、これで安心だね」

「・・・(コクコク)」

「ああ、俺も自分の知らないうちに勝手に結婚させられるところだったしな・・・」

雄二君が心の底からホッとしているように見えます

「じゃが人数差が2倍でも負けないとすると試召戦争はもう負けることはないんじゃないか?」

「秀吉君、ダメですよ。油断していたらAクラスの二の舞ですよ」

「そっじゃの」

油断している秀吉君を注意はしていますが私の顔も笑っていると思います

でもやりようによっては私達のクラスに勝つ方法ってあるんですよ・・・

召喚獣勝負じゃなくペーパーテストで勝負とか

まあそんな条件受け入れる気はないですけどね・・・

「姫、一大事でございます」

そんな私達にクラスメイトの数人が慌てながら近づいてきて声をかけてきました

だから何で時代劇口調・・・？

「どうしましたか？」

「他のクラスの男子が覗きの計画を立てている模様です」

「覗き？僕らがあんな目にあつたのに、よくそんなことする気になるよね・・・」

「大方俺らが全クラスの女子を倒したから、男子が調子に乗り始めたんだろっつな」

「それが本当ならFクラスへの女子からの風当たりも強くなるのう・・・」

そうでしょうね・・・CEクラスの代表なんかはFクラスのせいにしてないと気がすまない思考回路ですし・・・

「はぁ・・・とりあえず西村先生にチクッておいてください」

「わかった」

クラスメイト達が去っていきまして  
今日は荒れに荒れますね・・・

#### 40話（後書き）

清水との会話の「敵」という言葉についてですが奏は根っここのころが子供で、子供が不機嫌になって駄々をこねて「みんな大っきらい！！」って言うてるのと同じ感じ

## 41話

そしてお風呂の時間ちよつと前・・・

場所はFクラスが自習に使っていた広間

「えーっというわけで、私達は女子風呂警備をしなければいけなくなりまして」

私はFクラスの男の子達を集めてやる気無さ気に話しています

あのあと西村先生から女子風呂の覗きが出たら捕獲を手伝うように要請されました

「私としては非常にどうでもいいんですが、Aクラスは私達を信じてくれていましたので、その気持ちに報いるために警備要請を受けることになりました。正直、Aクラス以外の女子が覗かれようが私の知ったことではありませんが、そうはいかないみたいですし、ついででやることになりました」

私は脅迫犯が女子生徒だったので個人風呂を用意してもらいましたから本当にどうでもいいです

「まずは敵戦力の確認ですね、須川君お願いします」

「わかりました。FFF団の調査によると敵戦力は我々Fクラスを除いた全ての男子のようです。大体120人くらいです」

うわぁ・・・さっきの戦争より敵がさらに30人くらい増えましたね  
もう3クラスまとめて相手するような感じですね・・・

「雄二君、何か良い案ありませんか？」

「そうだな・・・防衛戦だし守備に徹すればなんとかなるが・・・それだと捕獲はできないしな・・・」

「いえ、捕獲は正直どうでもいいです。私達の目的は覗きの妨害のみでいきましょう。足止めできれば、あとは先生が捕まえてくれるでしょう」

変に逆恨みされるのも嫌ですしね

「よしじゃあ今回はこれでいくぞ。主力教科はそうだな・・・保健体育だな。受験に使えないからAクラスでも腕輪クラスの高得点を取る生徒もいない」

康太君と工藤さん以外は、ですね

「わかりました。昼間の戦争で私達は保健体育は使っていないんですが、そちらのチームはどうですか？」

「大丈夫だ。こっちも使っていない」

「なら次にどこに拠点を置きましょうか？」

「1階ロビーだな。風呂場に行くには絶対通らないといけないし、ある程度広さもあって戦闘もしやすい」

これで迎え撃つ準備は整ったでしょうかね？

「何だお前ら?! Fクラスの癖に俺らの邪魔をすんのか?!」

「ああ、そつだFクラスがお前らクズどもに勝負を申し込む、サモン!」

『サモン!』

雄二君の召喚の掛け声に私やみんなが続きます

「召喚獣だと?! こつちは100人以上なんだ、お前らが勝てるわけ・・・」

この人達は私達がどうやって90人近くいる女子に40人ちよつとで勝ったか知らないのですね  
それに勝つ必要は無いんですよ

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 13

2 & 6 0 4 & 平均 7 5 × 4 0

V S

Fクラス以外 男子生徒 計 1 2 2 保健体育 7 0 } 3 5 0 × 1

2 2

「ダブル!」

} } }  
} } }  
} } }  
} } }

私は最初から自分の限界の難易度の曲を演奏します

今回は教科担当の先生と一緒に西村先生と高橋先生も保健体育で召喚フィールドを展開して、それらをつなげて通常の3倍の広さのフィールドを形成してクラス全員に効果が行き渡るようにしています捕獲は考えてませんが長期戦はきついで相手の全滅or戦意喪失狙いの超短期決戦です

「お前ら！俺達Fクラスと奏の名誉のために絶対ここを通すな！！」

『おおおおおおおーっ！！』

私はとにかく演奏に集中し、康太君が腕輪を使って多方向から高速で奇襲していき、それ以外のメンバーはバリケードで向かってきた人を倒していきます

「クソッ防御が固いな・・・Aクラスを前に出せば・・・」

はあ・・・この人達もAクラス頼みですか・・・

それにしても足止めできてるんですから先生達もさっさと捕まえてくださいよ・・・

西村先生以外は生徒1人捕まえられないんですか？

「おい鉄人！なんで他の教師どもはこいつらを拘束しねえんだ？！」

「他の教員は女子風呂前の最終防衛ラインだ。お前らが防ぎきれるとは限らんからな」

何ですかその対応・・・

私は曲の難易度を下げ、自分の演奏を止めます

〃  
〃  
〃  
〃  
〃

「西村先生、私達は先生達が手が足りないから仕方なく手伝ってあげてる立場ですよ？そんな信用してないのなら今すぐ戦闘を止めて部屋に帰りますよ？いいんですか？」

「ぐっ……だ、だがな……」

西村先生が何かを隠しているような感じですね……

「おい鉄人、何を隠している？話さないと本当に俺達は戦闘を止めるぞ？」

雄二君も気付いたようで先生に問いただします

「しかしこれは元はと言えばお前らが……」

「Fクラスのみなさん、戦闘を……」

「わかった！話すから戦闘を続けてくれ！」

西村先生が慌ててお願いしてきました  
最初からそうすればいいんですよ

「がんばってくださいね」

『おおーっ！』

「はぁ……俺を強請るとは音尾もだいぶFクラスに染まったな……」

」・

西村先生が疲れたようにそう言います

このクラスにいたら強くもなりますよ・・・

「実はな・・・学園長からの指示だ。お前の召喚獣の実戦データがほしいからと言われてな・・・」

また学園長先生ですか・・・

#### 41話(後書き)

へそを曲げて、腹黒くなっている奏・・・  
あり？なし？

## 42話

「ババアの指示だと？」

西村先生の言葉を聞いて雄二君が先生を睨みます

「そうだ、実は毎年この合宿では女子風呂覗きが出ていてな・・・  
男子対女子の模擬試召戦争が行われているんだ」

ずいぶん嫌な恒例行事ですね・・・

「もちろん男子が勝っても俺達教師が捕まえるから覗きが成功した  
ことはないぞ。つで今回はお前らの1件で前3日間は何もなかった  
んだが、今日お前らと戦って疲れた女子を狙ってやってきたという  
ことだろうな」

「つで、それとババアがどう関係するんだ？」

「今回のFクラス対女子の戦争でお前らが勝ったことを報告したら、  
もっとデータがほしいから何かあったらFクラスに対応させるとい  
う指示がきたんだ」

「あんのババア・・・」

はあ・・・つまり教師は誰も生徒を拘束しないと・・・

「持久戦も覚悟しないといけませんね・・・」

そう言っって私は演奏を再開します

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6  
6 & 6 6) & 6 0 4 & 平均 7 4 x 4 0

V S

Fクラス以外 男子生徒 残り 1 0 4 保健体育 7 0 ) 3 5 0 x  
1 0 4

「おいAクラス！さつさとこんな奴ら蹴散らせよ！」

『そつだそつだ！それでもAクラスか?!』

突破できない男子達がAクラスに当たり始めています  
Aクラスの男子は24、5人つてところでしょうかね？

「おい鉄人、こんなくだらないことに巻き込んだんだ。しつかり礼  
はもらつぞ」

「学園長に言つてくれ」

西村先生がもう勘弁してくれと言わんばかりにそつ言いました

「よし、明久！秀吉！俺と一緒に突つ込んで攪乱するぞ！」

「わかつた」

「わかつたのじゃ」

雄二君は主力2人を連れてバリケードの外に出て行きました

「オラオラ、もちつと齒ごたえのある奴はいねえのか?!」

「うわーなんか 国無双みたいだ」

「スカツとするのう」

男子のみんな、ご愁傷様

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6  
6&66) & 604 & 平均70x40

VS

Fクラス以外 男子生徒 残り78 保健体育 70(350x78

「りよ、呂布だあああああ!!」

誰のことですか?つとというかせめて関羽でしょ、秀吉君の武器が薙  
刀ですし・・・

いや、秀吉君ならお姉さんと合わせて大喬小喬というのも・・・

雄二君は孫策で、明久君は甘寧?康太君は高速戦闘だから張?かな?  
とくれば私は武器が笛ですから甄姫ですか?なら曹丕は?ライバル  
キャラの月英は?

まさか月英は小山さんですか?なら諸葛亮は根本君・・・  
似合わなさ過ぎる・・・あ、ダメ・・・おかしすぎて集中力が・・・

「お、音尾?どうした?笛の音が震えているぞ?」

はっ・・・いけないいけない集中集中・・・

これはあとでみんなとの話のネタに・・・

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6  
6&66) & 604 & 平均68 x 40  
VS

Fクラス以外 男子生徒 残り68 保健体育 70 (350 x 68

「邪魔だあああああああああ!!」

今度は張遼?! しかも空耳まで再現?!

「馬鹿めが!!」

司馬懿まで・・・もう限界・・・

「あはははははは・・・もう集中できない・・・ダメ・・・おかしくしてお腹痛い・・・」

私は演奏中に笑い出してしまう召喚獣の演奏も止まってしまう

「ちよつ?! 奏?! 今演奏を止められると・・・」

「突っ切れえええええええ!!」

「突っ切らせないわよ! サモン!」

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6

6&66) & 604 & 平均55 x 40

Aクラス 工藤愛子&女子生徒17人 保健体育 483 & 28

0 (390 x 18

V S

Fクラス以外 男子生徒 残り66 保健体育 70 350×66

「げえ?! Aクラスの女子だと?!」

男子達が一気に攻めてこようとしたところでAクラスの女子が援軍に来てくれました

正直危なかったです・・・

「音尾さん、笑ってないで演奏を続けなさい!」

「は、はいっ!」

木下さんに怒られて私は慌てて演奏を再開します  
っていうかあなた達のために戦ってるはずなのに、あなた達がお風呂に入らないんじゃないですか・・・

くくく  
くくく  
くくく

「Fクラスと協力してバカどもを退治するわよ! 戦闘開始!」

『はい!』

「ムツツリーニ君、倒した数で勝負しよ」

「・・・勝手にしろ」

高得点同士がそんな会話をしてバツバツ倒していきますね

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6  
6&66) & 604 & 平均55 x 40  
Aクラス 工藤愛子&女子生徒17人 保健体育 483&27  
8)387 x 17

VS

Fクラス以外 男子生徒 残り50 保健体育 70)350 x 50

「・・・じゃあ雄二、私が勝つたら私と・・・」

「そんな勝負しねえよ！揚げ足取るの目に見えてるからな！」

あつちはあつちで言い合いしながらも着実に倒していつてますね

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6  
6&66) & 604 & 平均55 x 40

Aクラス 工藤愛子&女子生徒17人 保健体育 481&27  
2)383 x 17

VS

Fクラス以外 男子生徒 残り32 保健体育 75)300 x 32

「召喚獣の操作の練習にうってつけね」

「油断しとると足元をすくわれるぞ、姉上！」

おお・・・姉弟で背中を預けあつて絵になりますね

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6  
6&66) & 604 & 平均55 x 40

Aクラス 工藤愛子&女子生徒17人 保健体育 478&26

7 3 7 9 x 1 7

V S

Fクラス以外 男子生徒 残り13 保健体育 100 250 x

13

もう攪乱されすぎてバリケード班が仕事がないですね

「今度こそ私が勝ちます!!」

「ちょ?!佐藤さん?!僕は敵じゃないよ!!」

佐藤さんが暴走してますが、まあ問題ないですね

Fクラス 音尾奏&土屋康太&他男子生徒40人 保健体育 (6

6&66) &604 &平均55 x 40

Aクラス 工藤愛子&女子生徒17人 保健体育 483 & 26

5 3 7 5 x 1 7

V S

Fクラス以外 男子生徒 残り0 保健体育 0

うん・・・凄い一方的な虐殺でしたね・・・

「お前ら!これから明日の朝までたっぷり補習をしてやるからな!その後処分もあるから覚悟しろ!」

西村先生の言葉を聞き男子達はみんな悲鳴を上げました

処分通知

2年A B C D E組男子生徒全員

上記の者達全員を3日間の停学処分とする

2年D組清水美春

上記の者を7日間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

## 42話（後書き）

これでこの作品は終わりです

中途半端で申し訳ありません

今回の教訓をちゃんと次回に生かします（あればですけど）

最後に期末試験編で考えていたネタを1つ

玲さんが奏を一目で気に入り

「奏さん、（アキ君と結婚して）私の義妹になりませんか？」

あれ？姉テスと似た展開じゃん、っと思ってボツに・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7658r/>

---

え？代表？私がですかあ？！

2011年5月29日15時42分発行